

川柳塔



昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十六年五月一日発行(毎月一日発行)
創刊大正十三年 通卷一〇四四号

日川協加盟

No.1044

五月号

第20回 川柳塔まつり

川柳雑誌・川柳塔90周年記念川柳大会

と き 平成26年10月4日(土)

開場：午前11時、出句締切：正午、開会：午後1時

ところ ホテル・アウィーナ大阪 4階 金剛の間

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12 (近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車) 電話 06-6772-1441

《同人総会・議事》午前10時より

平成25年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告

平成26年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《各賞表彰式・記念句会》

祝 辞 (一社)全日本川柳協会 理事長 大野 風 柳 氏

表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞

おはなし 「文化人とは誰を言うのか」『上方芸能』発行人 木津川 計 氏

兼 題 「団 体」 川 柳 塔 社 川 上 大 輪 選

「降 る」 川柳文学コロキウム 赤 松 ますみ 選

「か たち」 びわこ番傘川柳会 徳 永 政 二 選

「ゆっくり」 川 柳 塔 社 西 出 楓 楽 選

「ソ フ ト」 番 傘 川 柳 本 社 田 中 新 一 選

事前投句 「輝 く」(9月1日必着) 川 柳 塔 社 小 島 蘭 幸 選

◎各題2句・勝手ながら欠席投句は拝辞させていただきます

出句締切 正 午 (午後5時頃終了予定) ※各題の「天位」に賞呈

◎会 費 3,000円 (当日頂きます) ご昼食は各自でお済ませください

◎ 呈 小島蘭幸川柳句集・記念品

《 懇 親 宴 》

と き 平成26年10月4日(土) 午後5時～7時

ところ ホテルアウィーナ大阪 3階 葛城の間

☆会 費 7,000円 (会席料理) 先着申込み 130名様

☆宿 泊 ホテル・アウィーナ大阪 8,000円 (朝食付き)

*事前投句および懇親宴のお申込はチラシに刷りこみのハガキ(ご希望の方は事務所)にて
9月1日(月)までに本社事務所宛、お送りください。

*懇親宴のご送金(句会費除く)は同封の振込用紙でお願い致します。

主 催 川 柳 塔 社

大阪市天王寺区大道1丁目14-17-201
〒543-0052 ☎・FAX 06-6779-3490
振 替 0 0 9 8 0 - 4 - 2 9 8 4 7 9

創立85周年記念

ふあうすと川柳大会

小島 蘭 幸

記念大会に出席するために、私は新幹線こだまに乗りました。三原を出るとすぐに松寿寺の全景が見えました。境内には岸本水府先生の句碑が建立されているのです。尾道は千光寺、私は麻生路郎先生の文学碑を想像していました。桜と比翼の句碑……。そうしてふあうすと川柳社の85周年の歳月の重さを振り返っていたのです。

神戸には梶元紋太先生の句碑が二基建立されています。

よく稼ぐ夫婦にもあるひと休み
皆咲けば百花繚乱妻の庭

会場の兵庫県民会館で受付を済ますと、赤井花城主幹から祝辞の依頼がありました。12時10分、司会の村上氷筆氏の挨拶で開会。私は、私の川柳人生に大きな影響、刺激を与えて下さいました、ふあうすととの柳人の皆様とのエピソードを紹介しました。田中好啓、伊藤勢火、増井不二也、去来川巨城、泉比

呂史、懐かしいお名前ばかりです。ふあうすと川柳社のますますの飛躍を願っています。

平成二十五年度年間表彰では、我が川柳塔社から水野黒兎さんが紋太賞正賞、居谷真理子さんが紋太賞準賞を受賞されました。

講演は「川柳で楽しく学ぶ健康法」と題してふじえクリニツクの藤江忠夫先生。スクリーンに映像を映しながら、ユーモアを交えてお話をされました。65歳からの病氣、認知症、ドキツとするタイトルも川柳を紹介されながら聞くと、自然に笑顔になつてくるのが不思議でした。

続いて、いよいよ7名の選者の披露です。川柳塔からは新家完司副主幹が「うさぎ」の披露をされました。披露の前に、合同句集川柳塔への応募をユーモアたっぷりにお願いされました。「うさぎ」もそうでしたが、全体的にユーモア句が多かったように思います。どつと会場が湧く作品が多かったのです。この反応の良さは、もしかして藤江先生の講演の影響かなと思つた程でした。「動いて、川柳を考えて、大いに笑う」この健康法に納得です。

久しぶりに森中恵美子、大野風柳先生の披露を聞くことも出来ました。「節目の大会には、なるべく出席するように」橘高薫風先生からいただいた魔法の言葉にも、納得の一日でした。

座右の句

濡れた手で句想メモする台所

(楓 楽)

私の句

胸中に風が吹く日は鍋みがく

富田 保子

川柳塔 五月号 目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「但馬和佐父」

■巻頭言 創立85周年記念 ふあうすと川柳大会……………小島 蘭 幸…(1)

ブータン節穴見聞録……………新 家 完 司…(2)

川柳塔(同人吟)……………小島 蘭 幸 選…(4)

川柳塔の川柳讃歌 ⑩……………木 津 川 計…(45)

自選集……………(46)

温故知新……………(49)

水煙抄……………川 上 大 輪 選…(50)

西尾 栞句抄……………(71)

誹風柳多留一二篇研究 11……………(72)

新川柳鑑賞 ⑳……………麻 生 路 郎…(74)

英語 de Senryu ⑳……………吉 村 侑 久 代…(75)

愛染帖……………新 家 完 司 選…(76)

檸檬抄 「心」……………竹 治 ち か し・大 内 朝 子 共 選…(80)

ブータン節穴見聞録

新 家 完 司

山の稜線をかすめるように
飛行機は谷間の滑走路に滑り込んだ
ブータン王国唯一の空港パロ
首都ティンブーに向かってマイクロバス
標高二千メートルほどの山の中腹に道
舗装されているが、傷んで凸凹
山を傷つけるのを畏れるかのように
トンネルはない、切り通しもない
山のかたちには添うように、造られた道
急カーブ、また、急カーブ
見えるものは、山と谷川、段々畑
岩山が多く木はまばら、民家ちらほら
草も枯れて、風景は薄茶色
春になれば、緑深い谷になるのだろう
すれ違うのは、工事用のトラック
自転車はない、バイクは少し
道端の作業者はインドからの出稼ぎ
40分ほど走って、ようやく小さな村
洗濯物を干している婦人、談笑する男
みんな、決まって民族衣装
姉と弟か、十歳と七歳ほど、今は冬休み
牛を追いながら笑顔で手を振ってくる

「一途」

一路集「サポート」……………塩満 敏選…(83)

「そこそこ」……………楠見章子選…(84)

初歩教室「コレクシヨ」……………多和敬子選…(85)

川柳塔鑑賞……………山口光久…(86)

水煙抄鑑賞……………吉岡 修…(88)

江戸を楽しむ⑩⑪……………佐藤古拙…(90)

追悼 木村貴代子さん……………小栗清吾…(91)

民族の詩歌(23)……………西口いわゑ…(92)

せんりゆう飛行船④⑤……………三好專平…(93)

津軽発おもしろ景色②①……………新家完司…(94)

四月本社句会……………高瀬霜石…(95)

句会燦燦……………井上一箇…(96)

各地柳壇(佳句地十選)寺川弘一・長浜美籠……………(101)

五月各地句会案内……………(114)

柳界展望……………(116)

■編集後記……………朱夏・まつお…(118)

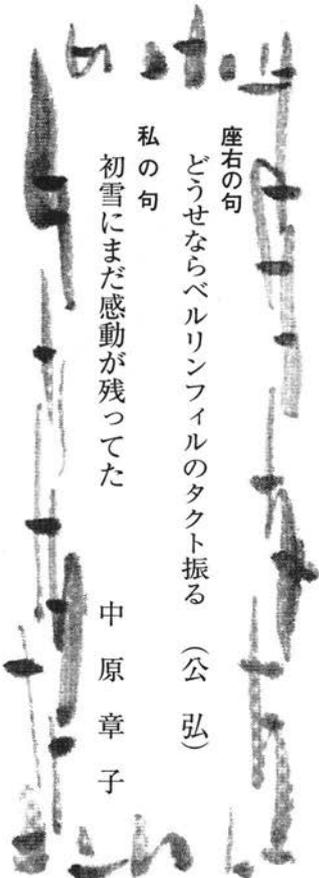
座右の句

どうせならベルリンフィルのタクト振る (公弘)

私の句

初雪にまだ感動が残ってた

中原章子



村を離れると またカーブ 急カーブ
 ようやく到着した首都ティンブー
 車は多いが 信号は一つもない
 建設ラッシュ 五、六階建てであつても
 足場は中国と同じ 竹を組んだもの
 レストランでの食事 インドの影響か
 香辛料強く、口に合わない
 白米は バサバサのインディカ米
 トイレの便器一つだけ 男女順番に使う
 ティンブーを離れ 旧首都のブナカへ
 またS字カーブ カーブ カーブ
 山道を 揺られ揺られて二時間ほど
 旧都ブナカ のどかで美しい町
 異国情緒あふれるゾンという建物
 昔の砦 現在は庁舎と僧院を兼ねる
 県知事と大僧正 同じ地位とのこと
 ゾンの中庭 若い僧がほほえみかける
 ロバ一頭 繋がれてのんびり
 ブナカの宿 一戸ずつ離れたコテージ
 ベッドに寝て ここにすることが不思議
 はるばる揺られ来て 山を 清流を
 古い農家を 穏やかな人々を 見て
 また はるばる戻り 国とは 文化とは
 幸せとは等を 深く考えさせられた旅
 帰路の中国自動車道 勝央SA
 きつねうどんが はらわたに沁みた



小島蘭幸選

樞原市 居谷 真理子

春がきた誰も拾わぬ手袋に
赤い実を食べたね美しくなった
精一杯燃えてみましたボヤでした
裸木の言葉聞いてから変わる
友達ができない町に立つポスト
私にも輪ゴム程度の強かさ

弘前市 福士 慕情

納豆の粘りに妥協してしまう
安近短妻の荷物が多すぎる
鳩時計律儀なハトを飼っている
潮騒の内緒話に耳を貸す
人間に成ろう成ろうと脚を組む
豪雪を知らぬ都会の雪の嵩

松江市 石橋 芳山

妖怪の住み付くおでん鍋の底
大見栄を切れば写楽のしゃくれ顎
壇蜜をたっぷり舐めて眠れない

夕方の蟻は駅裏へと向かう
足早にけれどが通り過ぎてゆく
わたくしを緑に塗ってしまおうか

紀の川市 辻内 次根

牛乳にパンにバナナのフルコース
麦ごはん腸まで届く舌触り
花の絵を描いて真理に行き当たる
転ぶから安定剤の処方箋
推敲を重ねて消える一生も
振り向くと誰もいなくなっている

松江市 川本 畔

雪ん子が積もる話があるらしい
窓ガラス少し汚して恙なし
蛇口から大事なことが出てこない
座布団の隅に言葉を探している
しばらくは薬師壁画の月となる
ポンと背中叩かれそうな日曜日

三田市 久保田 千代

切り詰めた予算が選ぶ春の旅

合格へ厳しい言葉とのし袋

子には子の言い分があり聞くゆとり

靴下を外して入る春炬燵

叛かれた朝の鏡に鬼が棲む

女三人男を皿の上に載せ

和歌山市 木本 朱夏

にっこりと仲間を庇うサクランボ

賞味期限がある流行もお豆腐も

本棚の隙間はわたくしの挫折

暗闇でわたしを視てる目が怖い

捨てるには惜しい男の靴がある

洗い晒しのジーンズ春が馴染まない

大阪市 谷口 義

集中力は一時間が限度です

おっとどっこい伊達には歳を取ってない

靴下をはくと少しはごまかせる

こんなんです機嫌が悪いわけでない

水分代謝が只今反抗期

生きて来た証しを虫が喰っている

堺市 栗原 道夫

幸せいっぱいの画鋏が押してある

一流のホテルで用を足している

監視カメラに映っていたカラス

関東弁で喋っているオタク

安全ピン鞆の底に入れたまま

泣くことを覚えてからのシャボン玉

弘前市 高瀬 霜石

自転車漕ぐ漕ぐ今が旬である

火種にはこと欠きません世界地図

ストローを噛る合槌打ちながら

追伸の追伸があり覚悟する

スリムだったばかりセピア色の写真

お日さまが沈みようやく人になる

富田林市 中井 アキ

むらさきの心模様は懺悔です

人情に触れると熱くなる鏡

モノクロの乳房が疼く水子塚

凍て蝶も私も軽い自閉症

亡夫の掌に触れた気がする霧の里

末席の正義が波を立てている

鳥取市 森山 盛桜

世渡りの身の程どこら辺に置く

原点はチャンバラ僕の正義感

使いこなせぬ切れの良い裁ち鋏

アメダスで予測も出来ぬのが怪気

目札をされて去られた寂しさよ

いくつかの微罪アリバイ有りません

倉吉市 牧野芳光

寒いから胸の扉も閉めておく
暑い寒いくらいで折れる心持つ
戦場のように護岸の工事する
焚き火さえ出来ないヘリが飛んでくる
良いことは小出し小出しにして話す
当面の課題はウエストの管理

札幌市 三浦強一

お祭りの金魚が部屋の主の貌
やあやあと名前の出ないまま別れ
蟻と象命の重さでは同じ
核戦争相打ちという世の終り
福島のリんごを買ってくる支援
蕎麦打ちに挑戦という粉まみれ

篠山市 酒井真由

あなた老ゆ私も老いるほっこりと
青春残像老いはいつそく飛びに来る
お見合いも恋した数もおぼろにて
エプロンを脱いで女に戻るとき
一人旅最古の森に辿り着く
禁断の恋もあるべし雁渡る

唐津市 坂本蜂朗

最後かと思う傘寿の畳替え
少年の視線思わず正す襟
カンパするされる人生裏表

先伸ばししてた返事が水を吸う
後退りしつっ誇りが吠えたがる
雷の拳意外に柔かい

吹田市 山本希久子

日の長さそれでも足りぬ二十四時
春のカーテンひらひら命洗濯す
散歩から散歩この世の旅続く
優先順位まずごはん炊く昼寝する
両腕に荷物バランスとついている
あべのハルカススカイツリーに遠くいる

寝屋川市 森

茜

歳月がもういいでしょと背を撫でる
まっ青な空から貰うまつ赤な実
心もち頷くことで通じ合う
干し柿はけろりとしぶを抜いている
おばあさん仕様になつて風邪の背な
勘違いとほとぼり夕日つれてくる

河内長野市 山岡富美子

まごころをうつす鏡はありますか
雨の坂鎮痛剤がまだ効かぬ
きざまれた葱の匂いよ自尊心
鳩尾に昨日の悔いがうずくまる
花曇り失くした恋はどの辺り
万歩計桃源郷をめざすなり

鳥取市 岸 本 宏 章

大阪都構想いいじゃないですか

高校の入試今では手に負えぬ

百回忌木魚が耳に心地よい

おしゃべりとスピーチ別の舌がある

達人の失敗談がおもしろい

金持つと金の亡者になつてくる

鳥取市 岸 本 孝 子

雪国に雪のないのも味気ない

家中を明るくさせるおひなさま

健康であれば何とかなるこの世

失礼がないように見る計報欄

風邪ひかぬようにいただく猪口二杯

マネキンの服が着たくて腹六分

出雲市 伊 藤 玲 子

復興の遅れいらいら私にも

隠岐の海勝てば豪華になる夕餉

エレベーターほっと息づく椅子がある

うっかりは多産系らしました生まれ

ため息も使い果たして天仰ぐ

水鏡ピエロが一人写っている

和歌山市 松 原 寿 子

選択肢まだあるはずだ春の森

五パーセントへ財布誘惑されている

春の嵐が傘いっぽんを無駄にする

一旦停止して人生を駆け抜ける

耳元へ寄せれば春の声がする

ドクターはいつも辛口歯切れよい

大阪市 榎 本 日 出

選挙ともなれば敵です妻の票

ライバルと思っていない無二の友

老眼鏡拭けばやる気が湧いてくる

遊んでるように見えるがこれ仕事

宇宙とは凄い地球を産んでいい

老人と言われてからは走れない

高知市 小 川 てるみ

春霞今日は黄砂か微粒子か

もしもしの電話の声に顔がある

書き出しはソフトでの的をついている

花束に笑顔が映える春弥生

オペラハウスが迎えてくれる空の旅

パスポート財布のひもも半開き

三田市 福 田 好 文

土破り芽吹く音聞く春の畑

消しゴムで消せる程度の傷で病む

法事する度にルージユが濃ゆくなる

母ちゃんと泣きたい時が今もある

早く寝てゆっくり起きる僕のエコ

年金日夫婦で春を買いに行く

藤井寺市 鴨 谷 瑠美子

ときめきを忘れさせない花だより

薄着して春を試したまでのこと

苦勞人だなほほえんで聞いている

しだれ桜今年は違う人に行く

好きはいつか嫌になりそう紙一重

山頂にあるかも知れぬ母の国

西宮市 亀 岡 哲 子

春風をキャッチして鳴るイヤリング

仮想寿命百と二十を視野に置く

アンケートマルばかりを書く不覚

雛祭り苺ムースの介護食

不揃いはないデパートの苺たち

お喋りを半分こして長電話

西宮市 緒 方 美津子

春ですねポニーテールの上下して

匂い立つ三月号の梅一木

断捨離を思えば思うほど寂し

姑の手作り切子でお出しする梅酒

誘われそうで迷彩服は子に着せぬ

待つことも手打ちそばならいとわない

橋本市 石 田 隆 彦

蟄虫のささやき木の芽萌えさせる

梅に願かけ桜でしめる受験

堂々とラスト飾った真央の笑み

十指みな元氣感謝の鶴を折る

今日の幸へ温もり添えて陽が沈む

じかに観る五輪へ元氣守り抜く

弘前市 浅 田 隆 樹

春よ来い下駄箱にある冬のうつ

雪野原赤いマフラー落ちている

太巻きを食べたら次はチョコレート

明日から明日から節制いたします

人当たり良い人家でわからずや

秒針が一瞬止まる夜の不安

堺市 矢 倉 五 月

赤も良い白も旨いとワイナリー

舌下錠含みサヨナラ言うつもり

お花見を口実に逢う年一度

わたくしがわたしに開き直り見せ

洗濯のどれを畳めどみなわたし

ありがとう元氣でしたお姉ちゃん

神戸市 山 口 美 穂

風の囁きつめたいけれど春ですよ

葬送の帰りは同窓会になり

これしきの額で申告春寒し

春の光に騙されコート of の衿を立て

春の使者と言うには辛い黄砂来る

またジョーク真顔の君が憎らしい

寝屋川市 籠 島 恵 子

人間の柵抜ける靈柩車
懐の深い男の不愛想

正装で今日は本音の吐けぬ酒

京都市 高 島 啓 子

わたくしを秤にかけた跡がある
言葉選びしてしまします初対面
口止めをされて忘れることにする
あらかたの事が済まないまま齢

早咲きのさくらに声をかけている

ありがとうで済ませてしまいうことが増え

河内長野市 村 上 直 樹

増税に沈む家計よ春の鬱

根気よく良薬は日に二三合

やんわりとご指示妻には逆らえぬ

囁きにもなんやと補聴器の無粋

年輪の皺梅干しの滋味旨味

ピーク越えさあ円熟の喜寿米寿

和歌山市 岩 本 美 智 子

年女とはいわぬらし誕生日

身体ばかりか頭とろとろ日向ぼこ

卒業写真みんなちがった顔してる

サーピスは当り前だというピエロ

年金減消費税増米を買う

戦争を知らぬ人らの棹さばき

三田市 北 野 哲 男

内と外リバーシブルな夫です

教養と無縁で楽に生きてます

日向ぼこ姑が充電してる顔

人間の柵抜ける靈柩車
懐の深い男の不愛想

正装で今日は本音の吐けぬ酒

京都市 高 島 啓 子

呼ばれるまで入ってはいけません

大方は受け入れているポスト

役に立つまでとっておく端切れ

頭数には入っているらしい

雑費にしておく使途不明金

口笛を吹いて凌いでいるのです

松原市 森 松 まつお

三年もたつていたのかあの日から

春闘ヘスクラムの汗久しぶり

夜更かしの癖が抜けないままで春

半額のシールにとても弱い妻

愚痴言える友が不在で溜まるウツ

休肝にしようと思つて朝は思つてる

許したらハッピーエンドだったのか

森の香の一滴好む洗濯機

偏差値などで比べないで下さい

手作りの梅干すっぱめも旨い

揺れながらとほけていようやじろべえ

いつの日か錆びた鎖を外そうか

三田市 北 野 哲 男

三田市 北 野 哲 男

鳥取県 齊尾 くにこ

潰れてる恋の想い出喫茶店

おにぎりになりたいぎゅつとされてたい

肯定も否定もされぬ悩ましき

遊びがあつて夫婦のリボンほどけない

活字からにゅつと掌が出てパンチする

重すぎてこころひとつが受け取れず

大阪府 初山 隆盛

切り札も日の目見ないと徴びてくる

生きる章死ぬ章文は綾をなす

善人の仮面重たく今朝は脱ぐ

どんでん返し風を信じて逢いにゆく

歯ぶらしが一本鎮座するくらし

雨の日は良からぬ策と話し合う

尼崎市 春城 年代

夢に見た亡夫は元気でもろ手振る

次の世があるならきつと探しだす

雨上り土の匂いはもう春だ

サブリメント転がせている浅い春

弟が居たそれも三年前のこと

染めむらもおもむきになる春の暖簾

神戸市 白川 淑子

駄馬だから見える景色も春の土手

御馳走の後はぶ潰け我家流

お向かいの家族構成いまだ謎

なぞなぞの新ネタ仕入れ孫が来る

タカジンが逝く東京がなんぼのもんじゃ

もう何も起こらぬ夜の五七五

出雲市 竹治 ちかし

多数決一対一で妻の勝ち

美しい話をくれたスキー板

ガラストレーの中の命が抱くロマン

気休めを語り三年目の仮設

気休めに子の帰る土地開けてある

携帯とカードが主張する自分

西宮市 片山 忠

うかうかと死ねなくなったもう七十路

先生が生徒に見せぬ出世欲

鼻息の荒い男の仁徳知

あそこまで惚れるときつと嫌われる

90%オフ急に買う気が失せてくる

子を生んだだけでは母になれません

田辺市 岡本 昇

まだ死ねん嫁が長生きしてと言う

粗酒粗肴招かれた席超グルメ

森という大邸宅に棲むけもの

助け舟出さず心配ばかりする

リラックスしてストレスと向い合う

万札を敷き詰め大の字で寝たい

大阪市 坂 裕 之

謙讓の美德通じぬ世界地図

ひと呼吸おいて静かな波を待つ

じゃあまたね何時とも聞かず言いもせず

借金が怖い私は並の人

出過ぎずにちよつとお役に立てば良い

会うだけで度量の違ひ身に沁みる

大和郡山市 坊 農 柳 弘

もう何も引かぬ足さない春の宵

メルヘンに誘うあなたの風を待つ

ウグイスは気まぐれ春の誘いに甘えてる

覚えてますか愛を誓った桃の香を

聞き役の位置で陽炎と遊ぶ

猫柳ひと雨ごとに芽吹く恋

池田市 栗 田 久 子

津波の悲劇それでも原発に頼る

甘党に物足りなさのあるちまき

進む少子化どこに消えたか鯉のぼり

実山椒佃煮までの手間と手間

たんぼぼはやさしい風を待っている

筍の匂をわたしは見逃さぬ

松江市 三 島 淞 丘

マンションの谷間で生きるたこ焼屋

跳べそうで跳べぬ夫婦の溝がある

老醜を隠すメッキはもう要らぬ

借りて着る衣は俺に似合わない

今さらに日の丸揚げて何祝う

ピリオドを打って明日の風を待つ

和歌山市 楠 見 章 子

土筆ツンツン春が土手にもやって来た

大皿に盛れば何でも美味くなる

モデル気分忙しい春の試着室

食事会業で締める友ばかり

春風にのってふわつとバスを降り

庇うてくれた嘘がきれいに咲きました

吹田市 木 下 敏 子

一行詩添えて椿の花だより

書き順をどうこう言わずバラは薔薇

手習いはまだこれからと墨を磨る

倅せは朝のお椀に露の臺

枯れそうな女心に春の雨

ご先祖のお蔭のんびり日を送る

札幌市 小 沢 淳

生きて候 生涯一句苦戦中

高層に住んで根のない草となる

敵味方作らぬ人の頼りなさ

ちちははの遺伝子僕のどのあたり

人が好き悪口聞くのもっと好き

台湾へ心弾ませ句座の旅

鳥取市 池澤大鯨

寄生虫宿主に害しない義理

虫のいいヒトが居て金吸い上げる

お邪魔虫減らず口出し険悪に

尺取虫ヒトの命数はかるとか

芋虫って食べられるんだそうなんだ

鳥取市 奥谷彩子

五感一杯思い出拾う里の春

ありがとうもごめんも言える老いの日々

茨出ても着地きまらぬ不況風

威勢いい正論吐いて雑魚爆死

断捨離に過去の榮譽は語らない

鳥取市 加藤茶人

夢希望恋は魔法の玉手箱

ひと言のゴメンナサイにある力

後は嫁これが埋まらぬ青写真

尊厳も威厳もあつて出ぬゴメン

桜咲く去年と同じありがたさ

鳥取市 倉益一瑠

いのちポロン燃えてるままに椿散り

恋かしら愚かな猫になりたもう

悔いたとて過去は過去です手を洗う

無味無臭わたしが何処か消えちゃった

棚上げにした切り札が落ちて来た

鳥取市 鈴木一弘

雪だるま春に小雪を連れてきた

暦春霰がおどるひな祭

衰退の道を一途にくだる齡

茎の伸び親のしつけに感謝する

福は内まめに暮らして円満に

鳥取市 竹口清信

満天の星よ昼間は何処へ行く

星の無い夜は淋しい月も無い

欲言わぬたつた一つの僕の星

淋しい日星と話がしてみたい

俺が行く星は光の強い星

鳥取市 中村金祥

負の遺産棚上げ出来ぬ意地がある

無農薬こだわる妻は薬漬け

バーゲンセールここにルールはないらしい

混浴にいいあんばいに茹である

くだらない話も五七五で締める

鳥取市 永原昌鼓

出発の春だ軽めの靴を履く

イケメンの顔はうっとり見て飽きぬ

乗る人がもう誰も来ぬ縄電車

色っぽい話大好き老いの身も

しわしわのこの手自分史物語る

鳥取市 夏目一粹

下駄箱をなぜ靴箱と言わないの
万歩計つけてやりたいカタツムリ
妥協癖コツコツ磨き争わぬ
脳をいじめるとやっぱりボケました
言葉尻すこしいただき世を渡る

鳥取市 西川和子

おねだりが爺の急所を突いて来る
輪の中で尖って見ても仕様がな
面影がパパのまんまでもう二十歳
長生きへもつと元氣な足が要る
終までにもつと笑顔を残したい

鳥取市 春木圭一郎

おもてなし何とも日本らしいことば
美しく生きるヒントを花が持つ
いい人に会いたい人の真似をする
感性を磨く材料あちこちに
まず笑顔気さくな仕草ファン作る

鳥取市 平尾菜美

孫自慢つば飲みこんで我慢する
攻め手ない石頭さえへこみ出す
負けいくさ明日は火中の栗拾い
介護椅子思う小声を届けたい
乗り越えた試練らくらく山登り

鳥取市 福西茶子

荒縄のような女で素っ気無い
この顔で生きたが罰は受けてない
ウイנקを安売りしてる春の風
女子会と名付けメンバー皆八十路
半分は仮面で生きた半世紀

鳥取市 前田楓花

ほろ苦い酒を呑んでるなごり雪
平静を装っている胃が痛む
海峡を渡れば母の子守唄
泣き事はよそうと決めた震災後
老いていく犬の涙を見たような

鳥取市 横田春名

喜びを倍にする知恵ばあちゃんよ
でもねえと相手の心のぞき見る
家庭不和部下に欠けらが飛んでくる
想い出の奥の引出しまだ開けぬ
チャンネルをかってに替えて知らぬ顔

鳥取市 吉田孔美子

朝一番八十歳の耕運機
余り物私一人の昼満たす
野菜もりもりでは筋肉はつかぬ
新築祝い自慢につぶれている
ミスコンのマスクに神も酔いたもう

鳥取市 吉田弘子

春一番冬のなごりを消すように

二十年努力が実りソチの空

挑戦へ四十一歳の面構え

三年目地味な搜索まだ続く

淑やかな人だなきつとA型か

鳥取市 両川無限

人間でいたくて今日も箸を持つ

成仏をしたか夢にも出てこない

知ったのはゲームセットになってから

打ち止めにしよう戦も原発も

現役のかたちに靴が脱いである

米子市 後藤宏之

月が出て砂漠とラクダセットする

三代目親の余韻で生きのびる

二人だけ知ってる秘密見つかった

役に立つ場所をさがしている輪ゴム

さわやかにおつり要らぬと席をたつ

米子市 後藤美恵子

喜寿祝い紅白の梅咲き揃う

戦中派輪ゴムは伸びるまで使う

心配性米櫃満ちて安堵する

おこぼれの子の義理チョコはほろ苦い

緩い捻子値上げに備え締め直す

米子市 竹村紀の治

独り身にその日その日の匙加減

汁の実のローテーションが決まらない

ネクタイを外し屋台の飲み仲間

右左コーヒー組と暖簾組

鮭缶に夕餉の手抜き教えられ

米子市 中原章子

目標に五年日記を終えるまで

一病の火種暴れぬようなだめ

着膨れに寒気の入る隙間ない

甘酒を造り大腸喜ばす

新聞を読む習慣は諦めぬ

米子市 成田雨奇

同じだとわかり仲間になくなった

貼り紙に思いがにじむ店じまい

ほどほどはイヤだ飲むなら最後まで

ほどほどの付き合い方がわからない

たつぷりとお金あっても困るしなあ

米子市 吉田陽子

春爛漫寝ても覚めても酔うている

梅林の中で迷子の小半日

シーソーにならぬ二人になってきた

お互いに黙って杖になる覚悟

人体図開くと危険箇所ばかり

倉吉市 猪川 由美子

プログだ何だ言い訳の場が有りいいね

恋に貪欲老いぬ秘訣でハツラツだ

真央ちゃんばかりスポットライトなぜ当てる

メダル獲り醜い打算渦を巻く

雪なくてほんに助かる老いの坂

倉吉市 山中 康子

一生をやさしく解いた紙の辞書

奮い起つ勇氣もらったほめことば

まだ若い百寿の姉が肩たたく

私をハッスルさせる鈴の音

情熱が冷めないうちにたがやそ

鳥取県 石谷 美恵子

話合い器の違い垣間見せ

お洒落よりババシャツ選っている私

ふところが百均シヨップ選れという

私の胸にまだ一掴みあるマグマ

再会へこころの芯が揺れ動き

鳥取県 岩崎 和子

句会の日色々お世話ありがとう

熱い茶を入れて下さりほっとする

川柳の師の影ちらり涙出る

今は亡き師のあの声が聞こえそう

食欲の無い朝熱いミルク飲む

鳥取県 竹信 照彦

しゃしゃり出て雄叫び上げて空回り

陽が射して曇って雪の降る天気

軍事力持てば使つてみたくなる

五輪旗の裏で戦争ごっこする

同期会も止めてしまえば絵空事

鳥取県 西谷 悦子

芽吹こうとたらふく水を飲んで

わたしにもある輪ゴムほどの弾力

涙涸れ笑い袋に灯がともる

卒業へ就活広場風きびし

T P P 農に明るい灯が欲しい

鳥取県 細田 裕花

春めいて世界が広がるような

趣味の輪に結んでいますペンネーム

いい話世間に出せば煙になる

カメレオンのような世間とにらめっこ

うっかりと甘えてならぬ甘い声

鳥取県 松川 行男

消費税飲めば飲むほど忘れま

新年度名残りの雪に見送られ

見かけない隣の親父元気かな

大根の花まで白い親ゆずり

原発廃止チヨロチヨロ火種だけ残す

鳥取県 山下節子

幸せを掴む両手はまだ元気

私の料理家族を掴んでる

ワルツならスロースローでまだ出来る

そのままが一番いいと言われてる

足の出た家計簿ですがそのまま

鳥取県 山本正光

忍一字耐えれば何のことはない

まだ元気おもてなしなどこそばゆい

靖国を拜むと軋みだす他国

寒風に聞きたいことのある桜

肩書きを捨てると変な小父さんだ

松江市 小川注湖

今日の汗洗い流して明日もかく

ローン知らず小庭の松は威張ってる

おもてなし心こもった手が温い

還暦の床この道を振り返る

心開く一味違う酒の味

松江市 錦織禮子

交響曲澄んだ音色に癒やされる

汗の結晶うれし涙にもらい泣き

それからと幼子メルヘンを辿る

突っ走るだけのポリシー不透明

カジュアルに乗る自転車春一番

松江市 藤井寿代

幸せの列に私も仲間入り

照れながら少し派手目の前ボタン

音もなく弥生の雪の計り事

プライドを流した春の用水路

気休めにたつた一人のキャベツ植え

松江市 松本知恵子

青春は広島そして思うこと

竹島のアシカが居ます展示室

次の手のカード少しは持ち合わせ

今年から何故か日記はもう止めた

姉さんを守る卒寿の弟の目

松江市 松本文子

裸足で芋掘った少女の頃だった

人相が変わり病院から戻る

優しい朝風のささやく声を聞く

雪溶けて表われたのはゴミだった

忘れてはならぬ恩師は本棚に

出雲市 石倉美佐子

金婚に息子夫婦の祝品

ヘルパーさんに頼んで筆筒の向きを変え

エンゲージリング昔のままに光ってる

男は無口大事な刻は凜として

八十路には古い吾が家が一番良い

先輩の忠告にあるかくし味

四捨五入未だ五入の味しらず

肩の荷が降りて蛇行の癖がつく

ご返事は後日と言つて断わる気

病む地球急いで名医探さねば

出雲市 岸 桂子

感動の涙静かに灯が消える

あしたより今日を大事にドッコイショ

鮎ひとつ舌にころがし策を練る

誘いには乗らぬわたしの太い指

種いもの序列を寝かす春の泥

出雲市 小白金 房子

出雲市 多久和 敬子

日が暮れてやっと私の彩見つけ

二度とないチャンス狙つてこけちゃった

平和ボケ今日も朝から物さがし

招かざる客春風に乗つて来る

いらいらをひっくり返す孫が来て

出雲市 富田 蘭水

春風も風情と別に芽を肥やす

大遷宮観光ばかり肥えてくる

啓蟄も急に空から白いもの

春かすみ早とつちりがマスクさせ

ホーレン草愛情かけて濃い緑

寺田寅彦の言葉が歩く津波跡

亡夫の歳越えて喜寿越え傘寿越え

わたくしを置き去りにした冬の椅子

わたくしもリケジョも白い割烹着

毎日が祭り飽食の不幸せ

島根県 伊藤 寿美

ライバルに次の一手が決まらない

一呼吸おくと決断鈍くなる

孫の塾僕はお抱え運転手

お互いが我慢したから老夫婦

T P P 軟着陸の探り合い

広島市 岸 本清

呉市 山本 玉恵

抱きしめても一つも鳴らぬオルゴール

角砂糖は素直に溶けた方程式はまだ

過去みんな捨てるとすごい風の夜

再びは来ぬお別れと言う涙

追憶の夢は涙の倍返し

竹原市 石原 淑子

青嵐の笑顔弾けるランドセル

海苔焙る茶の間が春の磯になる

八千種の草の芽親の形して

だいじょうぶ母の口癖大丈夫

震災の日にいただいた命なる

竹原市 岩本笑子

松山市 古手川 光

春だから笑い袋を買いに行こ

根にもたぬ夫でもテレビ主導権

肩揉んでほしい夫の一人言

結婚記念日覚えてほしいのは夫

先々はどうかあれたんと薬飲む

府中市 藤岡 ヒデコ

視線だけ上げて足元おほかず

姉が逝きリズム崩した日課表

今日おひますぐにエンジンかからない

子沢山だった姉妹もあと二人

疑った事など無いよナァ切手

宇部市 平田 実男

孤独死の記事へ自分を重ねて見

原発の怖さへ蓋をする政治

天下り先へひそんでいたマグマ

冷や飯もしっかり嘔めば温うなる

転ばぬ先の杖が拍車をかける老い

東かがわ市 川崎 ひかり

宝石展帰りに特価のサンマ選る

命綱年金までも細くなる

夫無口たぶん聴こえてないだろう

ハグしたらだんだん解けるわだかまり

捨て切れぬものを背負って生きている

大寒波去れば花粉に攻められる

ふる里が昔々をよく喋る

大自然の御仕置き猛暑大寒波

笑うも怒るもテレビ相手の老い一人

ロボットにやがて自由を奪われる

松山市 宮尾 みのり

笑う日もあつて命の綱渡り

えんま帳から洩れた命が有難い

守備範囲だけはしっかり確保する

話半分その半分も嘘くさい

お守りもお札かち合う旅みやげ

大洲市 中居 善信

冷めた目で僕を見ている小屋の犬

何たって昭和が僕の生きた道

泥臭い生きざまですがこれが僕

根詰める人には流石自負がある

芋飴の甘さが喉の奥にある

西予市 黒田 茂代

真冬から春へくるとモノの庭

菜の花の海で蝶々の舞踏会

手作り野菜ジュースで胃も腸も元気

ウォーキングの道道一句考える

ゆらゆらと生きよう二度とない余生

高知県 小澤 幸 泉

休日の酒と料理と午後の雨

ムルロアは神のあそびか世の罪か

描きつづける色を見つけた白い画布

結局は思い悩んで今日終る

黙示録ほんとの救い見せてくれ

唐津市 山口 高 明

日章旗掲げる僕は愛国者

暴落も急騰さえも関知せず

駅伝のご先祖さまは早飛脚

悪妻も淑女も演じ楽しまん

欲の塊ビットコインの詐欺に遭う

熊本市 永 田 俊 子

一日六回目薬さすのが守れない

おだやかな波にもあつた裏表

鯉の一本釣り政界の一本釣り

失敗してもありがとうと言う余生

うら表ある自然界のテクニク

熊本県 岩 切 康 子

屁理屈に付合うための知恵絞る

手造りを持ち寄り褒めあい談笑す

歯定診何故かその後食べ辛い

土鍋にひびわたしの老骨のように

マッサージソフトソフトに頼んでる

砂川市 大橋 政 良

老化する速度がわかる歳になり

あきらめの看板老いた首に下げ

言葉では老化の思い言いきれず

点と線太く一本引いてある

点数でこの良し悪しは出来ません

黒石市 相馬 一 花

流水にのって行きたいユートピア

復活の牛丼に来る人の波

耳のある煎餅を買う園児の目

燃え盛るマグマは神の鼓動なり

円周率暗記している火星人

弘前市 稲 見 則 彦

愛煙家強い意志だが四面楚歌

食材の廃棄を願う冷蔵庫

告白にまだ早すぎる蒙古斑

回転寿司減法減った皿の数

爪よりも心磨けと紙やすり

弘前市 岡 本 花 匠

十二支額米寿を祝い妻飾り

ラッキーな午に期待の運願い

白磁馬すくと佇み居間の福

冬空の旧曆二月まだ厚着

赤瑪瑙誕生石のえにし買ひ

弘前市 今 愁 女

絵はがきの夢路の美女が寒見舞
ソチからは大空跳んで春が来た
朝ドラの娘の強かにはっとする
凍み草食む寒立馬にも温い日が
春ですねやたら目に付くいい男

弘前市 高 橋 洋 子

ネットにスマホ穴の空くだけ見る君ら
にっこりと微笑み返す人違い
野菜くず貯めておじやで絶品に
ほどほどにボケてあげるも子孝行
雪掻きのシャベル小さめに替える

青森県 松 山 芳 生

曖昧な記憶へ一枚の写真
シャッター街諸行無常の風の音
ありつたけ捻るいびつな脳である
紐で結べないシャボン玉の気儘
もう二度と書けない桃色の手紙

さいたま市 星 野 育 子

復興から五輪に向けられる目線
何かある巨大タコイカ深海魚
贅沢は鈍行列車で行く旅
電話してもいいですかとメールする
アナログの家電にあったマイペース

東京都 岸 野 あやめ

コレナニと今日は何でも問う曾孫
気味わるさきびしい人の上機嫌
諦めが良すぎて不器用な女
ひとりぶん作って食べるのも一人
これみんな描かれてるのは貴女でしょ

横浜市 小 野 旬多留

辻褄の合わぬ夢見に追われてる
春風を遅らす雪の後遺症
湯たんぽが程好く温い九時の床
趣味減って義理チョコからの縁も切れ
スーパを気分次第で巡ってる

横浜市 菊 地 政 勝

オレオレに恵んでやれるカネはない
長生きはいつまでなのか俯瞰する
日向ぼこ体内時計遅れ出す
医者の指示守り楽しくない余生
想い出を引出しに行くフルムーン

富山市 島 ひかる

ジュニア川柳泉のように湧いて出る
発想の凄さジュニアに教えられ
雪の立山ヘリの爆音消えてゆく
一枚のハガキ梅の香漂わす
本物か造花か愛を試される

可児市 板山 まみ子

年寄と思っていない七十五

都合よく使いわけてる七十五

若者に負けじと食べる七十五

頑張ってみてもやっぱり七十五

近頃の句には少々加齢臭

犬山市 金子 美千代

メダルではない感動をありがとう

大仕事母おだやかに旅立てり

九十五よく頑張ってくれた母

老いてなお母が教えてくれたもの

梅一輪背すじ伸ばして前を向く

犬山市 関本 かつ子

紙糰を折って豊んで遠い孫

遅くまで増税前の槌の音

本当の顔で飲んでる家の酒

小魚を毎朝食べて蹴つまずき

結局は慣らされてゆく消費税

愛知県 早川 遡行

取り敢えず八十目指し生きんかな

医者を出す薬を止めてから元気

幸せは小鳥の声で目を覚ます

次々に出てくる反日の火種

ガム噛んでメジャーリーグの顔になり

京都市 西村 益子

まだ若い喧嘩の出来るエネルギー

着服れた私薄着の孫二人

午前二時ホットミルクと深夜便

雑用を楽しんでます老いの知恵

ベランダに蒲団見事な冬晴間

京都市 藤井 文代

捨てるのにエネルギー要る貰い物

エネルギーどこから出るの遺産分け

お裾分け言葉適量載せておく

過去形にし哀しみの量軽くする

花と寺で人々を呼んでる京都どす

京都市 榎本 宏子

脱脂粉乳みんな明るい木の校舎

失敗も汗も笑いに名ガイド

桜さくら京都へわんさん移動

老人の悩み年金消費税

古稀の恋目指すはやはりゴールイン

京都市 三宅 満子

春は早く夏は遅めに来て欲しい

くぎ煮届く友の思いを噛み締める

睦まじいひな人形に嫉妬する

横綱に男の度量見せられる

三人寄れば長生きしたくない会話

長岡京市 山田葉子

家族ハラハラさせて楽しむボーリング
マスクに眼鏡化粧も雑にしてしまう

大阪市 池上清治

サングラスでは優しい眼もと隠せない

筋肉の備蓄がきいている安堵

弱音吐き助けも借りて昨日今日

よいいドン見てハルカスへ妻走り
質上げに総理の方が旗を振り
駆け込みで買っておきたい物がない
スマートホン握ってみたが重すぎる
元気だよ孫のメールを妻は待つ

お人よし欠点だとは思わない
不器用で選んだ歩みにくい道
補助線を引くとますますあまいに
カツ井は一気に食べるのが流儀
大切なことはアンテナすり抜ける

八幡市 今井万紗子

大阪市 井丸昌紀

人が好き少し甘めの餌を蒔く

これも縁もつれて解けた毛糸玉

話し好きつい徘徊をしてしまう

ガッツポーズみどりの風を入れて春

転び癖出てきてからの運不運

亀岡市 井上森生

終着が決まらぬままに来た旅路

行く先を絶えずリフレッシュする未熟

深海のどでかい大王烏賊に会う

シルバーは安楽椅子で寝た振りを

老熟の頭で遊ぶ旅の夢

大阪市 阿野壽美子

年齢より若く見られて元気だし

番組に合わせて動くテレビ好き

おめかしの妻と同伴惚れ直し

地区祭り勇壮過ぎて命懸け

子供達虫の居所見てねだる

クラス会自慢飛び交い節度ない
肉なしのカレーに慣れて老いの膳
羽織袴外人力士びたり決め
頂点の椅子へ策略ぶつけあう
年齢は記号と決めて元気出す

大阪市 江島谷勝弘

スカイツリーガラスの床にすくむ足

お隣はカズノコ入りのちらし鮓

家の中やっと断捨離進行中

チリチリと松籟の音は日本の美

カミさんにカンパつものって飲み会へ

大阪市 榎本舞夢

暖かい日もありたのし旅プラン
御茶席で凜とわびさび教えられ
ハルカスで天の近道知りました
今年から思い出せる旅をする
為残したひとつを整理する

大阪市 大川桃花

ママのお迎えゴム毯になる園児たち
啓蟄に這い出た虫は見逃そう
意味不明のまま残された父のメモ
真ん中で威張ってるのが患者さん
ロボットがドヤ顔する日近いかも

大阪市 奥村五月

長生きに貯金の寿命底をつく
雪見酒のんきにできぬ屋根の雪
舞台では何時も父さん女形
まだ元氣医者ハシゴの日が続く
お薬と医者レシートすぐ溜まる

大阪市 笠嶋惠美

春茶碗買って詩情を取り戻す
義妹逝く同級生で名も同じ
墓を継ぐ息子を立てて楽隠居
夫が逝き電話のベルを楽に聞く
赤い自転車素通り出来ぬ友が居る

大阪市 神夏磯典子

ひなまつり家中の顔丸くなる
エプロンをつければ妻に隙がない
北風が嫉妬している綿帽子
一日中財布と喋るおばあさん
次に会う約束へ痛いほど握手

大阪市 川端一步

NHK言いたいことがたんとある
破いても裂いても平和鐘は鳴る
梅干を好きになつたと妻まさか
割り勘でもてた話を聞かされる
上弦のどうぞおいでと言うポーズ

大阪市 熊代菜月

指折れど字あまりばかり日が暮れる
余所行きの顔でにつこりハイチーズ
居ねむりの気儘に出来る老い一人
颯爽と走りぬけたい午のとし
筆まめな父が残した日記帳

大阪市 古今堂蕉子

謎で良いお伽話を消さないで
椅子取りゲーム私はやはり売れ残る
雛飾りさすが旧家というお顔
合格のしらせは春を乗せて来る
言い訳に偽作の曲も鳴りやまず

大阪市 小谷集一

毒舌を吐き悪友という絆

ライバルに老いの背中は見せられぬ

直感と経験だけで世を渡る

生き残るための妥協が多くなる

一目盛り下げて平穩無事計る

大阪市 近藤正

消費税ズシリと腰に応えます

自販機で茶を買うの止めマイボトル

六億円無駄に使った市長選

涙目の花粉症です鯉のほり

京丹後岬に基地は要りません

大阪市 佐藤忠昭

病室に孫の見舞絵飾り過ぎ

四句会皆出席の夢破れ

病床でヒマがあるのに句が出来ぬ

回復か看護師さんは皆美人

妻曰く酒を飲むなら知りません

大阪市 澤田定子

3・11仮設住宅三年目

大烏賊に触れる子供の好奇心

前の席一列スマホ発車前

小舟に難いっばい乗せて竜宮か

ビットコイン神隠しでもあったのか

大阪市 田浦實

真央ちゃんの復活見事泣きました

苦労したそのプロセスが力生む

上手に遊ぶ仕事するより難しい

マイペース思わぬ力湧いてくる

司馬さんと握手できそな菜の花忌

大阪市 津村志華子

被災地へ祈りのようにさくら舞う

終章に自我をボキボキ折っている

私はわたしのままで生きてゆく

それぞれの暮らしを覗くレジスター

クラシック調に唱える般若経

大阪市 津守なぎさ

雪解けを待った花芽にありがとう

パースデイ祝う傘寿の声達者

大仏さん歩行器押して久しぶり

ハイポーズおとなしい奈良の鹿

昔ほど大きく見えぬ大仏殿

大阪市 寺井弘子

つんのめる歩きスマホに当てられて

水温む冬をこせたと露のとう

介護する母の寝息にほっとする

珈琲カップ花柄にする春隣

光り物好きでジャラジャラ着けてます

大阪市 原田 すみ子

真つ直ぐに柔らかく聞く孫の耳
胸に抱くロマン語れるのは酒席
欠点と見ていた事をそうとるか
七十の花を自分の為咲かす
敵作る元氣も無くて日向ぼこ

大阪市 板東 倫子

朝刊の先ずは明るい記事探す
絶品のカニ雑炊にみな無言
迷い子になってうるつく新梅田
氣のおけぬ友に会いたいぐちりたい
反省の言葉が出ない老いの意地

大阪市 平嶋 美智子

氣の沈む原因二つ三つあり
仲間から外されていた知らなんだ
見上げても桜はいまだ眠ってる
春ですね路肩の草の育ちよう
ペランダをちよつと賑わすシクラメン

大阪市 伏見 雅明

温暖化ひとに課された罰ゲーム
飛び乗った車は女性専用車
別腹を連れて楽しいグルメ旅
おはようと声かけあつてよい目覚め
曖昧さ許さぬ家の鬼検事

大阪市 升成 好

生き様を見つめて神は運を盛る
でこぼこ道きつと役立つ時が来る
吉本はおほほと笑うとこでない
好奇心老いの足枷解き放つ
二人切り他人行儀がもどかしい

大阪市 松尾 柳右子

ウォークに応援してるか鳥が鳴く
乾盃の水割り少し今日の幸
雑踏を抜けて裏道深呼吸
氣が晴れた五曲唄つた喫茶店
献立を終えてみんなの帰り待つ

大阪市 山崎 君子

サイネリア花をいただく誕生日
サイネリア紫美し朝の陽に
テレビ止め花を見ているひとときよ
ヘリコプターあべのハルカスオープンに
何も彼も腹立つ事はすみれ見て

大阪市 山本 加お里

丹頂の見事なダンス恋さななか
天職か二人同時の看護する
目覚めれば父母の真似して生きている
車椅子押して近場の花見宴
神任せ今日も生きてる陽が昇る

大阪市 吉内 タカ子

ニュース見な気になつて寝れぬ北鮮に

まどさんの宝で光る世界の子

子や孫の家内安全かく護摩木

大阪も余生しんばい落ち着かぬ

消費税あがる買い溜め老いまでも

堺市 奥 時 雄

平成に重荷預けて去る昭和

明治には顔向けもできない昭和

里山を削った街も過疎となり

削るのは諦め太いズボン買う

真夜中の訃報家中あたふたと

堺市 柿 花 和 夫

正直な鏡に今朝もあかんべい

問い詰めると沈黙をする理想主義

二月尽そろそろ浮上しなければ

鍋料理を二人で囲む仲らしい

先生に叱られてから友が増え

堺市 加 島 由 一

剣難はないが女難はそこかしこ

肥えてない酒でむくれているんだよ

幸せになりたいんです忘れませ

飲む誘い断りません朝の風呂

天国の方に友達多くなる

堺市 源 田 八千代

P.Mと黄砂花粉の三つ巴

満開のサンデーなのに混んでない

消費税上がらんうちにトリフオーム

アルバイトの切れ目に孫が来てくれる

コーラスの発表会に手話も入れ

堺市 齋 藤 さくら

誰も居ぬ鏡に愚痴をこぼしてる

忙しい悲鳴上げてる今が春

座ってるだけでも肩は凝りますよ

気まぐれで入った茶店木の温み

婆ちゃんのふところ知って無理言わず

堺市 澤 井 敏 治

花吹雪花びらごとにある想い

夜桜の花びら貰う車いす

武士道を伝え世界に咲くさくら

花鳥諷詠ころにいつも四季を抱く

葉桜は春のあとがき吉野山

堺市 遠 山 唯 教

つつがない暮らしに恩を忘れない

外出の妻を待つのは慣れている

結果には触れず頑張りほめてやり

春を呼ぶ修二会で火の粉ふりかぶる

龍馬伝また読み返す菜の花忌

堺市内藤憲彦

信じて欲しいから嘘も混ぜておく

もんしろちようお供につれた春の風

ドジだけど裏表ない妻が好き

むずかしい太極拳が好きになり

ほどほどのところで手を打つ二人旅

堺市村上玄也

突如来る死に対処法などは無い

新目標五輪この眼で見届ける

脳味噌に溜まった垢を流す酒

もう昼か朝からずつと探し物

計算がややこしくなる消費税

堺市山本半錢

一坪に裏切ることの無い芽吹き

海山の恩の深さに香を焚く

あけたての作法に遠く立ったまま

何気ない祖母の気配り光ってた

大したことなくても偶に診てもらおう

和泉市横山捷也

裏切れば必ず落ちる穴がある

高齢化彩のない街に住む

我が励み七十六のボランティア

春日和老老介護車椅子

病院に行けば友達タンと居る

泉佐野市山本蛙城

生き物に死ありペットを飼わぬ主義

浴槽で一日一笑笑いヨガ

クーデターありきを偲ぶ雪の朝

立候補するだけ趣味の名も混じり

温床に二十句育て八句出す

茨木市島田誠一

万骨を削り景況気で支え

リベンジに燃える涙かソチの花

あの世行く改札口はひとりずつ

人減らし給与も減らし社が黒字

年なりの知恵と工夫が理に叶う

茨木市藤井正雄

夜食ラーメンもうひと息と捻子を巻く

遺産分けどころか負債背負う羽目

恥ずかしい子の作文にあるわが家

単身赴任万年床になるずばら

祖母語る童話に嘘がある笑い

大阪狭山市矢野梓

企業側の御都合ばかり契約書

穏やかに言う断わりは遠まわし

心して生きねば先が見えてくる

どたキャンが出来る集いに参加する

歩こう会駅の往復タクシーで

交野市 森本弘風

諭吉にも居心地悪い家らしい

もう少し柔らかくして歳やから

ウインドーマネキンが着る春の色

味噌汁が自分の味になった朝

ハルカスが再開発の波を呼ぶ

河内長野市 植村喜代

いてるかなあ次の五輪は孫はたち

孫のためお菓子をためて待っている

ぢいさんは何を考えているのかな

本音です嘘が入るとすぐわかる

嫌なことは忘れることにして生きる

河内長野市 梶原弘光

甘言にどっこい乗らぬ老いの耳

バアちゃんが茶髪で孫は濡れ羽色

ケータイの絵文字で出せぬ苦笑い

メル友に加えてくれと孫にTEL

反日と韓流ドラマ繋がらず

河内長野市 木見谷孝代

野や山は目覚め弥生の薄化粧

虫たちよ自慢の野菜うまかろう

原発ゼロ夢か現か国の策

突然の不幸助けてやれる幸

ベースアップ待ってた頃が華でした

河内長野市 黒岩靖博

鉛筆が二人の愛をたぐり寄せ

引き当てた愛一筋に理想妻

プロポーズの手紙は妻の隠し玉

諍えば妻は古傷武器にする

ラッシュ時にスマホのゲーム無我夢中

河内長野市 坂上淳司

ジーパンと急ぐ二十歳の裾さばき

ぬかるみも元気に歩く貸衣装

振り袖がカレージュどんを吸ってる

笑わんと悪い前座の熱い芸

尾鰭まで付けて帰って来た内緒

河内長野市 谷久美子

頂上を夢見た頃は燃えていた

連れ添って憎い日もある泣いた日も

後五年目標立てる金婚詣

巣立つ子の門出を祝う梅の花

クレームの中に隠れていたヒント

河内長野市 松岡篤

喫煙所代わりに使う喫茶店

ランチしてぶかり一服物思い

作句する私にお冷や三回目

あの席も食後の葉この席も

勘定はまともて欲しい店の人

河内長野市 山室 光 弘

三年目迫る津波が蘇る

我が家にもしまい忘れたおひなさん

また俺の行く手さえぎる女文字

こまやかな手間で織りなすおもてなし

デフレしか知らぬ世代の薄い夢

岸和田市 岩 佐 ダン吉

人間は古いが枯れてなどいない

出方見ることなく僕の道歩く

原発は全て止まって恙無い

楽勝と思つた時に負けていた

握手してそれから僕が試される

四條畷市 吉 岡 修

ストープを仕舞つてやつと僕の席

ぶつ壊すあの勢いも尻すほみ

ご近所のかかしエプロンつけてはる

税務署へ出すもの出して気が晴れる

デート中も小笠原流疲れます

吹田市 太 田 昭

独身を装っている葉指

怖いもの気にはならない歳の嵩

居酒屋の仲間入りした至福感

両手広げいっばいに書く理想論

未知数に期待している十五歳

吹田市 大 谷 篤 子

酒に酔い幸せな夢抱いて寝る

体調の良い日は粋な服着てる

銀世界寒さに命ふくらまず

雪降る日少し華やく服を着る

今日よりも明日の蕾にかけてみる

吹田市 藏 田 光 子

出合いの芽大切にして弾む声

芽吹き時のぞみ大きく門出の子

稜線の丸みに芽吹き感じられ

草や木の芽を見てほつと気もゆるむ

譲られた席ありがたく年を知る

吹田市 須 磨 活 恵

惜春の想いをのせる花筏

ばらはマドンナかすみ草に包まれて

人情の花がこぼれる路地に住み

もう古い五感摸る若葉風

夢ばかり囁りやせてる影法師

吹田市 瀬 戸 まさよ

潮時という納得のことばあり

二時間の新聞今は十五分

美容のテレビ六十歳まで延びました

九十歳生きていくのも疲れます

昼食夕食準備して同窓会

何事もアベノミクスで万々歳

吹田市 野下之男

マラソンの横を走れば良い気分

ロマンチック小樽運河のバイオリン

野球よりボールける子が多くあり

カラスたち議題判らぬ大会議

高石市 浅野房子

夢を見る五臓六腑も疲れたか

消えかかる虹追いかけて蹴躓く

道しるべ頼るあなたは遠い人

デイサービスライブだライブジャズバンド

彼が居ればよろこぶだろうジャズばかり

高槻市 指宿千枝子

浅田真央めらめら挑む第二章

干し終えて話が弾む垣根越し

雛さまに会えてうれしい誕生日

説明書眼鏡ルーペでしかと読む

賃上げに企業は春のホーホケキョ

高槻市 井上照子

今生を路傍の石で過ぎて来た

土曜日は生きてる子等の塾通い

同居して娘の忙しさが気にかかる

オール電化時に戸惑うこれも歳

暗記したスピーチ途中ふと消える

体調と天気が決める通院日

高槻市 片山かずお

あぜ道に春のざわめき聞く散歩

坐る気の色が並んだ始発駅

正論が炸裂会議まとまらず

見渡して居眠りできる席につく

高槻市 島田千鶴子

北国の人も驚く春の雪

買いだめて消費期限に急かさせる

短編を読み切り夕餉遅くなる

無料バス届いて歳を意識する

ロボットの根気の良さを習いたい

高槻市 初代正彦

書き初めに思いを込めて左馬

スマートに五輪を決めたお・も・て・な・し

知らん間に妻に負けてる強かさ

パラリンピック明るく集う車椅子

悠然と手ぶら夫婦の老いの坂

高槻市 杉本義昭

メダルより感動くれた真央の舞

反省も芸のうちだと知らされる

元気なのは声だけですと支え合い

転生のチャンス与えた癌告知

先輩のもう一軒で午前様

高槻市 左右田 泰雄

憎からず思う心に灯がともる
飾り気のない物腰のしとやかさ
底冷えがじわりとひびく老いの背な
そのまが一番似合う親父風
気にすまい別に悪気は無いうわさ

高槻市 富田 美義

呆気無いそれが運命通夜の帰途
ボケた振りするほど頭冴えて無い
アバウトを敵に回して疲れ果て
引出しを開ければ過去の恥ばかり
一ツなり太陽いのち女房も

高槻市 富田 保子

集まった同期の枯れ葉みな元氣
姿見にのんびり映す久し振り
切る切らぬ古い庭木にある悩み
イケメンの胸に私を咲かせたい
店じまい何度するのかあの店は

高槻市 原 洋志

日向ほこ天下取る相失せている
迷ったらお好み焼きの具に紛れ
踊らねば呆ける裸木も私も
衣替え春秋冬ないポスト
甚平を着てどちらにも味方せず

高槻市 安田 忠子

近江路の雛人形に母偲ぶ
華やかな雛人形の時巡る
八階の湯舟に浸り見る蔵王
昔とった杵柄スキーしてはしゃぐ
紅梅の匂いと雪の露天風呂

豊中市 江見 見清

見ぬふりをした後悔が眠らせぬ
温泉に行こかと口に出してみる
スマートな別れっぷりにある未練
おだててる訳を説明してしまふ
寄せ書きの隅に小さい恩師の名

豊中市 藤井 則彦

苦勞した人ほど口にせぬ不満
タレントと間違えられた大マスク
囁いた妻にそうっと茶を淹れる
着付けする妻に無骨なお手伝い
ほどほどに好きで嫌にもなるこの世

豊中市 松尾 美智代

古希すぎてまだ煩惱が渦を巻く
酒も恋も断てば味気のない暮し
子の帰り一途に待っている茶の間
甘い物断てれば楽にダイエツト
風少し春めいてきて雛祭

豊中市 松村 里江

酔って候女のまつりひいなひいなの夜

お試しフエアうちもテッペン気になるわ

ジーエンドヒロイン気取りネオン街

花よ花別れと出合いくり返し

羽目はずし騒ぐお人とウマが合い

豊中市 水野 黒兔

仏像の指の先から奈良に春

ひなあられ雛が召したか減っている

リビングに雛を飾ってロゼワイン

五百羅漢に父似を探す京の旅

少年の夢を育てた秘密基地

富田林市 片岡 智恵子

ゆっくりと浄瑠璃の情念を聞く

お互いが酔ってた事にする和解

切り札を持つ妻だ騒がず詫びる

騒ぎから戻った朝の目玉焼

おとなしい人が怒れば命がけ

富田林市 肥山 一文

がんばれよの言葉遺して恩師逝く

登りつめた椅子が不満で蹴つとばす

お互いの葉確認老い二人

クラス会最後はいつも合唱で

ありがとうマドンナさんが来てくれた

富田林市 山野 寿之

春の夢風を掴んでよく遊ぶ

掌に乗せて下さい過去の縁

包丁の音が弾んで孫が来る

ハミングは妻の組板母の音

青い日の一冊いまま道標

寝屋川市 富山 ルイ子

桜便り広告いつも入ってる

白寿の叔母認知症ではなく元氣

子供皆集まり祝いうれしそう

もう無理をしないでおこう八十路すぎ

3・11 祈る決して忘れまい

寝屋川市 平松 かすみ

システムを知らずよかったビットコイン

タイムサーピス掴んだ物が似合わない

腰振って若さを保つアロハオエ

古本が売れて苺を買いました

蠟梅のせめて香りをベッドまで

羽曳野市 安芸田 泰子

乗り越えた寒さへ思う夏のこと

お日様が手伝っている雪おろし

口封じされた時から人嫌い

球根の芽に笑われる物忘れ

春愁や散りゆく花へ咲く花へ

羽曳野市 宇都宮 ちづる

防犯ブザー鳴らす練習して四月

誘拐も車も怖い通学路

紛失届け出したカードがポケットに

味付けてあるのにソースマヨネーズ

冷えた手を詫びつつ孫の手を繋ぐ

羽曳野市 徳山 みつこ

赤い薔薇だけが花ではないでしょう

こんなものだろかわが家のちゃんこ鍋

帰り待つ土鍋が不安募らせる

防災の品追加する生きていく

万物の光にわたし包まれる

羽曳野市 永田 章司

年度末予算余さず使い切る

元氣だが歩く姿に喜寿が出る

不都合なデータ削り答申書

心付け無用とあるが辞退せず

笑み浮べ低姿勢だが筋通す

羽曳野市 三好 専平

表より路地を歩いてみたい京

人生のクイズを解いた人はない

二次会で本音を吐けと幹事言い

笑点で一週間の垢を取る

駄洒落さえ言えないような世に住めぬ

羽曳野市 吉村 久仁雄

敵失で勝利笑顔は取っておく

人間を捨てると酒がなおうまい

淡々と生きると影が味方する

時々飲まれて酒とくされ縁

雨だから今日の家出はやめにする

枚方市 海老池 洋

要職につくと失言したくなる

ゴミ出しの都合で曜日忘れない

文字まで尖り切ってる抗議文

柔らかい舌で鋭くつく急所

一本の藁にチャンスを与えられ

枚方市 小林 わこ

古布が好き祖母の匂いの古布が好き

君が好きこの声聞けないねあなた

好きだったりんご剥いてあげられないなんて

どこへ行くのもあなたがいれば怖くない

花野行くあなたをきつと追いかける

枚方市 伊達 郁夫

常温に戻すと元の歳になる

片想い冷凍保存して早や傘寿

バランスが取れて動けぬやじろべえ

大欠伸朝が始まり夜が終わる

意地ひとつこの世を生きる尾氈骨

枚方市 丹後屋 肇

内視鏡腸のトンネル補修する

病窓に春逡巡の吹雪舞う

球春のテレビに病臥の身が弾む

玉手箱開けた不覚を悔いている

東海林太郎唄えば孫の薄笑い

枚方市 寺川 弘一

めくつても明日にはならぬカレンダー

アルバムで過ぎた時間を確かめる

あれからは妻の眩しい割烹着

就活不調もぐら叩きをやけにする

ラストランならば拍手が貰えそう

枚方市 二宮 山久

梅の香に誘われ広げる手弁当

我庭に春つげ鳥のランデブー

つくばいの端にポタリと寒つばき

まだぼけておれぬ頭の作句術

花活ける妻が眺める右左

枚方市 二宮 紫鳳

プライドを捨てて母の座守り切る

影武者を演じ通した太っ腹

おでん鍋囲んで弾む趣味談義

スイッチがオンにならない老いの坂

パソコンもスマホも私になつかない

東大阪市 笠井 欣子

沈んでる友のお化粧映えている

線香の香も淋しい一人部屋

郷里の柿はお猿がみんな喰べ

咳込めば幼い孫が背をさする

墓参り一人で行けぬもどかしさ

東大阪市 北村 賢子

空白の記憶迎れば温い過去

すっぱりと割り切れられぬ人の情

富に媚びない情には脆い父譲り

何より怖い何時まで私わたしなの

妻怖い言う殿方は嬉しそう

東大阪市 佐々木 満作

めらめらと萌え立つ春を背に受ける

一攫を夢みてのめり込む怖さ

目に見えぬ相手ネットの怖さ知る

孫二浪先は長いと言いつ聞かす

角帽のアルバム青春の宝

藤井寺市 伊藤 アヤ子

それとなく手を貸してくれる夫

もう三年早く雪解け来てほしい

オレオレ詐欺手を変え品を変えて来る

お吸物に春をいたたくその笑顔

遅くても春がそこまで鳥の声

藤井寺市 太田 扶美代

わたくしにも喋りたくない日が偶に

花屋さんに残り時間を預けてる

面影も思慕も少うしカピ臭い

追憶の針はわたしの自己嫌悪

濾過をして何度も使ってるお世辞

藤井寺市 鈴木 いさお

丁寧で第四楽章を生きる

自我少し芽生えて爺を困らせる

丹念に錆止め塗っていざ後期

被災地の森にも早緑が匂う

まだ来てはならぬと神が宣うた

藤井寺市 高田 美代子

病巢は此処ら辺りとレントゲン

便利だなカラオケ奉行してくれる

桂剥き途中で噓しておじゃん

ベースアップ少し元気になりますか

消費税それなら奥の手で暮らす

藤井寺市 増井 ヨシ枝

月命日亡夫の好きなビール注ぐ

てふてふが亡母を連れて庭を舞う

老犬逝ってこんなに泣ける花の下

バリバリと子猫障子とよく遊ぶ

お元気ですかもう逢いたいと書いてない

藤井寺市 俣野 登志子

持たされた携帯ですが無二の友

友が逝く失恋の疼痛に似て

主婦の顔で帰って行った一人っ娘

弱音吐かない夫がちよっぴり憎らしい

老いの身仕度軽く少なく人生譜

藤井寺市 吉田 喜代子

七十九おひなまつりに招かれる

物産展遠い古里買いに行く

食べ過ぎと仏壇からの亡夫の声

隣国から大気汚染は遠慮なく

ロボットと共生出来る老後待つ

藤井寺市 若松 雅枝

春はいいな重い足でも軽くなる

出勤の孫も足取り弾み出す

碁敵も勝負が済めば無二の友

親友の名も咄嗟には出なくなり

千の風何処に居るやら春彼岸

守口市 井上 桂作

大雪は先ず道路から立往生

積雪がレコードときくこの冬は

雪祭それは昔の話です

真央さんに同情きずな忘れない

PPP利害の一致誰がために

箕面市 酒井紀華

誘惑にまけてカード笑いだす
無器用な男の背中まえかがみ
欲望がぶら下がってる蜘蛛の糸
雪しんしん五感が冴える糸電話
献血カード命もらって今日を生き

箕面市 出口セツ子

さり気ない優しさ子らに感謝する
子ら自立頼りにされぬのも淋し
ややこしいことは任せて日々消化
悔いの無いよう毎日を輝やかす
五体動くうちに輝く日々にする

箕面市 広島巴子

土筆ん坊まだかまだかと東風に問う
シャガールの絵のようふわり旅したい
淡い色まとい私の花便り
山仲間ハイタッチして気合入れ
ごめんねと彼岸に歌う千の風

八尾市 内海幸生

最高の季節が巡る葉忌よ
お陽さまの笑顔へ杖をついて出る
迷信を信じたふりで敵がなし
桜見に招かぬPM2・5
影法師歩けと新緑南風

八尾市 高杉千歩

蛸の足一本で足る老いの膳
エンディングノートメモ増えていく不甲斐なさ
長電話した日は日記につけておく
八十八歳鍋底神武バブル汚染
まどさん百四歳ベン握り直す

八尾市 寺川はじむ

夢の橋かけて世界へジャンプする
被災にめげず世界沸かせたでかい金
もの言わぬ民の年金削る国
もの言わぬモナリザひよっとして天使
ノムさんの囁き真似る夫の術

八尾市 宮崎シマ子

新聞が読めぬ新語がわからない
閻魔まだ迎えに来ないもどかしさ
縫物は糸が通らぬもう止めた
電話の声聞えぬ勝手に喋っとく
病などに負けぬぞ好きに生きてやる

八尾市 村上ミツ子

早春寒波こたつから出られない
小さい春見つけたきよりの回り道
絵に描いたもちがほどよく焼けている
忘れたいことはなかなか出ていかぬ
約束を守り川柳続けます

雛飾る指先白き雪が舞う

八尾市 山根 妙子

頬つねり曾孫の産声うぶこゑに手を合す

犬の名で朝の挨拶ウオーキング

残りもの一緒くた煮で一人膳

いたずら子敬語で話すようになり

大阪市 桑 田 ゆきの

寒波まだ忙し過ぎる風見鶏

春嵐啓蟄の虫怯えさす

増税に年金暮らし疎ましい

雛様も涙している低気圧

終焉を託す言葉に涙する

大阪府 野 田 栄 呼

締め切りと言う節に向け出す真顔

新聞が私の朝を呼び起こす

人生はプラスマイナスゼロでよし

残酷を生き抜いて来て聞く挽歌

ハルカスを一度歩いてからあの世

大阪府 米 澤 俣 子

いかなごの釘煮が匂う漁師町

ガラクタを溜めて金目のものがない

もういいと誰か言ってはくれないか

躓いた小石に不注意を学ぶ

間のびした顔がスパイス待っている

これも愛妻の寝汗をそっと拭く

駈込み寺やつとゆつくり桃桜

酒飲まぬ妻が今年も梅酒漬け

五時からの誘い新婚思案する

飲み友の誘いに揺れる休肝日

神戸市 山 田 婦美子

おはようと腫れた目蓋によびかける

匙加減しすぎて夫を太らせる

双肩にずつしり重い姑と夫

次の世の夢を枕にして眠る

半世紀愛を紡いできた宝

明石市 糀 谷 和 郎

今日を閉じ明日の揺らぎを予約する

飲まされた苦汁がやがて糧となる

明日の絵は自分に似合う色で描く

勘当の呪縛を解いた孫の笑み

一途さは誰にも負けぬ地平線

尼崎市 市 坪 武 臣

懇親会空気を読んで中締めにな

でまかせのタイトルで釣る週刊誌

声高は元気の証電話口

投稿にポスト撫でたり拝んだり

追伸に思いを込めてペンを置く

尼崎市 加川 靖 鬼

転がせばピカソマチスの万華鏡
出すぎてるようだ頭を叩かれる
天空へ星はべらせてコンサート
宇宙から見たら些細な小競り合い
ラリレロ舌が怪しくなってきた

尼崎市 長 浜 美 籠

ありのまま過ごした日々を礎に
行こか戻ろか迷いが続く雪の花
つもり貯金帳尻合うたことがない
南天を啄む鳥の声自慢
怖さ知らずの猫が梯子を昇りきる

尼崎市 藤 井 宏 造

ふる里の卓袱台いまも生きている
過去帳でたまにルーツの旅をする
長電話途中で欠伸してる妻
国境をなんなく越える渡り鳥
平和だなラーメン店に並ぶ列

尼崎市 藤 岡 り こ

義理チョコに人情の機微潜ませる
人情ではメダルあげたい四位にも
口笛が初めて鳴って孫笑顔
露の臺たらの芽 木の芽母の味
お水取り春の足音ついてくる

恥しい理由PTA困る

尼崎市 山 田 耕 治

笑っている絵文字で今日の無事知らず
とうさんと比べていつも叱られる
鈴蘭灯問わず語りにある昔

卒業式同窓会を決めている

芦屋市 黒 田 能 子

ケーキよりバラ一輪の方がいい
憧れはあこがれのまま消えました
リーダーの言うことだから大丈夫
やりくりをつけて気持はふっ切れた
笑うしかないもう私走れない

芦屋市 竹 山 千 賀 子

たおやかにしたたかに生き八十路です
後継ぎを待つように立つ案山子
明日へ飛ぶ心の翼抱いて寝る
テンポ良く動く五体に感謝状
ツボ押しして今日の体調如何かな

加西市 金 川 宣 子

春なのに脳が冬眠したまんま
咳すれば視線が刺さるバスの中
次々と孫の誘いに受けて立つ
赤い糸深い絆でほげけない
アイメイクだけでお出かけマスク顔

川西市 西内朋月

距離おいて付き合っているから平和

百均の傘は晴れたら捨てる駅

あれこれと身辺整理する八十路

にんげんが一番怖い帰り道

沢庵を食える菌をまだ持っている

川西市 米原雪子

雨戸繰る雪かともどう霜一面

やつと来たゆるやかな風春の風

ほかほかと散歩を誘う春日差し

進学の曾孫を愛でて食事会

可憐にもほったらかしが芽吹いてる

三田市 石原歳子

朝刊の梅の便りを真つ先に

早寝よし早起きもよし自由の身

独り身に喋る相手のない暮し

内心は子に叱られてよろこんだ

荒れている畑の主が気に掛かる

三田市 上垣キヨミ

口止めはケーキで足りぬ孫の歳

エンピツと話すとき長い絵巻物

高齢者集えばでかいエネルギー

ぞうさんとヤギさん残し翁逝く

お誘いの予定で埋まるカレンダー

三田市 尾崎一子

あれこれと欲は言うまい寺参り

制服に春の陽そそぎすがすがし

中流の親子とつてもよく育つ

さあ帰ろう梅もほころぶ春彼岸

長い冬抜けて大気を吸う命

三田市 堀正和

鼻声のまままで過ごした花盛り

年金へ儲け話を売りにくる

キーよりもペンが似合いの古希の指

そろそろと手品の種も尽きてきた

アリガトウ言う練習をしています

宝塚市 田中章子

二十年ぶり集うご近所さんの輪

夜通しでしゃべる元気を持ち合わせ

おのぼりさん浅草築地スカイツリー

友だちの輪にB型の多いこと

別れのことばはいかなご待ってるよ

西宮市 秋元てる

一族の重石の筈が手を引かれ

望比岬海ほろひの彼方の亡夫偲ぶ

食べ物も言葉も飲み込み悪うなり

岩木川とお墓が迎える里帰り

ソチ五輪そつば向いてる老いの影

西宮市 足立 茂

一円まで割り勘にするケチな酒
ブランドに頓着しない個性の美

経理部長が急に会社を辞めました

またあいつと絆深まる追試験

ウインクにのこのこ付いて行く呑気

西宮市 西口 いわゑ

偉大なる人が恩師という誇り

一汁三菜日本人の誇りです

電子音どうあがいても逃げられぬ

石仏が野守りのように立ち尽くす

風は恋人野原の花と響き合う

西宮市 牧 淵 富喜子

歩道橋手を振っている人がいる

八十路越えなお未會有と言う魔もの

会者定離有名人の計が続く

留守電は苦手はやくメールを覚えよう

三・一・一・三年経って尚重い

西宮市 山本 義子

脳の指令ゆっくり回る手足なり

終活はしっかりゆるり参るべし

咲き終えた花夕焼けに種のこす

無に還るまではくるくる回つこ

遠回りしてシナリオを書きかえる

西脇市 七反田 順子

恋こがれやつと咲いたか福寿草
巡りくる母の命日水仙忌

一人減り少なくなった綿埃

娘がくれた選りによつた春の色

のっそりと輪の真ん中にいるんです

姫路市 古川 奮水

雷門ちようちんの文字素晴らしい

ぶぶ漬の言葉お愛想つゆ知らず

サラメシを愉快に食うた若かつた

売り言葉あんじよう乗って負わされる

洒落言うて最後は始末負わされた

奈良市 阿部 紀子

故郷で父はレジェンド言われている

孫参加ロボット果敢闘ぎ合い

朝ドラの爆撃火の粉目に浮かぶ

喜寿なのに悟りの境地ほど遠い

ハルカスで同窓会すぐ参加あり

奈良市 岩本 浩二

無為の日々白紙の続く日記帳

恙無く労り合つて八十路坂

煩惱を引きづりながら行く余生

記憶から消したい過去が離れない

やんちゃくれ何が何でも大阪都

奈良市 大久保 眞澄

三步下がって夫のお尻たたいてる
シヤネル着て貧乏ゆすりする美人
他人の恋聞いてるうちに痒くなる
誠心誠意などと重たいことを言う
暗号か嫁から絵文字飛んでくる

奈良市 加門 萌子

積雪はもう無いですか五月晴れ
この地球想定外にさらされる
傘寿すぎと米寿の兄が鬢鏢と
人ごとでないわ畳の縁こわい
反日も詐欺も仲々鎮まらぬ

奈良市 天 正 千 梢

箸一本添えて甘酒すすめてる
テレビでは富士登山も楽に見え
雛飾りご先祖さまも笑みたたえ
ガラスの靴はけたはけたと有頂天
もういいかいもういいよと一人で遊んでる

奈良市 辻内 げんえい

倦怠期メールで会話する夫婦
素うどんが美味い美味いと見栄っ張り
富士山は下から眺める歳となる
裏切りを感じていても信じたい
握手して孫が笑顔でまた来るね

奈良市 米 田 恭 昌

傘寿祝いの柳友のメールがあったかい
五欲まだめらめら燃えていて傘寿
スタートは今でしょ怯むことはない
巨人戦ならダメ虎の目も炎える
断捨離が出来ず終活はかどらず

生駒市 飛 永 ぶりこ

わた雪のどっちつかずの依頼心
バリ島のブルーへ澱み放せたら
ゆっくりとあん蜜静観の時間
瑞瑞し大根の葉の血の巡り
ふいに出るDNAの大声が

香芝市 大 内 朝 子

呱呱の声上げた懐しい五月よ
ともだちと笑顔を食べている至福
折れそうな心を包む千の風
アングルを変えて飛びだす五月闇
ありがとういっばい言うて丸う住む

橿原市 安 土 理 恵

下萌えのきざし蘇生できるかも
隙間ない今日の予定とにらめっこ
この縁むすんでたのはたこの糸
たたみ終えて夫のパジャマ一叩き
空っぽになって眠ろう花の下

奈良県 中原 比呂志

手を握ることを忘れたスマホ指

両の手を添えて波長を整える

虫喰いの完治ができぬ薬師像

超音波画像で生き方修正す

トラブルに突っ込み知識得て帰り

奈良県 渡 辺 富 子

向き合ってだんまり続く春の冷え

春うららりハビリの杖リズムカル

エンディングノートひそかに待つ出番

君恋えば古都むらさきに暮れなすむ

それなりのドラマが好きないやリング

和歌山市 上 田 紀 子

酸欠の脳にヒントが届かない

一仕事終えて至福のお茶の味

電車から下り立つ顔は皆戦士

人間に疲れて針の一目追う

惚けちゃえば後はのとなれケセラセラ

和歌山市 柏 原 夕 胡

それからを問うまい海は凪いでいる

ペランダの花を毎日褒めてやる

何もかも大事で断捨離ができぬ

外面の良さへストレス溜めている

新緑を食べて充電するところ

和歌山市 喜 田 准 一

付き合いの長い薬でいとおしい

浮世坂大波小波越えて春

弱点に気付いてからの至近距離

死にたいと言うてお替わり飯茶碗

青空を仰げば湧いて来る若さ

和歌山市 坂 部 紀 久 子

消費税上がればいい事ありますか

大義名分探して今日も何もせず

エンピツが転がり落ちる行き詰り

日本人で良かったご飯と味噌汁

一坪の庭春色に染まりつつ

和歌山市 武 本 碧

がらくたの山に断捨離こぼまれる

最高の遺産は子らの仲の良さ

食材は多国籍でも和食膳

若い気がほうれい線に負けている

幸運を掴み取りした日の記憶

和歌山市 玉 置 当 代

啓蟄も寒の戻りで炬燵守り

怖いことなかったように海は凪ぐ

三年の月日復興まなならず

四方八方山に囲まれ鉄を振る

重ね着を脱いで春風心地よい

和歌山市 土屋 起世子

さくら餅買えば土産も桜餅
喧嘩した日も楽しくて墓まいり
パスタにも箸添え嫁のおもてなし
吐き出して心の負担軽くする
アハハハハ心泣いてる天の邪鬼

和歌山市 福井 菜摘

ハグをして母の認知を和らげる
大声で泣きたいこともある祈り
召天の母の笑顔が道しるべ
大役を終えて安堵と淋しさと
春の夢包む風呂敷蝶結び

和歌山市 福本 英子

上役にジャンケン勝ったことが無い
溜まって捨てる勇氣のない葉
ぬるま湯にどっぷり時間止める祖母
放映の歌までみんな花が咲く
貼り紙お断りと三枚貼ってある

和歌山市 古久保 和子

美術館の帰りに出会う人やさし
本箱の整理に彼の人の句集
後回しにしたい話を溜めた箱
指先の小さな傷が眠らせぬ
たくあんでご馳走さんを締めくくる

和歌山市 堀 富美子

あと一年もう一年と旗を振る
子等もまた重荷を背負い逞しい
家中がスマホスマホで味気ない
金メダル少年の謝辞微笑まし
雪国の厳しさ思う銀世界

和歌山市 松尾 和香

それぞれの人生重ねてるソチ
感動に涙会見爆笑も
元氣すぎ感性豊かとは言えぬ
旅をして心豊かになるわたし
川柳に追われ心身よく動く

岩出市 藤原 ほか

迷ってるうちに人生日が暮れる
迷ってた時が一番幸せだった
迷いなどないと思えた青い空
迷いなどないことにして米を研ぐ
道標迷わないでと書いてある

海南市 堂上 泰女

早春譜うたいたくなる梅明り
すんなりと詫びて明日へ日を灯す
子ら夫婦へ母天秤になつて
増税に備えカードにつく勢み
マチユピチュを想像させる古城跡

紀の川市 宇野 幹子

脱皮してまた脱皮して人になる

嘘まことこんもりと盛るオムライス

新刊書開けた場所から芽が伸びる

菜の花を和えて女の指定席

広辞苑繰る手は夢にもえている

紀の川市 北山 絹子

窓いっぱい開いて春の使者を待つ

入院の美人に優しいインターン

ラブレター筆筒の奥で欠伸する

カラフルな糸が織りなす春の夢

何かある夫婦黙って茶を啜る

(先月分) 八千代市 福原 悦子

手と足が揃ってしまいう体操だ

晩学の抽斗ついに空となり

寒くても私は一人散歩道

終章の劇は我が家で身につける

赦そうか耐えるかと舞うピエロです

第142回 大阪川柳の会

日時 6月3日(火) 午後1時開場・午後2時締切
会場 大阪市立総合生涯学習センター 第一研修室
宿題と選者(各題2句・席題なし)

△「旅」前川 和朗 △「元 氣」服部 泰夫
△「どうせ」久保田千代 △「骨」住田英比古
会費 1000円(欠席投句 6月1日まで 本田智彦宛)

〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706

水煙抄

(つづき)

和歌山市 平田 元三

亡母好きの色埋めたいプラランター

合コンに今は感謝の夫婦仲

遠慮せず猫だけ行き来する隣

良い夢を見ると仮眠を引き延ばす

岩出市 村中 悦男

セピア色写真が過去をよくしゃべる

こんな所に今用のないさがし物

特別に話はないが足が向く

ピーポーに乗った話の長いこと

田辺市 大峠 可動

春の潮満ちて男は冬を脱ぐ

自由主義抱えていたのはマグマたち

点線はこころの乱れ更年期

春雷が苦手で歩幅狂いだす

川柳塔の

川柳讃歌

(13)

木津川 計

私でも褒められそうだ弔辞では

松岡 篤

この国三大人形劇団の一つ「クラルテ」の芳川雅勇が享年81で逝った。僕の弔辞である。クラルテは三人の力で生れた。創作の吉田清治、制作の宮坂暉男、人形の芳川雅勇は共に17歳、高校生だった。以来三人は食うや食わずの献身。「ええ人ほど早死にはると僕に言う」通りに三人は順に退場した。人形に恋して生涯独身の芳川の最期は昨年11月、それから冬になった。ようやく春の胎動を後輩たちが始めた。もって瞑すべし。さようなら。

篤さん、心掛けのええ人は皆褒められます。

同窓会名簿に男僕だけか

土橋 はるお

まことに学は成り難く、少年は老い易いのである。年毎に計報と喪中ハガキがふえて、しだいに少く、やがて絶えるから今号井上照子さんも「寂しくて少ない賀状いく度読む」

と。孤独に耐える思いなくして長生きはできないことを知る。

ならばはるおさん、たった一人の旗を振り続けてくれないか。朝起きて「あなたの地を僕は望見する。おお、今朝も旗が翻っている。

思い出を友と拡大コピーする

梶原 弘光

向田邦子は海外旅行すると彼の地のトランプを買って帰り、友人にいつもプレゼントしたという。多分彼女は人生をトランプゲームになぞらえていたのだろう。

カードを切る。何が出てき、配られるか知れない展開が人生に重なる。思い出を克明微細に再現した大西巨人は『神聖喜劇』で天皇の軍隊の非人間性と愚劣さを描き、向田は思い出を拡大して「思い出トランプ」を書いた。

弘光さん、幸せな思い出を拡大して下さい。

父母にやさしくなったバイトの子

山田 耕治

8歳(男)、6歳(女)、4歳(女)、1歳(男)の4人を残して母は後ろ髪を引かれ泣きながら逝った。35歳の父親が母親役を務めた。電車の運転手の彼が子供らの弁当を作り続けた。上の娘は中学生になるとクラブ活動をせず、一家の夕食をこしらえ、主婦になった。上の二人は高卒で勤めに出、下の弟を大

学に通わせた。こんな健全な一家が巷にある。

父親は再婚もせずに老い、長男夫婦と暮して先年74で死んだ。4人の子が棺を覆って号泣した。懸命に生きた父親は幸せだった。

耕治さん、バイトの子を見守ってください。

人間の味を哀愁から学ぶ

斉尾 くにこ

強欲や非道、冷酷や背理、財力や権力を握る人との付き合い合いは断わりた。

またしても丸山薫の「詩人の友」を引用する。「敗れた者でなければ友ではない。(中略)声たてぬ噓り泣きこそ／われら詩人の味方なのだ」。川柳も同じではないか。強欲・非道を撃つ川柳は「人を憂う」優しさの味方である。くにこさん、僕は哀愁を好む貴女の味方です。

一寸ジェラシー交じった拍手しています

松村 里江

鉄に錆がつくように人間誰しもジェラシーはある。あるから努力があり。懸命になり、自分を築き、世間に働きかけてきたのだ。ジェラシーを奮起のスパイスにした人こそが自分を高め得るのだ。だからジェラシーは可能性のモーターである。もはやジェラシーも感じなくなつたとき、人は十分にせよ、不十分にせよ、役割を終えたのである。

里江さんにはまだ可能性があるのです。

(「上方芸能」誌発行人)

白選集

小島蘭幸

点滴だけの一日だったのか母よ
退院の母の背中を見ていたよ
ふところの深さを思う時ひとり
背負う物いっぱい持っている元氣
ひらかなの深さに負けてなるものか

恒松町紅

声だけは若いですねとからかわれ
健康の証晩酌味がいい
何事も考えてみる老いた脳
よく失敗やっぱり年のせいだろう
先輩の背中見習うことにする

津守柳伸

なに事も興味しんしん猫じゃらし
エレベータースロープ完備おこしやす
かがり火を焚いて迎えるおもてなし
駄々っ子を満足させる鮎と鰯
引き際の美学余禄を確かめる

遠山可住

外は雪オリンピックを見て飽かず
お金にはならぬ器用でご多忙で
宝くじ売り場でやあややお元気で
お歳ですネゆっくり蔵う聴診器
晩酌一合が長寿とはいいいニユース

都倉求芽

もう春ですか風にたずねる春彼岸
見た目にも軽く浮いてる春の雲
春が来た少し悩みもゆるくなる
女性はいいな春色の服短めに
法要の仏が増えた春彼岸

土橋螢

荒城の月尺八を吹き鳴らす
葬送の曲はゆっくり海ゆかば
死ぬことを忘れて飯を二杯食う
乱世を見送っている曼珠沙華
極細の万年筆で恋をする

西出楓楽

夢を追いかけて転んだことがある
想像はご自由に指示代名詞
手ぐすね引いてオレオレ詐欺を待つ無聊
あやとりの相手が居ないまま春に
ちよつとした余裕杉下右京みる

仁部四郎

昔なら大岡様というケース
ジャンケンかクジですむケースだつてある
ケースバイケースと法律ふりかざす
法律もお金も通じぬケース
おしまいには戦争とでもいうケース

波多野五楽庵

透明な夫婦で死後を語り合う
ひっそりと逢うて花酔い花疲れ
生きのびる約束があり水ぐるま
罪のない人と訣れる花の雨
言い訳をしようか涙流そうか

林瑞枝

銀鱗を飛ばすお月さまとの恋よ
新婚のふる里桜の舞うような
方向音痴の私に優し星の駅
貧しさを顔に描かないようにする
雪降ってこそその湯けむり女です

前たもつ

甲子園母校どっこい生きている
風邪花粉持病喘息通過中
急がずともあべのハルカス然と立ち
一日を充実しながら追っている
聖書開き妻と重たい話する

政岡未延子

きな臭い風まで運ぶエアメール
若駒がサクラ咲かせてくれました
黄昏の道に入りこむ認知症
要も老いて空気が少しずつ洩れる
残り火を少し楽しむティールーム

三宅保州

当て外れ見えないものが見えてくる
皿回しますかそれとも乗りますか
お立ち台陰で支えているコーチ
何かもの足りない鳩の出ぬ手品
不幸中の幸いなどと言う他人

宮西弥生

ハルカスに上りつめたら夕暮れる
舞い降りた天女のごとき椿散る
後期高齢女の匂がまだ伸びる
匂の真ん中出番の幕が今上る
カラットの指輪も外し太極拳

おもかけ

八木千代

頼んだら起きるまで鳴る古時計
どうにか動く手足で蒲団から離れる
み仏に先ずまっさらな朝の水
元気かと問うてくださる仏さま
面影も濃くて冥忌 薫風忌

両川洋々

臓器提供したいが酒の気が抜けぬ
偉くないから偉そうにしているだけ
母と言う港で眠る難破船
妻も子も我が家はみんな放し飼いの
拍手喝采しないとうちのバラは枯れ

板尾岳人

母からの手紙に川の音がする
生きている戦艦大和火葬する
水に流してアンネの日記口にせず
出所して聖書とメロンパンを買う
お水取り火の粉を浴びている聖書

河井庸佑

紆余曲折結論やつと付けてくる
適材を適所に据える器量人
退職へ悠悠自適道模索
緩急自在危機にも動じないエース
冷却期間置いて妥協の年の功

川上大輪

雑巾の縫い目を走るたま電車
笑顔品切れ入荷はいつになるのやら
どうしたら明日の方へ行けますか
鉛筆があればどこでも道になる
わたくしの余白を埋めてゆく他人

小西雄々

舞踏会帰る空には春の虹
軽食へ豪華メニューが気にかかる
喧嘩独楽火の息吐いて勝利した
悪女とは思わせたたくない十三夜
夢ばかり書いた文集笑えない

斉藤 効

アルパムのどの子も瞳澄んでいる
選手宣誓雨雲を吹き飛ばす
チューリップみんな園児の顔で咲く
少年のまなこ青空ばかり向く
春の門くぐると失せていく迷い

新家完司

半数は飲み仲間なり坐禅会
飲みすぎの吐き気こらえて結跏趺坐
去る勇氣なくて続いた坐禅会
雑念と雑想抱え結跏趺坐
坐禅会いつやめようかやめようか

川柳 神戸吟社 5月句会

(川柳神戸吟社創立1周年記念川柳句会)

日時 5月18日(日)

場所 神戸市立 こうべまちづくり会館 2F ホール
神戸市中央区元町通4丁目2-4 元町商店街
TEL 078-361-4523

神戸高速「花隈駅」東口から南へ徒歩3分
JR元町駅西口から元町商店街を西へ徒歩8分

課題 (各題 3句提出)

「朝」 選者当日発表
「囁く」 選者当日発表
「船」 西出 楓 選
「雑詠」 梶原サナエ 選

席題 1題あり 会費 1000円

締切 午後2時10分 開会 2時20分

投句可 (23センチ×4.5センチの句箋に記載)

投句先 〒670-0884 姫路市城北本町9-15
濱邊稲佐嶽 方 事務局

投句料 図書カード 500円分1枚

主催 川柳神戸吟社

第7回 ごんぎつねの郷 全国誌上川柳大会

課題「鳥」

(一口2句・12人による共選・複数応募可・清記選)

選者

伊藤 寿子・渡辺 松風・加藤ゆみ子
加藤 鯉・興津 幸代・吉崎 柳歩
赤松ますみ・樋口由紀子・石橋 芳山
梅崎 流青・中山 恵子・浅利亥一郎

募集期間 6月1日～7月31日(消印有効)

投句料 1000円(切手不可・小為替等使用)
(誌上大会用紙他 便箋等使用のうえ2
句を1枚の用紙に記入のこと)

投句先 〒475-0805 半田市浜田町2-1-4
川柳きぬうらクラブ 宛

問合せ「ごんぎつねの郷」全国誌上大会事務局
浅利亥一郎 TEL 0569-26-0721

温故知新

『谷垣史好句集』より

なめんなよ腹に晒を巻いている
蚊とんぼよお前もきつと病気がち
抱擁の目のはしに入る天主閣
スリコギのいのちを思う母おも
愛は淫らナメクジの這うた跡
げに妻という名の不沈空母かな
弱い者同士に似合う繩のれん
月光よいつか一人になる茶碗
二階から見る葬式の喜劇めく
幸福な視野を横切る黒い猫
ご無沙汰は故郷のいとこと古本屋
おお同志日光写真真知ってたか
俗中の俗太刀魚の銀の色
浅漬けが好き人生を割切ろう
秋になりパンは六枚切を買
う
こんやくの角がうまいぞ冬の酒
端金それが子供の言うことか
ああ恋の骸よ女あくびする



川上大輪選

大阪市 栃尾 奏子

悲しみを映し無口になる鏡
膨らんだ不満脱水機に入れる

わだかまり溶ければ小さじ一と半

見落とした毛玉に見栄を破られる

満たされると直線的になる

一色を落とし翠は加速する

豊橋市 藤田 千休

近未来入居予定の墓磨く

念入りな化粧が大魚釣りあげる

通り雨恋の予感をさせて止み

しゃぶしゃぶになったつもり熱湯好き

消しゴムが斑に消した記憶力

お白洲で妻の吟味がまだ続く

岡山市 藤成 操江

譲らねば共に傷つく白と黒

叱る人なくて時々落ちる穴

気配りが過剰で部屋は楕円形

許される範囲で線を越えてみる

逆立ちが出来そう春の真ん中で

引き算を重ねて歩く先の道

瀬戸内市 東横 ますみ

一合の酒で老父は海になる

沈む日も浮く日もあろう米を研ぐ

明日の絵を吊るしゆるりと夢の中

ときめきをまだ残してる古帽子

錠剤とところがる春はまだ遠し

百均で老いの財布がよう遊ぶ

大洲市 花岡 順子

やりくりの手間も費用も消費税

御破算で赤字が消えるわけでない

春の陽が呼ぶから何処か出掛けよう

張り切るとパニックになる膝小僧

傑作が一晩寝ると並になり

化けるのもう止めました倦怠期

山口市 中前 幸子

朝の砂丘を歩く風紋消しながら
別れ上手な風とブランコこいでいる
増税の話へ苦いコーヒーと

透明な街で微罪を裁かれる
ゴーストライター色の無い風が吹く

生返事している風の裏切りよ

貝塚市 吉道 あかね

行くところがあってそこそこ元気です

家計簿が予算オーバーする四月

診察券が増える年金もろてから

台湾で違和感のない同じ顔

足つばをふたり並んでマッサージ

白黒を付けたりしないのも夫婦

米子市 湯浅 俊久

辛抱が腹に収めている火種

約束は指の輪ゴムが忘れない

人前で背筋を伸ばす嘘をつく

サングラス掛けて目線を上げている

勝ち組は毎年したいクラス会

散り際もふんわり乗せた春の風

川西市 大坪 一徳

御破算で願いましたは定年後

息を詰め頑張る癖が抜け切らず

大切な残り時間がただ過ぎる

ネット囲碁地球の裏にライバルが

小言言うつもりが先に労られ

アルバムで髪の世界を確かめる

宇部市 高山 清子

後期には後期の誇り意地がある

ライバルの笑顔の謎が気にかかる

軽い嘘ついて急場を切り抜ける

多数決顔ぶれを見て手を下ろす

転ぶまい惚けまい老いの見栄を張る

もめごとへ卒寿はそつと席を立つ

松江市 武島 千代枝

幸せはスプーンで掬う程でよい

春うらら足も財布も軽くなり

おいと呼ばれはいと答えた日もあった

針の穴ぐらいだろうに苦労性

病院の待合い医者の評価論

骨量が減って口数増えてきた

松山市 栗田 忠士

腕組みの中に眠っている野心

投げてみた石の波紋にうろたえる

意地を張るほどでなかつた意地を悔い

俺はこう生きたと言えるものがない

逡巡へぐつと背押す父の海

母さんが輪の真ん中にある平和

米子市 森脇 麗

ピンク着て春を一手に引き受ける
ときめきの種をいつでもポケットに
老の字を忘れる紅を今日も引く
豊かさに慣れて人間脆くなる
要点をしっかり書いた亡母のメモ

倉吉市 中村 毅

何故嫌うゴキブリがふと独り言
ゴキブリの逆襲劇は午前二時
だとしても責めてはならぬ杉林
制服が衣装ケースに畏まる
春近し一直線の北帰行

松江市 山根 邦代

ふる里に想い巡らす春の雪
足音が背中押してる踏み出そう
元気だと分る詩歌の友の出来
美容院出れば私もいいおんな
これからもときめいていく七十八

雲南市 菅 田 かつ子

もったいない言っては食べる残り物
アルバムに昔の恋がひよっこりと
番犬がいいよいよいよとしゃぶり
何気なく小皿に盛ってある心
暖かい便座にふっと一句でき

岡山県 池田 たか子

足すものも引くものも無い日が沈む
待ち侘びる春にカルテが重くなる
病院の椅子に爆笑禁止令
夫が干すストッキングは逆さ吊り
心まで病んではいけないさくら咲く

岡山市 工藤 千代子

ウキウキが滲み出したの春の風
わたくしを洗ってくれる朝の庭
ときめいたことは語らぬバラの赤
反論を口にしてからです独り
あの時の教訓希望などいかが

岡山市 永見 心咲

カレンダー揺れて生き方また迷う
窓辺にも春は忘れず来て燥ぐ
全開の傘がためぬ嘘ついて
舫い船といひひとりになる鏡
大海を知らぬわたしの船溜り

竹原市 若年 幸子

はんなりの雛に若やぐ侘び住まい
パツと黄水仙春へスイッチオン
消えぬよう平和という字ラッピング
一喜一憂学びの道はゆつくりと
泪拭き友の絆と丸くいる

南あわじ市 萩原 雅 月

言訳が嘘をますます赤くする
張り切ったひと月が済み五月病
大陸の汚染にマスク買わされる
新入社汚職するとは見えぬ顔
選ぶ人無いのに来いと投票所

北九州市 小松 紀 子

かみ合わぬ返事に母の老いを知る
がっかりはおろし大根辛くない
冬野菜兄が元気で里の味
骨抜き魚に海を感じない
磨いても光らぬ私でも磨く

唐津市 岩崎 實

自転車も車も捨てた老いの杖
ポストまで行けぬ配達門で待ち
拡大鏡持てど疲れがすぐに出る
丸め投げ手をのばしては拾い入れ
湯たんぽをそつと今夜は遠ざける

塩竈市 木田 比呂朗

退職後まだ連休を気に掛ける
スニーカー歩幅狭いと独り言
悔しい日つづき右脳を軋ませる
ひげ剃ってつくり笑顔を確かめる
川柳もああストレスの味方かも

横浜市 川島 良子

知っているつもり理解はしていない
ONとOFFどう切り替える休息日
優しさの中に狡さが見え隠れ
燃え尽きて次の一手がまだ打てぬ
結論は日記に書いて今日閉じる

愛知県 樺 嶺 志

週一度妻訪う悲しホームの夕
帰るなど継りつく目の妻哀し
お父さんかすれた声で妻が呼ぶ
介護者の幼児言葉に怒りの目
悲しさと悔しさ滲む動かぬ身

大阪市 太田 としお

価値観の違いで妻とよく揉める
諦めるこれも立派な処世術
机の上では一十一は二になる
人生はたと笑った方が勝ち
肩並べ敵も味方も墓の中

大阪市 高杉 力

欲しいもの何もないわと母米寿
検索は早い順より安い順
弱ってる証拠占い欄を見る
自販機のみくじで明日は分かるまい
見て欲しい人ほど見ない棒グラフ

大阪市 寺本 実

日陰ではどっこい生きてる雪だるま
雨かしら空を見ないでスマホ見る

寝返りをうって故郷の夢を追う

しつかりと覗いて買った福袋

当人と知らずウワサを話しかけ

大阪市 藤田 武人

雲行きを見極めている操舵席

ハンドルを切らずに君を目指します

最上部見えた辺りで踏み外す

今日は今日リセットしよう縄のれん

様々な目線で集う立ち飲み屋

堺市 羽田野 洋介

聞くだけなら荷物にならぬまあいいか

条件の全てを満たす答えなし

裏口を出るとそこには別世界

週刊誌とコミックだけが愛読書

飲み会もいつしか腹の探り合い

堺市 山崎 早苗

中国の有り難くない贈り物

いくらなら当たりましたと言えるのか

バス旅行仕事以上の分刻み

おとなへの階段どこへ続くのか

寺のなか笑顔が並ぶ七回忌

堺市 大和 峯二

人生も耐える修業もまだ半ば
老いてまだこの世の隅で咲いている

辛酸を舐めた話は身にしみる

どこでも花を咲かせる気持もち

少しずつ角がとれたか人が寄る

池田市 上山 堅坊

人生ゲーム自分でジャッジすればいい

お互いの秘密だいいにして夫婦

飲む誘い気合いを込めて丸サイン

スマホ見て世間を見ずに歩く人

調理済みパックで鍋が欠伸する

貝塚市 石田 ひろ子

ちょっと聞いてと孫深刻な顔をして

胃の中の微笑みくれた内視鏡

いかなごを炊いたと友が春を連れ

花供え墓前に旅の無事祈る

歯の痛み夕餉の顔を暗くする

河内長野市 大島 友子

家車皮算用の宝くじ

マネーゲーム人の弱みに入り込む

床磨きぎっくり腰の土産付き

人生ゲーム負けてはないが勝ちもない

小さな店大きな声が客を呼ぶ

河内長野市 辻村 ヒロ

朝寝坊しすぎて何故か疲れ気味

ご馳走も一口我慢消費税

ぶつぶつと消した火種が独り言

惚れ葉賞味期限はとうに過ぎ

流し目がバッチリ合って不整脈

河内長野市 藤塚 克三

無駄使いたらストレス飛んでもた

不思議だなあ何もせんのに腹が減り

口にした駄菓子で昭和蘇る

ばれかけて急遽ピエロのふりをする

辛うじて浮かんでいるが泥の舟

岸和田市 中岡 香代

花が咲くライフスタイル目差します

寝不足の二重瞼を喜ぶ娘

鍵にぎる人が多くてわからない

トリックで自分自身を見失う

あとひとり男子が欲しい鯉織

豊中市 荒木 郁子

加速度のついた年齢愚痴ばかり

母が居て我が家の平和保たれる

人の和にとけ込む術は年の功

病室の見飽きてしまう白い壁

二人から一人になって身が軽い

豊中市 荒巻 夢

帰り際頬寄せ生を確かめる

五十年添えば愛憎超えるもの

棺の中高くなつたねと鼻つまむ

この自由夫が最後のプレゼント

夫の骨抱いてテレビを楽しむ夜

豊中市 源田 啓生

花を待つ誰か良い人来るような

春の宵晶子の歌に恋心

厳寒は風呂に入るも一苦勞

地震にも核にも脅え生きている

向う岸へ渡る泳ぎは未だ知らず

豊中市 南 正代

ラジオ体操朝一番の時間割

問診票女の過去を知りたがる

出無精をその気にさせる花だより

孫菓立ちやつと終ったのし袋

屋形船竿のさばきに春をみる

富田林市 中村 恵

さあ今よ背中押されて乗るチャンス

突然の指名ごときに怯まない

体力は無いが頭脳戦では負けぬ

思いがけずしつかり者にある抜け目

ほっとする仲間外れにされてから

羽曳野市 藤原 大子

神戸市 井上 忠貞

真つ直ぐに受けとめられて焦り出す

しちやいけない思つたとたんミスして

強がりを書いては弱い自分見る

過ぎてから気づく言葉が多すぎる

もやもやは心の狭さ小ささか

大阪府 小栢 こそえ

平等に老いが来るから悔いはない

齢なりにおしゃれしているまだ元氣

程々を知って自分を取り戻す

子沢山苦労した分福がくる

頂上はあるが登りはきつすぎる

大阪府 神野 千恵子

ペランダに少しおませな芽が伸びる

検査値が食欲の芽に塩かける

少しだけ先を歩いている孤独

おしゃべりも無口な人も風邪を引く

相棒がいて喜怒哀楽が豊かなり

大阪府 高木 道子

故郷に皆帰れば主都も過疎

除雪車の頤忙し雪の原

中国のいけずは日本の空気まで

話し中お喋り未だフォルティッシモ

麗らかに成ればどつぷり2・5

でまかせが言えぬ性格生きづらい

「川柳塔」待ちわびて見る自分の名

明日はあす今日をいっぱい生きてゆく

許すことおぼえてからが楽になる

何事も許す心が人寄せる

神戸市 能勢 利子

エンディングノート先送りして今日も無事

卒寿過ぎ老母の年金余り出す

気の許す友と飲んだら二日酔い

オンザロックのふりして飲むウーロン茶

聞いていると言つても聞いてない夫

神戸市 山根 弘子

こっそりと開けて見たいな君の胸

句作りに言葉の海をさまよつて

怒られるうちが華よと母の声

義理チョコを貰つてはしゃぐ老いの恋

真夜中にこっそり帰る千鳥足

三田市 足立 つな子

春彼岸漫ろ集まる先祖講

仲人の思い違いの出会いです

逆境を忘れた振りで五十年

荷物さえ持たぬ夫と老いの旅

スケッチに興じる至福ひとり旅

三田市 上田 ひとみ

いいですか隣の席にすわります
心配は笑顔ひとつで吹きとばす
ブレゼント持って行きます春風と
やめておく細かいことは後回し
考えて考えて今の私です

三田市 辻 開子

庭の梅ケキヨのけいこで春知らせ
脳おこすグーチョコキパーが今朝もでき
涙腺のゆるさ亡母似で古希近い
メールする指の運びがただならぬ
手弁当母の心が味にある

篠山市 北澤 稠民

いつの間を守る姿になる老後
言い過ぎた言葉を悔む二三日
農の苦を知らぬ背広の机上論
不作です農機のローンだけ残り
妻や子に見せぬ仮面の数いくつ

西宮市 福島 弘子

荷は軽くもう道なりの七十路
アハハハで済ます失敗今日もまた
末期だと言えず看病笑顔だけ
土壇場で本音が言えずほぞを囁む
春の嵐美容院帰りをかき乱す

紀の川市 楠原 富香

子が巣立ち不協和音が首を出す
美化された山に危険がつきまとう
下手でいい温もり届くペンの文字
家族の和ささえた母の縁の下
ハードルを下げて見出し出す幸の数

田辺市 小川 イセ

急かすとも明日は雨もきつと止む
いやな事総て忘れる花作り
煙突が消えていつしか過疎進む
倒れないようしつかり麦を踏みました
満開の菜の花私の汗も入っている

和歌山市 北原 昭枝

近すぎて見えない石に蹴躓く
天秤棒愛の重さを計りかね
吊るされた糸に踊っている魚
大切にされて箆笥の奥にある
美しい花へ油断をしてしまう

和歌山市 森 下 よりこ

願いごと言えたことない流れ星
曾孫守りする私を看る娘
ここだけの話固まる田舎町
路地の向うにとてもおしいレストラン
果樹園の三月力満ちている

鳥取市 大前 安子

泣くつもりなのに涙拭いている
気分変えアングスローで投げている
春の陽へ五人囃子をお迎えす
欠点と言われたところお気に入り

鳥取市 近藤 秋星

被災地に一番先に咲け桜
本当の春はいつ来る東北に
ホームにも漸く遅い春が来た
川柳があるから僕は生きられる

鳥取市 坂本 とも湖

無料でも地獄だけには行きません
入試の日茶柱立って自信つく
朝刊で無料の文字に目が止まり
無料券沢山手にし行きそびれ

鳥取市 高原 かおる

また開けて旅へのカバン落ち着かぬ
立ち直るチャンスくれた仏さま
耕した土の未来は花盛り
春の陽に忙しい音の耕運機

鳥取市 谷口 回春子

寝たふりでひそひそ話聞く本音
寝姿にそつと顔出すDNA
悪口もユーモアですと茶を濁し
可愛さに痛み忘れて孫抱っこ

鳥取市 津村 律子

被災地の想いを込めて舞う結弦
ソチ五輪流石とうなる真央の舞い
趣味違ふ夫に聞いて叱られる
本当の憂さはなかなか言えません

鳥取市 山下 凱柳

美味しい話ついつい色気出した欲
誠心誠意言葉の意味が軽くなり
本心を隠すつもりがついポロリ
寝物語にした約束が高くつき

倉吉市 岡崎 美知江

衣替え出すも仕舞うもポロばかり
ベッドから絆の鈴が呼んでいる
臆病の帽子が深くなる季節
猫背だよ言われてすぐに胸を張る

倉吉市 田中 紀美恵

動かずにスイッチオンでメタボ腹
黙っていても人柄わかるえびす顔
黙って目で論す母には愛がある
生ゴミへカラスがチャンス狙ってる

倉吉市 堀 かずこ

失敗を包みかくして知らん顔
傷ついた心を包む人がある
ぶらり旅おりてみようか次の駅
増税で財布のひもはかたくしめ

安全を信じ発車の指示を出す

境港市 中井虎尾

花咲けど我が句のつぼみかたいまま

ドン尻も完走すれば大拍手

ふえるはずピットコインが消えた怪

米子市 池岡たけし

無駄金と承知しながらつい出る手

暖を待つ老いた夫婦に春の声

窓ごしに浮いて舞うよな春の雪

健やかな暮し楽しむ老夫妻

米子市 生田和之

旧道を知ってるだけにまた迷う

出戻りがたこ焼き文化持ち帰る

ロボットにまだまだ負けぬ人の勘

気休めであればと主治医薬出す

米子市 小野鶴子

花見莫塵隣りの場所がよく見える

伐れぬわけ一輪咲かす山桜

窓をたたき遣らずの雨がいけずする

蛩として水辺の権利もっている

米子市 野川宣子

思案抱えてそれでも今日の米を研ぐ

思案ひとつ振り切る様に紅をさす

ほどほどが難しいから手は貸さぬ

ご先祖に大酒飲みがいたらしい

米子市 見山温子
ほうせん花弾けて何処へ飛んでいく
賞味期限すぎてごめんね仏さん
レシビ張り奮闘してる幼な妻

節分の豆の掃除はハトがする

米子市 田村周子

人生に無駄な事など無いそうなの

無駄骨を折ったつもりが吉運だ

良い思案いい物食べて福待とう

何事もほどほどが良いこの浮世

米子市 加藤正二

強がりと言った割に駄駄こねる

今一の体調掘れば病の巣

年重ね桜見するも大仕事

あれこれと思案するまに八十路越え

鳥取県 飯野菖子

冬の空大人のような顔をする

初詣で過疎の村にも神が待つ

優しさも素通りします老いの耳

里帰り母はみやげに氣遣って

鳥取県 下田茂登子

退院を夢見て逝った夫いとしい

家族の絆歳に拘ること出来ぬ

他人の死保険があるか聞きに来る

来世も逢う約束が出来ぬまま

鳥取県 田口清帆

雲南市 松本昌

桃の花心たのしい雛まつり
あいさつが結ぶ人の心と地域の絆
風よりも静かなことば手話の指
くどくどと終らぬ小言うわの空

鳥取県 橋谷静江

胃カメラが写す余命は知らぬまま
草むしるその手が妻を強くする
日々健康医者の薬を飲んでから
二次会で本音を知って酔い覚める

安来市 原 煩惱児

仲が良く風邪まで夫に貰う日々
最高の他人と暮している夫婦
年金で熨斗の中味を考える

プランター花も出番を待っている

松江市 相見柳歩

左遷地へ栄転などと見送られ
酒煙草用がないので生きている
どの顔も輝いているパラリンピック
幸運にまた逃げられた風の向き

岡山市 田中 恵

潤ってくるよあなたの甘い声
確実にあなたに熱をあげている
重くても時間の束ね捨てません
別人だロマンを語る時の顔

松江市 中筋弘充

捨てきれぬ夢がときどき脈を打つ
体調を粥がりセットしてくれる
いざと言う時に備える馬鹿力
欲の実が落ちて静かな指定席

岡山市 丹下凱夫

男料理並べる妻の誕生日
牛よりは鯨食べたい戦中派
他人が育てた牛の肉なら食べられる
リサイクルショップで人の噂も売っている

出雲市 黒目英男

全体が見えて妻までそっぽ向く
懐手してこんにやくが動かない
風向きが変つてそそくさと帰る
ラーメンの替玉たのむ健康度

岡山市 前田 恵美子

オリンピック「メダルメダル」とまくしたて
神頼み生きていたいな五輪まで
ライバルは自分と違って尻たたく
自分との闘いですよ人の道

予定などあつてないよな主婦の日々
気分よく食べて歩けば元氣わく
その時の気分でなるよ認知症
ばば様も心ときめく雛まつり

倉敷市 安東モモ

ヒヤシンス鉢の下から顔を出す
あき家には主人待ち顔梅咲いて
ごみの日はカラスが見張りしているよ
割烹着注目されたこともあり

玉野市 片岡富子

指摘したいコンビニ言葉苛つくね
湿疹に責められケーキ御預けだ
増税に後押しされて家電買う
サイクロンより紙パックと母が言う

尾道市 日谷寛

一途さに難所いくたび恋の猫
ふたたびの恋に目覚めて山笑う
ひたすらに愛の火点す恋蛭
紫陽花の恋は雨にも七変化

三原市 鴨田昭紀

七癖のある人柄が温かい
ぶっきらぼうな言葉に思いやりがある
美しい色に微量の毒がある
地位名誉なんぞ無縁の作業服

竹原市 土井輝恵

江戸の世に北前船に乗った雛
慣れるとは恐ろし紙のコップ好し
他人事なんて言い言い口を出す
捨てぬ癖昭和一桁共通点

竹原市 六田半徳

檀まの木種を残して春を待つ
一休は小ぶりの椿白い花
沈丁花遅めの春に香気出す
改めて自画像描いて反省を

防府市 坂本加代

どんぐりは集中力で浮上する
もしもなど頭になくて一直線
プライドにまっすぐ歩く道がある
何もないせめて笑顔のおもてなし

香川県 田口彦六

正直に訊くがともだちいないのか
死んでいた人を訪ねてもどる駅
単身赴任もう葉桜になりました
鯨通る室戸の沖のやさしさよ

松山市 神野きつこ

元総理地デジの中でよく滑る
月明かり通帳の残高見てる
ばかもとテレビニュースに叫んでる
わたくしも背中見られる年になり

今治市 渡邊伊津志

我が影を押さえて滑るアメンボウ
真赤なり正直者の唐辛子
純粹な心邪魔する世間体
善人の目線で見ると騙される

高知市 三谷 待太郎

カミさんは真央ちゃん尋ねソチ時間

爪を切る限りはずっと生きている

胃袋がお前と心中まっぴらと

冷凍に子孫を托し男逝く

福岡県 本田 さくら

寅さんはあの世にいても笑わせる

マスク便利多少素顔でどこへでも

孫二人言葉と仕草目を見張る

殺人犯普通の人がなる怖さ

佐賀市 清水 園實

やかましかジャイアンツ負け犬が吠え

梅の木も二度の剪定まばら咲く

要領は善用とするわが体

得得とたのみもせずにチラシ入れ

唐津市 北村 松風

先約があると意地張る自尊心

日日静か医院別老夫婦

マス酒のうまさ忘れぬ腹の虫

漫歩する私へ夜風語りかけ

唐津市 吉富 節子

ブランドのバッグに似合う服がない

ひな祭り孫に呼ばれて若返る

春の声聞いて足腰動きだす

佐賀県 門井 孝

宿題が未だ解けない七十路

観梅にごほうび貰う五七七

終業ベル軽やか足は赤ちようちん

やさしさとかわさが隣女房です

佐賀県 真島 久美子

春うらら漢字で攻めてくる檸檬

黄信号点滅秘密こぼれそう

わたくしが変色したら恋をする

スカーフの黄色が春になりたがる

熊本市 杉野 羅天

大を中にしたい大雪と大雨

ハルカスが大阪行きの楽しみに

バラなのにレモンの香りする新種

一輪で良し花の気高さ力くれ

山鹿市 前田 幸子

宝くじ大事に仕舞って期限切れ

また一人愛しい友の欠ける年

頑固さは死ぬまで息子と口争い

転ぶたび痛いことより子に叱られ

山鹿市 三谷 たん吉

なりゆきとその日の気分で息してる

幸せそう仲人ぬきでお嫁入り

信念は気分次第ですぐ変わる
さあみんな野良の生んだ子どうしよう

シドニー 坂上 のり子

寝てるトラ起こした日本進む道
ノラ猫と言えばジジイと負けてぬ娘
イケメンのいるうどん屋に誘われる
きらいなこと生まれ変わって直したい

札幌市 斉藤 宏子

店頭の野菜さらさら春を呼ぶ
菜の花を舌で味わい春を待つ
シャッター街のつそり猫がしのび寄る
受験票胸のお守りそつと撫で

札幌市 富永 恵子

文明の垢にまみれた原発炉
花キリン春の陽差しに咲きほこる
ゆるゆるとアナログ暮らしベチカの火
点滴にのんびりせよと諭される

弘前市 須郷 井蛙

消費税おしんを思えば何のその
コンビニに命をつなく橋がある
金欠病医師も処方してくれず
万歩計今日の睡眠薬をくれ

弘前市 高森 一吞

不変不動妻の笑顔に救われる
二度三度義理を包んだ紙のしわ
我が影もグルコサミンを飲んで
政敵も夜には同じ酒を飲む

弘前市 吉川 ひとし

戦いを終えた両足錆びてきた
海鳴りを聞いて砂丘に埋める愚痴
終電に間に合う傾いたお猪口
泣き所回覧板は知っている

つくば市 嶋本 喬

ドンじろり気をつけるとの咳払い
会議では異議なしばかり気味悪い
会議すみ懇親会でさあ本音
バレンタイン義理チョコ分の雪を掻く

東京都 井上 つよし

雷鳴に父の叱咤を思い出し
唸る程痛い効くぞマッサージ
一杯よりも一曲どうやと誘われる
晩成の望みは捨てず八十路坂

東京都 大竹 一良

入社式母が選んだスーツ着て
嫌なこと心の壁を塗り替える
すきやきで野菜ばかりが売れ残り
駅までをバスを横目に歩く春

東京都 高岡 弥生

歳だなあショーウインドーが伝えてる
雪景色綺麗なはずが溜息に
気持ちだけ若いつもりでいいかしら
メニユー見て頼むの忘れひと喋り

横浜市 長島 亜希子

遷宮人気神さま聞き分けできますか
大雪でも出かけたくなる趣味の会

その内に爆発すると脅しとく
雪降って名園になるうちの庭

佐渡市 高野 不二

三年目まだあの時を思い出す

免許証なしで暮せぬ八十五

コマーシャル本日無料ばかり見る

新聞のどこかに今日も腹が立つ

静岡市 渡辺 芳子

どうしたら上手に老いて行けますか

曾孫には悔いがない一生祈ります

寒い朝老いのやすらぎ温き床

気をぬくと押し寄せて来るなまげぐせ

熱海市 三谷 圭角

尾長来てピラカンサスを裸にす

大雪の降らぬ幸せ囁みしめる

マスコミの隅の種目がメダル取り

ポックリと逝って羨む通夜の席

岐阜市 平野 あずま

盃を交わし苦勞を語り合う

頂きに立てばもひとつ高い峯

のし袋筆は真っ直ぐ背を伸ばす

部下になり上司にもなる妻という

江南市 脇田 雅美

足腰を鍛えておいて損はない
スマートホン重い情報持ち歩く

桜見てトンネル出たら雪だった
楽しんで年金暮らし謳歌する

京都市 清水 英旺

年の功落としどころを知っている

東風吹けば春の歩幅でウォーキング

息子からの御下がりダウンがあたたかい

鬼平や梅安寝酒の友として

長岡京市 日置 みどり

雪舞う日歩きたくなるエネルギー

古き良き日本童謡残したい

買いためて雀が笑う消費税

旅終わりさあ頑張ろうダイエット

大阪市 浅井 公平

赤裸々な見出し目を引く週刊誌

傘壊れ裸電球二十年

かんできで炊いたおでんがなつかしい

女性皆羽生私のロミオ様

大阪市 内田 志津子

アンテナを巡らせすぎて落ちた穴

曖昧にしてきた付けが子や孫に

発芽する私も庭の球根も

お松明火の粉降らせて春告げる

大阪市 宇 都 満知子

目に春が花粉と共にやって来る
家計簿を再開します四月から
口臭も注意しあえる夫婦です
つれあいと同じ歩幅で歩いてる

大阪市 梅 里 南 天

早朝に白き犬曳ひんどく女むすめがいて
12羽の鳩が群がる急斜面
古財布カードばかりで重くなり
食べるより登ってみたしモンブラン

大阪市 大 治 重 信

つい迷う東は飲屋西我が家
だいですきはいつもこの道帰り道
墨染の尼僧と会いし妓王寺
落ち着かぬ上座に坐り喜寿となり

大阪市 柴 本 ばつは

スーツの色みんな同じだ新入社
老いだけが否応ナシに扉あけ
肋骨折沈没船のような妻
曲げる体操もうやめなさいなあ妻よ

大阪市 橋 本 典 子

子の助け知らぬ間に増え老いを知る
ほけの花老いの愚痴にも笑いかけ
今度いつ帰り際には母は聞く
雑踏の中で孤独の味を愛で

大阪市 松 田 聰

NHK大本営にならぬよう
九条のない憲法はなじまない
紳士ヅラ酒ぐせ悪く目をそらす
籍入れていっしょに住んでから挙式

大阪市 前 川 善 之

生きていく頑張りますと背を伸ばす
なんでやねん選挙やっても変わらない
花が咲く季節待てない失業者
書いた文字人の為だと母の教え

堺 市 梅 木 澄 空

姿見に思わず腹を引つ込める
トレーニング一寸さばればリバウンド
ばりばりの腕と聞かされ手術決め
遺言の手続き済ませ百目指す

堺 市 近 藤 治 子

失敗で気づいたヒントものにする
厳寒をヒートテックに助けられ
うぶな子だ心の動き透けて見え
コレクション興味が去ってお荷物に

堺 市 増 田 わこう

荒屋もローン終った老い二人
少子化は歪んだ社会を映してる
子や孫に残すは原発核の灰
論吉札シワになるまで持ってない

泉佐野市 稲葉 洋

ドミノ倒しラストピースが近くなる

いつの世も第一線は二等兵

臆病で岸の近くを泳ぐ雑魚

年輪に世代差埋めた痕がある

河内長野市 穂口 正子

あいまいに笑ってしまい引き返す

じんわりと老女の顔に移行中

玉手箱それから夢が描けない

気がつけば老人ばかり住んでいる

河内長野市 渡邊 修

寝不足で思案巡らす初デート

的ついた毒舌トーク笑いこけ

初舞台子役一人がのびのびと

ソチの地にねむけ堪えた二週間

泉津市 助川 和美

寒いねと寒い所で立ち話

すり切れてなお愛着のちゃんちゃんこ

釜飯の焦げが好きだとグルメぶる

こたつの上なんでも置いてずぼらす

高槻市 三谷 白黒

ユニクロでズボン試すも入らない

マドンナに会ってガツクリ同窓会

ありがとう言われて心ホッカホカ

旧友に介護されてる同窓会

豊中市 貝塚 正子

ハスキーボイスささやくような子守唄

咳払い時々聞こえ安堵する

今聞いた話またするアラセブン

ああしんどどうなってるのマイボデー

富田林市 関 よしみ

ふあふあの風春キャベツ甘くする

幸せが弾んで甘いソース味

何もかも若作り娘との旅

算盤をパチパチはじく太っ腹

寝屋川市 荒川 鈍甲

早起きの驚なのかねほけ声

水府ともふとすれ違う御堂筋

妖怪かアンネの日記破る闇

子が親を連れて平和の署名する

寝屋川市 岡本 勲

塩抜きをチトしてみたい古女房

なあ爺さん年寄らしくしてくれよ

遅咲きも立ち枯れもある同窓会

少年の僕にバツタリ出合う路地

寝屋川市 鈴木 楽鬼

表には見せぬ家庭を語るゴミ

これからは何をやっても良い独り

主婦の座を譲り私は貝になる

意見などいらぬ俺流独り旅

羽曳野市 磯本洋一

明日来れば娘が嫁ぐ涙の日

古希の旅トロッコ列車枝撫でる

松明が修二会の空を焦がす春

飲む程に友の本音が懐に

羽曳野市 安本美喜

上品な言葉使うと舌を噛み

大阪エエとこハルカスの御上りさん

物忘れ夫婦漫才しましょうか

花に誘われ歓声上がるお弁当

枚方市 河田洋子

講演会トイレに近い椅子選び

テーブルの中心父の指定席

ふかふかの一等席は猫が占め

椅子よりも畳落ち着く老いの部屋

枚方市 坂本ミヨノ

コレクション余生いきいき旅の宿

春大好き桜トンネル行き来する

黄金の菜の花畑猫も恋

欲張っても考えが出ぬボールペン

枚方市 松原保

夫源病ブチ別居が良いらしい

イエスマンばかり集めた与党群

冬五輪曲芸みたい宙に舞う

世の中は偽物詐欺で満ちあふれ

藤井寺市 田付絹枝

そこそこと言わずゆっくり論吉さん

生前に心読めずに悔いる今日

趣味切手孫にバトンし会話増え

老梅を褒めりゃ香も増す野点席

箕面市 寺井柳童

原発にかわる地熱に期待する

ふきの臺あべのハルカス春競い

春告げる和食の文化木の芽和え

母元気母の日の母笑顔良し

箕面市 村田恵子

ポンとキー押して買物できました

ただっ子は放っておくのが効果的

寒風に陽射し柔らかひな飾る

ソチ五輪若い笑顔にほほ弛む

八尾市 赤木妙子

ランドセルが踊る下校のケンケンパ

八十路映す鏡と自問自答する

つまずいた小石に年を思い知る

子の荷物になりたくない御老体

八尾市 田邊浩三

上がる筈白衣が計る血圧計

新地よりおでん屋にいる我が天使

彼女待つナビゲーションが躍ってる

いいとこで入るCM見てやらぬ

八尾市 中岡 妙

挨拶に人柄が出る初対面
肉魚ひとり暮しの寸法で
猫二匹留守番にして診察日
寝てるのに肩が凝ってる検査台

八尾市 前田 紀雄

十年日記買ってオリンピック見る
私の一張羅案山子が笑ってる
大阪の北と南に時空間
濡れ落葉ならない様にウォーキング

大阪府 西川 冷子

療法士肥満体でも探らない
指の先急所放さぬ療法士
畦の谷広めに作る老いの農
寝ころべば癒すつもりか犬も寄る

大阪府 畑中 節子

一人居も句に救われる老いの春
白髪染めしてもかくせぬ顔の皺
趣味と見て集めたものがお蔵入り
小春日に小鳥デュエットして楽し

神戸市 木村 忠義

若いっていいな皆さん花に見える
いいことがあると気前のよくなる日
高齢に厄介な役背負わせて
金メダル妻に授与した誕生日

神戸市 玄番 美恵子

愚痴一つグラスに溶かし飲むお酒
酌み交わすちよこに本音を覗かせる
言い訳の言葉を呑んだあの秘密
東北にあす吹く風が凪るよに

神戸市 輿水 弘

あといっぱい愚痴の底まで飲んでやる
こっそりと灯した想い吹いて消す
へそ曲り空気を茶化して迷わせる
あの人と逢える明日は杖しまう

神戸市 富永 恭子

一人旅景色十分見えました
ぬくぬくのおでんがしみる外は雪
大丈夫と根拠はないが言い放つ
下げる為の頭一つで足りません

神戸市 松井 文香

あすは咲く信じて今日もこの笑顔
辛口の批評はドキリ脳さえる
キラリ光る自分をたまに誉めてやる
願望は迷惑かけず逝く浄土

加東市 岩本 美緒子

菜の花の光り陽気へ深呼吸吸
ケアホーム唄で和ます歌謡ショー
物忘れにまだ呆けてない慰める
好きな道意地にかまけて果てし無い

加東市 黒崎 美紗子

顔クリーム宣伝にのり買ってみる
葉がぐれに紅色見つけ今日も無事
この道は通った記憶よみがえる
検査すみ医師にもらった太鼓判

川西市 日野岡 和之

軒下に愛嬌名残りの雪だるま
下手が佳いカラオケ自慢おてもやん
高齢化老いの坂道四苦八苦
心技体ベスト尽くして恩返し

篠山市 佐々木 勇

何となく話したくなるお人柄
便利さに馴れてただ今メタボ中
豆粕にB29の音がする
サービスの過剰に酔った空財布

篠山市 藤井 美智子

運命に翻弄されても負けてない
発言が苦手のままで今日へ来た
縁の下たまには力惜しまない
頑張れば出来る教えてくれたソチ

三田市 今西 廣子

ナチュラルに暮らしていますカラスより
ファスナーが噛み合わない隙間風
風味良し塩加減よし夫婦仲
転んでも転ばなくても傷だらけ

三田市 木村 マユミ
いつの間にわたしあなたのくすり箱
ひろい読みあつめてみれば知識人

白内障季節はいつも春がすみ
家の中コードがからみ世は不倫

三田市 雑賀 一泉

絶食の私につらい配膳車
病床より眺める山は元氣そう
夫婦力すきな言葉の一ページ
肝硬変われを哀れむ冬景色

三田市 多田 雅尚

書くことが苦手で名刺持ち歩く
真央でなく良く転ぶのは元総理
十代に負けじレジェンド空を切る
盆梅は主人好みに曲げられる

三田市 野口 晶子

ライバルがいるから強くなる私
この街もそんなに捨てたものじゃない
考えよう答えはあると苦勞人
即戦力スキマ時間で身につける

宝塚市 井上 風花

今でしょと買ってはみたが外れ券
女房に冷たくされてほれ直す
神の手ともてはやされて不眠症
手鏡に恋しい人を盗み見る

宝塚市 丸山 孔一

元気がと聞かれ返事は生きてます

閻魔様お迎え前にお電話を

惜しかった言うな勝負じゃ負けは負け

早送りだけのリモコン神の手に

西宮市 株元 玲子

新緑の森をさ迷い背伸びする

ほめてほめてちよつと辛口添えておく

訓練で縮まる命少し伸び

あの日から三年続く志

西宮市 藤本 直

青空を少し汚して税上がる

鯉幟少子化を知る二つ三つ

三度目はやがて悲しい一発芸

繰り返す昔話を愛で聞く

三木市 山口 久子

あきらめと悩み痛さを医者に問う

福寿草家族のごとくかたまれり

米寿まで皆の助けで仕合せに

紙とペン探しているま句を忘れ

奈良市 高橋 仁志

本物の具材を使うおもてなし

温度計零度までにはまだゆとり

追加して刷った賀状が無駄となり

恵方巻き寿司屋の門に福来たる

奈良市 前田 弘恵

三猿で途中同居も恙なく

日記帳読み返しては一人笑む

孫伸びて見上げて会話しようとは

戦前の教え頭に沁みている

奈良県 安福 和夫

備忘録どこに置いたか大騒ぎ

狂い咲く花にそのわけ聞きたいね

老け込みを恐れ楽椅子避けている

置き葉ケースに埃有難い

奈良市 尾畑 なを江

春の庭花の競いのいじらしさ

旨すぎる話は尾ビレ切って聞く

夕焼にただ立ちつくす今の幸

笑顔には凄いが詰まってる

奈良県 谷川 憲

地下道へ働き蟻が吸い込まれ

低かった腰が反り出し客離れ

ケキヨケキヨケキヨ驚に来た新学期

運不運均せばゼロになるようだ

和歌山市 磯部 義雄

悲しいが区切りつけねば進めまい

心配は山ほどあるが崩れない

願掛ける父の背を打つ滝の水

はにかんで乾杯をする紙コップ

(平田元三さん・村中悦男さん・大峠可動さんの句は44頁にあります)

西尾 葉句抄

(定本『西尾葉句集』平成八年発刊)

北の護り

オーロラに煉瓦の街は哀しかり

馬上より指さす夏野ソ連領

姑娘の耳輪にふれる語らいや

空襲へ刺繍の靴は抱かれたり

鞭声肅々掖河を渡る鉄兜

野糞放るや大満洲の春の風

最後の味方

若う言うてくれた人を妻おぼえてい

ワイシャツを着かえることで妻ともめ

そうでっしやないかと女房逆らう気

病妻と別れる握手他人めき

手術二日女は化粧するといふ

手を貸せば纏足めいた試歩の妻

最後の最後の味方は妻なりき

弱味を見せるなど妻の眼が合図

流し目も上目も出来ず妻は老け

植木市妻は咲いてる方を買ひ

倅せですともといじらしいことを言う

夜中まで待つて女房は叱られる

低血圧の妻の朝寝を咎めまじ

着せかけて帰りの時間きくは妻

酢昆布の匂いで妻にささやかれ

あっけない新幹線に妻不服

誹風柳多留一一二篇研究 11

79 待人おそし品川であそぶ也

石川 旅に出た友人を迎えに東海道品川宿まで来たが、なかなか到着しない。ポーッと待っているのも芸がないので遊郭に揚がって待とう、ということになった。

あす来ルもせわだどとまる旅むかひ

天五満²

小栗 賛。おみくじでおなじみの「待人遅し」を使ったのがヤマ。

清 賛。

80 三度ツゝまきを引出すふたしなみ

石川 以前、関西の礎講でもやった句で、一日に三回ご飯を炊くのは心掛けがなっていない。竈に入れ過ぎた薪を姑が引き出すようでは困る、等の意見が出た。飯に限らず、朝昼晩の食事の用意をするたびに、姑の目から見ると竈に入れる薪が多すぎ、毎日三度三度引き抜くことになるのは薪の無駄使い、心掛けが悪い、としておく。

清 何本シておまんまたくとお家さま 一九二二

78 孔明がうつむいているむつかしさ

石川 諸葛孔明、中国三国時代の屬漢の宰相。名は亮。屬漢の劉備の三顧の礼に応じ、戦略家として活躍し、天下に三分の計を説き、孫権と連合して曹操を破る。のち司馬懿(仲達)と対戦中に病死したが、生きているかのごとく見せかけ司馬懿を退却させた『新編川柳大辞典』。

「略解」では魏の司馬懿(仲達)に追われたとき、門を開け放ち、高檣で琴を静かに弾

じたので、仲達は計略があるのかと疑い退いたときのこと、うつむいて、で弾琴を示すとしており、川柳的には場面を断定していいのだらう。が、計略家であれば、このような場面はここだけでもないように思われ、孔明が

戦略に苦慮している状況ともとれないか。

孔明か首をかたけたむつかしさ 明六仁³
琴をひきやめて孔明したを出し 安七鶴³

小栗 賛。「空域の計」の句でいいと思う。「むつかしさ」は、一口に定義できない難しい言葉であるが、「一筋縄ではいかない、複雑でややこしい、解決しにくい場面、状況」というような感じだと思ふ。

細井 孔明が窮地に追い詰められた時、琴をひけば……という結論を得るまでの思考中の様子。

伊吹 賛。普通の人間がうつむけば間違いなく苦慮しているのだから、孔明の場合は苦慮を演じているのかも知れない、という一般句ともとれるが……。

清 小栗説賛。

81 女房の番をしている大あばた

石川 大アバタの亭主の悲しき、他の男が女房にちよっかいを出しはせぬかたまた女房が他の男に気を引かれはすまいかと見張つてゐる。

女房にこび付て居る大あばた 一九五三
清 せつかく女房にした女である。アバタの亭主のコンプレックス。

82 女べや夜半に八君がひとりゆき

小栗 『伊勢物語』(二十三)に見える和歌「風吹けば沖つ白浪たつた山夜半にや君がひとりこゆらむ」(『古今和歌集』巻第十八よみ人しらす)のパロディ。夜中に女部屋へ君が一人行くというだけで具体的な状況は分からぬが、パロディだからそれ以上詮索の要はあるまい。

夜半に君一人り行らん五人ぐみ 四二二
清 文句取だけの句。夜這い。

83 大あせをかいて割てるさるすべり

小栗 猿滑はミノハギ科の落葉高木。『和漢三才図会』に「稠堅い。酒屋では搾木に用い

ている」とあるように材質が堅いので、割るには大汗をかくことになる。

例句は「猿」と「赤い顔」の縁語仕立てだが、主題句は何のからくりもないそのままの句であろうか。

まきわりの顔赤くなる猿すべり 八二七
伊吹 賛。そのままの句だと思えます。
清 賛。見るからに堅そうな木だ。

84 しあんするやうにおも荷をしょつて行

小栗 重い荷物を背負った時は、前屈みになつて何か思案するような姿勢になることをいうのだろう。精神的な重荷を背負つてあれこれ思案する、ということとを二重写しにした作句が手柄ということか。

恋の重荷をしょつて出る芥川 八〇三
清 賛。同じ句、明二宮4にもあり。

85 あげつめのうち川とめに嶋田あひ

小栗 仙台高尾の句。
綱宗侯が高尾を揚げ詰めにしている間は、情人嶋田重三郎は高尾に逢うことが出来ない。これを「川留めに遭う」と表現したものだ、もとより東海道島田宿の大井川川留め

をもじつた技巧。

金づくになると嶋田八川支え

三三四

清 賛。嶋田と大井川の振り。

86 おくぜつで一夜べつじときうはいひ

小栗 口説は、愛し合う男女が焼餅を焼いて言い争ふこと。痴話喧嘩(二江)。

別事は、別れる時。別離の時「日」。

遊里の客が遊女と痴話喧嘩をしたために、一晚同衾しなかつたときうが言つているという意であろう。ただ、それだけでは芸がないので、坊主客を示唆したところが手柄の句ではないかと思う。その理由は、

①ただの「口説」ではなく「お口説」という言い方が、「お布施」「お説教」など坊主用語をまねたものと思える。

②「別事念仏」(念仏行者が特別の時に念仏すること。略して「別事」とのみ言う)という仏語がある。

③「大くぜつ品川一ち夜べつじなり」(安五松4)という似たような句があるが、これは「品川」の語があるので、明らかに坊主客の句である。

伊吹 坊主客の礎説に賛。
清 礎賛。仏語を使って僧侶の行状。

新川柳鑑賞 (27)

麻生 路郎

パパも留守ママも出かけて僕とチビ

(幸男)

僕と云っているのは学生であろう。

チビというのはその弟のいたずらっこに違いない。パパは今日もどっかへ出かけて留守。

それ幸いとママもデパートあたりへ出かけたらしい。そして何時も留守番をさせられるのが「僕とチビ」と云うのである。

ある種の家庭が浮びあがつてほほえましくなるではないか。

辛抱して呉れる養子はちと足らず

(ハツ茶)

養子はかりは、切れすぎても風波が起るし、全くの薄ボンヤリではつとまらない。

「オイ意気地がないぞ、オレならとうの昔に飛んで出てるところじゃが……」と友達におだてられても、

「ソヤ、オレはなんでこんなに意気地がないのんやろ」

と、それこそ人ごとのように云うのである。

養家の方では「養子がモ少し、しつかりして呉れたらと思いますが、しつかりしていたら、うちなどにとても辛抱して呉れまへんやろ」といささか諦めてもいるのである。

アルコール切れると養子らしくなり

(水堂)

「君、そんなに飲んでもいいのかい。奥さんが又やかましいぜ」と云つても、

「何アに、たかが女だ。女は賢いようでも、男の阿呆と似たかよったかだ。」と気焰万丈の養子さん。

「もう二三本熱くして持つて来い。この酒はまるで水や」と銚子を振り廻す。

しかし、一旦酔が醒めたとなると、妻君の顔が大写しとなつてあらわれ、首をちぢめて我が家の敷居を跨げるのを諷したのである。

「養子らしくなり」が養子型のすべてを想像させて面白い。

吾輩も繼いだを養子気がつかず

(清生)

あたまから家憲にこれ従つて来た養子、しきたりの外へは一步も踏み出したことのない養子であるとすればムリのない話。一寸人の気付かぬところをつかんでアツと云わしたという句である。

孫ひとりこんなにおしめもつて来た

(古方)

他家へ嫁した娘が孫を連れて実家を訪れたのである。たったひとりの孫に沢山なおしめ持参でやつて来たのに祖父がオヤオヤと驚いて斯くは詠んだものである。

この祖父から、おしめは遠い昔のものであった。自分等夫婦が娘を育てていたころにも、これだけのおしめは必要だったのであるが、そんなことは既に忘却の世界に追いやつていたので、今更のように驚いたのである。平凡な日常生活から斯うした一コマをつまみあげたのは作者の力であろう。

初孫のミルクの匂いまで愛し

(迷窓)

初孫は眼に入れても痛くないと云われている。親が子どもを愛するのも全く理屈ぬきだが、孫は子どもよりも、もつとく可愛らしいものらしい。虫が好くと云うのだが、乳くさい匂いまでを愛することをキャッチしたのである。

初孫がチンポコ摘んで寫つとり

(麦太楼)

孫は目に入れても痛くないと云われる。日に日にのびてゆく姿をカメラにおさめる。その中には、この句のように裸でチンポコをつまんでるものもある。それは自然の姿であると同時に愛撫の象徴でもある。チンポコを詠んでもすこしも不潔な感じがしないのはそのためである。

英語 de Senryu ②9

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim HORNE
(岐阜保健短期大学)

李白という友あり 遠きむかしにも

*I have a friend,
Li Po
since the far past*

老人におもちやなしバラの前に立つ

*no toys
for the aged---
they face to roses*

～リバーウィローのため息～ (短詩形文学の国際化 5: 撫尾清明の英訳川柳)

番傘川柳社の撫尾(うつお)清明(九州龍谷短期大学名誉教授 1929-2011)は、『川柳英訳集』(1978)、奥田白虎編『川柳歳時記』(1995)、『英訳江戸川柳—誹風柳多留』(葉文館 1998)、『英訳ジュニア川柳』(2001)(監修はいづれもアラン・クロケット Alan Crocket)や短歌、宗教書などを翻訳しました。ドナルド・キーン Donald Keene、エドワード・サイデンステッカー Edward Seidensticker と交流し、海外に日本文学や文化を発信し続け、「インターナショナル・センリュウイストと呼ばれるにふさわしい人」(佐賀新聞 2011.3.11)でした。『英訳江戸川柳—誹風柳多留』のキーンによる序文は、(逃げしなに 覚えて居ろは 負けたやつ *Before running off/ "Remember that!" / Shouts the loser.*)を取り上げ、「この情景には親しみがある。敗者は自己弁護するために、逃げながら、けんかに勝ち誇ったように叫ぶものだ。このような句を読むとき、世界中の人々の弱点が同じところにあるということがわかる」と、川柳の普遍性を述べています。洒脱で粋な江戸川柳が、撫尾・アラン・クロケット両者の英訳で現代川柳のように瑞々しく感じられるのは、江戸川柳それ自体の力と、翻訳のうまさか醸し出す相乗効果でしょう。では『英訳江戸川柳—誹風柳多留』から英訳を紹介しましょう。

天井へつかへて曲がる影法師

To the ceiling. / Stumbling and bending. / Shadows.

隠れんぼ通りすがりに尻を割り

Hide-and seek. / By a passer-by. / Betrayed.

愛染帖

新家 完司 選

(投句 273名)

楽しんできたという顔せぬ夫
西宮市 緒方美津子

(評)留守番の妻に「楽しかった」という顔は見せられない。それが思い遣りであり男の矜持。後ろめたさも少々あるのはあるが……

デュエットもせがみ過ぎるとストーカー
河内長野市 坂上 淳司

(評)酒と歌で高揚すると大胆になるが、しつこいのは禁物。「酒癖が悪い」「いやらしい」という不名誉なレッテルを貼られる。

自分には甘いと孫が指摘する
米子市 見山 温子

(評)注意や叱責は「孫のため」と思っているのに、遂に逆襲してきたのだ。しかし、言われてみれば、自分に甘いのは事実。

たつた今持ったつもの物が無い
岡山県 田中 恵

(評)さつき手にしたはずのものが、まるで魔術にかかったように失せている。さてさて、またまた日課の「捜し物の時間」である。

高槻市 片山かずお
生温い空気が僕の性に合う

(評)「温厚篤実」な人は「丁々発止」が苦手。若い頃は「波乱万丈」「疾風怒濤」にも耐えられたが、今は「春風駘蕩」がありがたい。

神戸市 能勢 利子
トイレまで電気消さずに床につく

(評)奥さんを亡くした友人が「寂しくて、ラジオ深夜便をつけっ放しにして寝ている」と言っていた。トイレの電気も同じだろう。

大阪市 太田としお
バカヤロウ声を出さずに言いました

(評)声に出したら喧嘩になるが、心の中で叫んでいる限りは大丈夫。だが、正直な人は顔に「バカヤロウ！」が現れるので要注意。

堺市 矢倉 五月
負けてからも一度開く入門書

(評)何事も基本が大切。入門書をおさらいすれば敗因やヒントが見つかるだろう。悔しがついているだけでは進歩せず負けてばかり。

大阪府 初山 隆盛
友の訃に古いなだれの音がする

(評)突然の訃報に方向感覚を失ってしまったような感覚。ゆるぎないものと思っていた穏やかな暮らしの一角が崩れ去る衝撃だ。

米子市 後藤美恵子
夫の薬七回忌終え始末する

(評)見るたびに夫の面影が浮かぶ常備薬。

ずっと処分出来なかったが、ようやく決心がついた。歳月の治癒力はゆっくりだが確実。

大阪市 谷口 義
自転車はよく転けるのでやめました

西子市 黒田 茂代
自転車はあるが当分乗ってない

豊中市 松尾美智代
自転車に見切りをつけた古希の春

鳥取県 平木 公子
鉛筆の先で漢字が逃げて行く

紀の川市 辻内 次根
自分の名漢字で書いて良しとする

河内長野市 梶原 弘光
思いっきり当て字使っている演歌

香芝市 大内 朝子
熱唱へ木端微塵のストレスよ

寝屋川市 平松かずみ
軍歌ならすつと出てくる老人会

塩竈市 木田比呂朗
右傾化と言われ軍歌も縮こまる

浜城市 岡田 史郎
雨の日に機嫌よくなる花粉症

箕面市 広島 巴子
深呼吸できる日時と場所求む

岩出市 村中 悦男
父母にもらったメダル胸の奥

河内長野市 谷 久美子
今はいもう疲れるだけのスクワット

池田市 上山 堅坊
ふところの波打つものを吐く一句

松江市 三島 湍丘
添削のたびに鮮度が落ちてゆく

八尾市 宮崎シマ子
薬よりきつと効くだろ老いの恋

島取市 永原 昌鼓
色恋を語れば老いも活気づく

西宮市 藤本 直
古い雛官女が一人いなくなり

西宮市 牧淵富喜子
大方は無くて困らぬものばかり

河内長野市 松岡 篤
すり切れたものと心を通わせる

和歌山市 福井 菜摘
信号を待つ丸い背が亡母に見え

和歌山市 福井 菜摘
お土産を亡母の分まで買いそうに

三田市 福田 好文
美辞麗句たまには聞いてみたい耳

三田市 福田 好文
いねむりか考え中か父も老い

京都府 高島 啓子
鶯が花見近いと告げに来る

京都府 高島 啓子
妻の留守何と自由な不自由な

堺市 村上 玄也
限界を怪我するまでは悟れない

堺市 村上 玄也
体力はゆたんばひとつ持てるだけ

堺市 村上 玄也
言い訳をするのもされるのも辛い

堺市 村上 玄也
流暢な英語は僕に通じない

三田市 堀 正和
新酒着く彼も元気で呑んでるな

三田市 尾崎 一子
ストレスをためて遺影の夫と呑む

河内長野市 村上 直樹
あの世でも飲もう遺影にご献杯

島取市 前田 楓花
寄り合つて酒を片手に村おこし

田辺市 岡本 昇
末席の酒は大吟醸の味

八尾市 田邊 浩三
君が代を歌わぬ人に子を託す

島取市 斉尾くにこ
孫にメール受験頑張れ返不要

島取市 斉尾くにこ
坂道を選ぶ散歩も人生も

大阪府 枋尾 奏子
傷ついてしまうことには無視をする

大阪府 枋尾 奏子
春である証異性が美しい

大阪府 米澤 俣子
一大事あればトトロになる夫

大阪府 米澤 俣子
誤作動が続く本日休肝日

大阪府 米澤 俣子
七輪を引っぱり出してくる宴

大阪府 米澤 俣子
手遅れと知つても顔に金かける

大阪府 米澤 俣子
「もうあかん」これは長生きする呪文

大阪府 米澤 俣子
「もうあかん」これは長生きする呪文

大阪府 米澤 俣子
たこ焼きにご機嫌とりをしってもらう

大阪府 米澤 俣子
命短し掟破りをしてみるか

和歌山市 古久保和子
二円切手買って臨戦態勢に

三原市 鴨田 昭紀
菓子箱が先にお辞儀をするお詫び

岡山市 工藤千代子
この人を置いて逝けぬとふと思ふ

枚方市 丹後屋 肇
もうあかんまだまだいけるせめぎ合い

松山市 神野きつこ
隣国は仲の悪いが相場です

唐津市 吉富 節子
孫娘に義母と同居のコツク伝授

松江市 石橋 芳山
豆まいて笑い残して孫帰る

松江市 石橋 芳山
反戦を歌う充血した声で

三田市 上田ひとみ
存在はたこ焼き冷めていくように

三田市 上田ひとみ
ごちそうもお茶漬けも好きやや太め

三田市 上田ひとみ
夫にはとても優しい妻のはず

枚方市 寺川 弘一
禁酒禁煙ポリシーなどでないけれど

海南市 小谷 小雪
病院で死ねば迷惑かららない

海南市 小谷 小雪
鈍行に腰据え得をした気分

海南市 小谷 小雪
夕暮れにカーブの先を予想する

海南市 小谷 小雪
われも無口妻も無口の休肝日

海南市 小谷 小雪
戒名は決めていますが大内緒

ハルカスが来い来い言うて呼びはるわ
西脇市 七反田順子

大阪市 古今堂蕉子

ハルカスの上に登つてアホになる

八尾市 高杉 千歩

ハルカス展望戦前戦後走馬灯

八尾市 前田 紀雄

ハルカスの影通天閣に伸びる

倉吉市 牧野 芳光

中国に埃や唾を受けている

奈良市 大久保真澄

最悪の偽装いい人ぶる私

寝屋川市 鈴木 楽鬼

汚れた世どう咲きゃいいかこの俺は

岡山市 藤成 操江

食べ放題たぶん元など取れてない

弘前市 福士 慕情

時くれば消える雪にも掛かる金

寝屋川市 籠島 恵子

すこしずつ濁り楽しくなってくる

米子市 竹村紀の治

春が来た足と腰との蝶番

大阪府 高木 道子

掃除機が大笑いする綿埃

藤井寺市 肥山 一文

自分史はグチぐち愚痴で満載に

足崎市 長浜 美籠

エンディングノート何を書こうか書くまいか

月五万くれる義賊を募集中
大阪市 江島谷勝弘

大阪市 柴本ばつは

玉葱で涙でるとはまだ若い

堺市 大隅 克博

長生きの家系に生きている不安

島取市 津村 律子

寝付かれず処理する物の順決める

豊中市 水野 黒鬼

物の無い時代に育ち捨てられぬ

橿原市 居谷真理子

加齢とやポディーブローが利いてきた

唐津市 仁部 四郎

定年や今日から酒が強くなる

倉吉市 岡崎美知江

安物のピアスそれなり光つてる

広島市 岸本 清

家庭内野党の僕は世帯主

海南市 堂上 泰女

父さんを緩衝材に娘と和睦

茨木市 藤井 正雄

票のない抱いてる幼児にも握手

大阪市 大川 桃花

怪獣が雑魚寝しているおもちや箱

大阪市 坂 裕之

聞くことは恥ずかしくない新米だ

西宮市 福島 弘子

スッピンで出歩かないで娘に言われ

体調のいいとき花も美しい
大阪市 神夏磯典子

富田林市 片岡智恵子

ひとり鍋湯気の向こうにいる亡夫

堺市 澤井 敏治

凸凹でも温みの残る土の道

和歌山市 松尾 和香

バレンタインわたしにもきたチョコレート

唐津市 岩崎 實

わらべ歌一番だけはおぼえてる

河内長野市 大島 友子

ゆるキヤラが競う各地のおもてなし

島取市 山下 凱柳

くつろぎたいそれなのに妻愚痴りだす

瀬戸内市 東横ますみ

重いなー義理で包んだ駄斗袋

大阪市 吉内タカ子

日当たりの一人膳でも春心地

神戸市 奥澤洋次郎

高級品買える人だけ好景気

島取県 西谷 悦子

作句休んでもうすぐ春の畑仕事

奈良市 岩本 浩二

冷や飯を食わされ胃腸鍛えられ

江南市 脇田 雅美

兄夫婦に煮物届けて具合聴く

堺市 遠山 唯教

切り詰める妻が支えている暮らし

紀の川市 宇野 幹子

ひとりには慣れレトルトにチンをする

米子市 生田 和之

レトルトで固めた昼を独り喰う

岡山市 丹下 凱夫

ぞくぞくと背中中で風邪を引いている

鳥取市 岸本 孝子

日光浴せよと呼んでる庭の草

堺市 加島 由一

気乗りせぬ振りについてくカラオケ屋

シドニー 坂上のり子

落ちた白髪が朝日に光るバスルーム

貝塚市 吉道あかね

家具移動広くならない六畳間

青森県 松山 芳生

ペコちゃんの舌に水飴塗ってある

富田林市 中井 アキ

ひとときを女に戻る赤ワイン

和歌山市 玉置 当代

立春を迎え靴紐締め直す

大阪市 藤田 武人

桜餅ガブリと春を胃袋へ

三田市 石原 歳子

畦道の春一番はイスフグリ

鳥取市 谷口回春子

心から唄ってみたい春が来た

鳥取市 吉田 弘子

ウォーキング口ずさんでる春うらら

東大阪市 北村 賢子

どうした地球春の寒波に深海魚

高槻市 島田千鶴子

春なのに今もどこかで銃の音

寝屋川市 森 茜

曾祖母の沖へ沖へと流しびな

鳥取県 竹信 照彦

土の筆土の竜など名がおしゃれ

生駒市 飛水ふりこ

とりたての葱とハミングするうらら

明石市 糞谷 和郎

痴話喧嘩あれもこれもと掘り起こし

和歌山市 土屋起世子

ぬかるみに来ると負けない大根足

松江市 中筋 弘充

夫婦喧嘩次は勝ちたいとは思いう

東大阪市 中岡 妙

繰り言を猫に聞かせて日が暮れる

堺市 内藤 憲彦

我が妻は寝ても覚めても猫のこと

奈良市 加門 萌子

毎日の夫の守りも楽じゃない

河内長野市 黒岩 靖博

美人ママくれた手紙は請求書

四條畷市 吉岡 修

リストラの机のあとに新入社

倉吉市 山中 康子

知りたくてラジオテレビが放せない

弘前市 高森 一吞

ビートルズ一気に過去へ巻き戻す

鳥取県 山下 節子

ウマウマの次に教えたありがとう

加西市 中川 修

勧誘の電話相手にボケ防止

和歌山市 北原 昭枝

辻褃の合わせぬ話をじつと聞く

米子市 加藤 正二

遺言を書いて長生き出来そうだ

神戸市 松井 文香

自意識の過剰に気付く恥ずかしさ

枚方市 松原 保

同窓会ボケない小唄大合唱

羽曳野市 藤原 大子

バッグにはいつも鮎入れ友づくり

吹田市 野下 之男

火の神は休んで欲しい乾燥期

三田市 足立つな子

常備薬ハチミツで溶く梅エキス

尼崎市 市坪 武臣

金婚に喜寿も五輪も六年後

堺市 近藤 治子

心ってどこにあるのか胸痛む

三田市 多田 雅尚

機内だけ唯一歩ける雲の上

松江市 錦織 禮子

怖々と歩く夜道のまだ乙女

共選欄

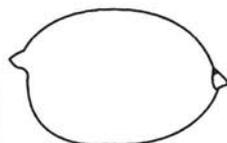
檸檬

檸檬

抄

(薰風書、カットとも)

(投句 三八二名)



κ. κ

「心」 竹治 ちかし 選

以心伝心お好み焼きとすぐ決まり
祖母と孫心通わす半分っこ
啓蟄だ心弾ます独居爺
心まで攫っていった子の巢立ち
花育て花に心を育てられ
内心は認めたく無い老いの坂
心にもない世辞を言い驢尾につく
手の平を返し真心まで落とす
本当のこころ隠しているジョーク
偉ぶっているが心は隙だらけ
ふるさとおおぼり出してきた初心
古希なりの反骨心を持ち歩く
携帯の中で心が瘦せてゆく
春という言葉に心躍らせる
無心に咲く花は見る人選ばない

堺市 矢倉 五月
京都府 榎本 宏子
安来市 原 煩惱児
大阪市 伏見 雅明
西宮市 亀岡 哲子
出雲市 多久和敬子
南あわじ市 萩原 狸月
岡山市 永見 心咲
和歌山市 土屋起世子
西宮市 片山 忠
堺市 奥 時雄
河内長野市 辻村 ヒロ
大阪府 神野千恵子
高槻市 片山かずお
大阪市 笠嶋 惠美

「心」 大内朝子 選

列島が桜に心奪われる
道端のはこべと交わす詩の心
純白の心を持って皆生まれ
親ごころ狙う詐欺師が憎らしい
心とは心臓ですか脳ですか
図体ばかりでかくて心まだ子ども
お心は確と頂戴いたします
良心が試されている無人市
制服を着ると変身するこころ
下心たつぷり入れて送る酒
心ばかりを探して歩く百貨店
内視鏡心の奥は映せない
どん底でわかる心の裏表
エンピツに心許して書く日記
心音の響きが母の顔にさせ

米子市 後藤美恵子
羽曳野市 徳山みつこ
枚方市 寺川 弘一
鳥取市 鈴木 一弘
堺市 増田わこう
藤井寺市 鈴木いさお
高知市 小川てるみ
鳥取市 岸本 宏章
大阪府 初山 隆盛
弘前市 稲見 則彦
尼崎市 春城 年代
奈良県 安福 和夫
紀の川市 楠原 富香
三田市 上垣キヨミ
高槻市 富田 美義

下心たつぶり入れて送る酒
 隠してもすぐあらわれる魚心
 歳なんてけろり忘れた恋心
 春ですよ春の心になりました
 心から信じ一緒にになりました
 時どきは鬼の心を戒める
 真心に触れて心底惚れなおす
 友からの心が届くいかなご煮
 灯を消すとそこは心のゆうえんち
 鈍行で遊び心を買に行く
 美辞麗句並べ心に遠くなる
 善人の心に傷の多いこと
 一本のペンに心を扶られる
 心から笑うと空も笑い出す
 神様もきつと持つてる下心
 かさぶたの下でうずいている心
 おもてなし大和心をさあどうぞ
 まんまるい心で明日の米を研ぐ
 モナリザはまだ本心を明かさない
 良心も邪心も持った小宇宙
 覗かせはしない心の底の底
 折れている心に愛という添え木
 会心の笑みは寢床についてから

弘前市 稲見 則彦
 大阪市 近藤 正
 池田市 上山 堅坊
 橿原市 居谷真理子
 芦屋市 黒田 能子
 和歌山市 堀 富美子
 大阪市 坂 裕之
 宝塚市 田中 章子
 鳥取県 斉尾くにご
 枚方市 伊達 郁夫
 枚方市 小沢 淳
 札幌市 平尾 定昭
 枚方市 三島 崧丘
 松江市 田中紀美恵
 倉吉市 中筋 弘充
 松江市 高島 啓子
 京都市 村上 直樹
 河内長野市 久保田千代
 三田市 三浦 強一
 札幌市 神野きつこ
 松山市 安土 理恵
 橿原市 石橋 芳山
 松江市 升成 好
 大阪市

先に行く心を脚が追いかねる
 心から心配をして嫌われる
 モナリザはまだ本心を明かさない
 夕日見て心の整理出来ました
 欠点も長所に見える恋心
 泣ききって折れた心に灯を点す
 取り出して心見せたいひとがいる
 ビビッと合ったころの周波数
 真実がこころの隙を埋めました
 真つ直ぐでいたい心の眼を洗う
 古希なりの反骨心を持ち歩く
 涸れるまで泣いて心を強くする
 花育て花に心を育てられ
 和の誇り心こもったおもてなし
 手鏡の中に心が映ってる
 青空に放り投げたい病む心
 理性ではどうにもならぬのが心
 心から尽くす介護に灯が温い
 ごめんねとひとこと言えば軽くなる
 携帯の中で心が瘦せてゆく
 ぶつかってみよう心が開くまで
 花めぐりこころのしこり解きほぐす
 老い猿の悟りの心群れを出る

宝塚市 丸山 孔一
 八尾市 高杉 千歩
 札幌市 三浦 強一
 鳥取県 西谷 悦子
 宝塚市 田中 章子
 堺市 内藤 憲彦
 長岡京市 山田 葉子
 弘前市 高瀬 霜石
 大阪市 立蔵 信子
 和歌山市 上田 紀子
 河内長野市 辻村 ヒロ
 倉吉市 牧野 芳光
 西宮市 亀岡 哲子
 箕面市 寺井 柳童
 和歌山市 柏原 夕胡
 西宮市 片山 忠
 箕面市 山口セツ子
 大阪府 桑田ゆきの
 川西市 大坪 一徳
 大阪府 神野千恵子
 札幌市 小沢 淳
 奈良県 渡辺 富子
 熊本市 永田 俊子

邪心には神様とうに気づいてる

八尾市 宮崎シマ子

まごころを使い果たしてから逝こう

鳥取市 夏目 一粋

土壇場で透ける心のうら表

和歌山市 福井 菜摘

洗っても落ちぬ心の闇一つ

高槻市 富田 保子

ぬるま湯に浸かり闘争心が萎え

堺市 村上 玄也

意地悪な虫が心にへばり付く

松山市 宮尾みのり

黒ずんだココロ脱色できますか

海南市 小谷 小雪

一心を貫き通すちびた靴

出雲市 伊藤 玲子

一匹の虫が心の隅で生き

大洲市 中居 善信

その淵で揺らぐ真心下心

羽曳野市 吉村久仁雄

前向きな心へ明日は無敵大

枚方市 海老池 洋

明日の日本心見えぬが桜咲く

松江市 松本 文子

ビビッと合ったころの周波数

弘前市 高瀬 霜石

呑めと言いつめろとも言おうひとり

米子市 竹村紀の治

心とは違うワタシの身のこなし

横浜市 小野旬多留

胸に棲む鬼がときどき悪さする

川西市 西内 朋月

まごころが精一杯の嘘を言う

島根県 伊藤 寿美

物溢れ心が風邪をひいている

鳥取市 岸本 孝子

何もせぬ心配りもいそがしい

倉吉市 山中 康子

秀 句

好奇心はまだまだ椿落ちるまで

吹田市 木下 敏子

年金で心配りをする余生

塩竈市 木田比呂朗

取り出して心見せたいひとがいる

長岡京市 山田 葉子

心まで洗って寺の門を出る
手の平を返し真心まで落とす

茨木市 藤井 正雄

覗かせはしない心の底の底

岡山市 永見 心咲

心外な言葉ひとつが胸を刺す

橿原市 安土 理恵

慢心を捨てると坂は越えられる

大阪市 岩崎 公誠

心情を吐露してとけたわだかまり

紀の川市 宇野 幹子

近すぎて感謝の心忘れてる

大阪市 板東 倫子

走り出すころ誰にも止められぬ

和歌山市 北原 昭枝

感謝の念忘れはしないおじぎ草

枚方市 海老池 洋

B面に私の心閉じ込める

大洲市 花岡 順子

優しさにすぐ溶けそうになるハート

四條畷市 吉岡 修

三陸の海で心が揺れ動く

弘前市 福士 慕情

川下で人の心が見えてくる

松江市 三島 淑丘

かあさんの心を食べる塩むすび

貝塚市 石田ひろ子

かさぶたの下でうずいている心

京都市 高島 啓子

善人の心に傷の多いこと

枚方市 平尾 定昭

翔びなさい心はずっと生長期

日置市 前田 洋子

心から言えた母さんありがとう

岩出市 藤原ほか

携帯を妻の柩に入れとこう

唐津市 山口 高明

秀 句

心から信じ一緒にになりました

芦屋市 黒田 能子

止めどなく心が揺れる死の分かれ

京都市 都倉 求芽

心から笑うと空も笑い出す

倉吉市 田中紀美恵

「一途」

塩満 敏選

(投句 203名)



あなたへの一途な青い恋でした
馬の脚一途に主役盛り立てる
実線になるまで点線をなぞる
肩ひじをはずす主婦歴五十年
赤い糸一度結んだままである
逝った夫一途に思い三年目
一途さが素直に出てる眉あたり
一行詩一途精進夢未来
完熟のトマト一途に陽を掴む
堂々と大阪弁を押し通す
寝ても覚めても一途に思う子の未来
こだわりの味一筋に老舗の灯
三年も釣れぬ大間のマグロ追う
主婦業をひたすらやってきた誇り
守らばや一途に願う第九条
鬼瓦一途に家を守ってる
仕事一途生きた人生悔いはない
娘の晴れ着母は一途に針運ぶ
不戦一途に命は誰も一つだけ
あほやなあんな男に一途とは

三田市 上垣キヨミ
弘前市 福士 慕情
青森県 松山 芳生
西宮市 福島 弘子
貝塚市 吉道あかね
大阪市 神夏磯典子
尼崎市 長浜 美籠
大阪市 笠嶋 惠美
弘前市 吉川ひとし
大阪市 坂 裕之
西宮市 足立 茂
奈良市 米田 恭昌
札幌市 小沢 淳
豊中市 松尾美智代
唐津市 岩崎 實
鳥取県 西谷 悦子
鳥取県 山下 凱柳
藤井寺市 若松 雅枝
羽曳野市 徳山みつこ
西宮市 片山 忠

子や孫へ一途平和を贈りたい
母の川一途に遡上する命
一途ではないが川柳だけ残る
キリンしか飲まぬ男と五十年
払ってもまた張る蜘蛛のど根性
雪かぶり一途に春を待つ野山
鉛筆が一途に選ぶ五七五
怖いもの一途な人の深情け
運が来る日まで重ねる鈍と根
一途です五七五にはまつてる
弔辞では一途な人とあがめられ
大正の一途に勝てる筈がない

佳

戦中派平和一途に願ってる
小町にも一途の愛はあった筈
一途さできつといつかは振り向かず
九条を守る一途な手をつなぐ
成歩三枚一途に王を追いかける

人

ハルカスを越えるつもり竹とんぼ
河内長野市 山岡富美子
堺市 矢倉 五月
反戦旗抱いてひっそり生きた亡母
天
反戦へ彬の心一途なり
軸
戦中派孫子の平和守りたい
堺市 大和 峯二
出雲市 竹治ちかし
三田市 北野 哲男
大阪市 高杉 力
和歌山市 武本 碧
和歌山市 土屋起世子
吹田市 木下 敏子
神戸市 富永 恭子
橿原市 居谷真理子
大阪市 江島谷勝弘
唐津市 仁部 四郎
八尾市 高杉 千歩

堺市 増田わこう
京都市 榎本 宏子
藤井寺市 太田扶美代
香芝市 大内 朝子
大洲市 中居 善信

藤井寺市 鈴木いさお

「サポート」

(投句 206名)

楠見章子選



気いつけやいいバランスで爺と婆
 あたたかい言葉にいつも支えられ
 要支援3より世話の焼ける人
 ばあちゃんをサポートしてる孫五歳
 女同士義母がサポートしてくれる
 ストレッチきみのサポートするために
 サポートは論吉がそばに居てほしい
 花東の中で無言のかすみ草
 左遷地で支えてくれたのは地酒
 春の陽にサポートされて咲く桜
 産声はじじばばにとり応援歌
 お日様にサポートされて種を蒔く
 晩学にサポート貰う電子辞書
 いら立ちの助けを借りて磨く鍋
 サポートの立場忘れて振るタクト
 サポートを断る偽装ばれるから
 お陽さまも微笑み見せる試歩の杖
 何よりのサポートだった子の寝顔
 手を貸してほしい病気の夜がある
 絶妙のサポート敵をけむに巻く

泉佐野市 稲葉 洋
 横浜市 菊地 政勝
 大阪市 高杉 力
 奈良市 米田 恭昌
 八尾市 宮崎シマ子
 鳥取県 斉尾くにこ
 鳥取県 細田 裕花
 出雲市 竹治かし
 弘前市 福士 慕情
 和歌山市 武本 碧
 宝塚市 田中 章子
 鳥取県 山下 節子
 大阪府 米澤 俣子
 奈良県 渡辺 富子
 尼崎市 長浜 美籠
 八尾市 高杉 千歩
 大阪府 初山 隆盛
 神戸市 白川 淑子
 紀の川市 辻内 次根
 西予市 黒田 茂代

少しなら凭れられても受けとめる
 妻だけの支持で親父の座を守る
 お月さまにサポートされている夜道
 悪友の援護射撃で恋実る
 中年のおしゃれ腰にはカイロ貼り
 若者に広げて見せる古い地図
 サポートをしているつもりお節介
 サポーターを撒いてベンチのランデブー
 助さんと格さんがいる日本晴れ
 菜の花のサポートペダル軽くなる
 サポートの息子も白髪見え初め
 気がつけばいつも後ろに居てくれる
 住
 通帳にサポートされた跡がある
 さあどうぞわたしに助言する手摺り
 髭そってヘルパーさんを待っている
 サポートはヨイシヨとそしてドッコイシヨ
 サポートはあなたの笑顔だけでいい
 河内長野市 山岡富美子
 人
 サポートが美人で記録ぐんと伸び
 和歌山市 土屋起世子
 地
 産んで下さい私も子守なら出来る
 貝塚市 吉道あかね
 天
 沿道で手を振るぐらいならできる
 唐津市 仁部 四郎
 軸
 掛け声にサポートされて土手の春

羽曳野市 徳山みつこ

松江市 三島 淞丘

藤井寺市 太田扶美代

大山市 金子美千代

弘前市 今 愁女

神戸市 山田婦美子

三田市 上垣キヨミ

貝塚市 石田ひろ子

弘前市 高瀬 霜石

岡山市 永見 心咲

藤井寺市 若松 雅枝

和歌山市 柏原 夕胡

佐賀県 真島久美子

大阪市 柴本ばつは

橿原市 居谷真理子

香芝市 大内 朝子

山岡富美子

「そいそい」

多久和 敬 子 選
(投句 208名)



そこそこの意地へ点火をしてひとり
そこそこの上等ですと蛙の子
そこそこのへそくり隠すにも苦勞
挨拶もそこそ去っていった冬
そこそこの舐めると辛くないキムチ
そこそこの美人に産んだはずだった
そこそこの飲めと転がる爛徳利
商売もそこそこにしてパチンコ屋
そこそこの言葉の中に謎がある
食べ歩きそこそ飽きてきたベルト
そこそこの料理へおまけする笑顔
そこそこの肉そこそこの誕生日
そこそこの幸せで良いかすみ草
そこそこの暮しを守る笑い声
ガラクタをそこそこの値で買うマニア
そこそこのなつて出てくる美容院
そこそこの鯛釣ってきた父の声
そこそこのベースアツプは雲の上
そこそこの布施で仏も苦笑い
鯛一尾使いそこそこの春の贅

紀の川市 宇野 幹子
大阪市 奥村 五月
大山市 金子美千代
和歌山市 武本 碧
松江市 石橋 芳山
神戸市 富永 恭子
松江市 三島 淞丘
松山市 栗田 忠士
大阪市 津村志華子
岡山市 永見 心咲
大洲市 花岡 順子
大阪市 枋尾 奏子
枚方市 寺川 弘一
西宮市 緒方美津子
西宮市 足立 茂
南あわじ市 萩原 狸月
大阪市 神夏磯典子
河内長野市 松岡 篤
藤井寺市 田付 絹枝
大阪市 笠嶋 惠美

百均の種もそこそ発芽する
そこそこのタンス貯金のある安堵
挨拶もそこそことつくりが転ぶ
そこそこの幸せでよい母の鍋
錆きてもそこそ役立ちますよ
そこそこで仕事も恋も四捨五入
及ばない尻尾そこそこ振って見る
そこそこの器量に惚れてルビー婚
そこそことサロンプラス張り飲むお酒
そこそこでいい水こぼれないように
そこそこの男を募集しています
そこそこの脳からしほり出すヒント

佳

そこそこの一日でした発泡酒
そこそこで済まない春の鬘斗袋
そこそこも優秀となる披露宴
そこそこに四角を丸にして生きる
そこそこで満足している鶯の子

人

切るとこで切ればハッピーエンドなり
自慢話そこそこに聞くイヤリング
天

そこそこの孵化した山が笑ってる
軸

そこそこの暮らしを詰めてごみ袋

和泉市 横山 捷也
宝塚市 田中 章子
奈良市 大久保眞澄
和歌山市 福井 菜摘
橋本市 石田 隆彦
京都市 榊本 宏子
鳥取県 石谷美恵子
弘前市 稲見 則彦
大阪市 榎本日の出
松江市 錦織 禮子
佐賀県 真島久美子
鳥取県 斉尾くにこ

榎原市 居谷真理子
河内長野市 山岡富美子
出雲市 竹治ちかし
鳥取県 西谷 悦子
富田林市 山野 寿之
弘前市 高瀬 霜石
吹田市 須磨 活恵
鳥取市 夏目 一粋

初しよ教室

題一 コレクション

山口 光久

何はともあれ多作に取り組んで下さい。多く句を作る事です。一つの題に対して何句ぐらい作っていますか。出来たら二〇句ほど作ってみませんか。私の知っている人は三〇句作り、そこから自選をして五、六句に絞り、更に推敲をしようとっています。

多作をすることでどうしても散文的になり、説明句や報告句になりがちですが。

この二十句の中から取捨選択をして絞り込むのです。さらに推敲を重ねるのです。注意しなければならぬのは駄洒落や言葉遊びになつてはいけないということです。広い意味で考えればこれらの言葉は言葉の文化、文字の文化かも知れませんが、川柳ではこれらの言葉は避けましょう。

作句にあたって読者を傷つけるような言葉は絶対禁止です。それは差別的な言葉、侮辱的な言葉、卑猥な言葉です。これらの言葉を

無意識に使っている場合があるかも知れませんが、厳に慎むべきです。

【添削】

原 手塩かけ育てた孫にバカにされ 風花
題の「コレクション」が読み取れません。
題を詠み込んでも詠み込まなくてもよいのですが、句から題が読み取れる、感じ取れるようにしましょう。

添 苦労して集めた蝶に胸をはる

原 費やした金が死んでるコレクション 楽鬼

費やした金が死んだらコレクションではなく、単なるガラクタの収集でしょう。ごく当たり前になりますが。

添 費やした金が生きてるコレクション

原 コレクション他人に言わせばゴミ集め 文香
他人とはかすより、誰か特定した方がよいでしょう。

添 コレクション友に言わすとゴミ集め
原 ガラクタのようにも見えるコレクション 国和
中七が冗句。

添 ガラクタも僕の大事なコレクション
原 コレクション集めてみたい論吉さま 英男
コレクションは集めること、「集めて」と

ダブります。発想は面白いです。
添 論吉さんのコレクションなら精を出す

原 年金の収集だけに決めている 信二
「年金の収集」？ 句意がよく解りませんが、独りよがりになつていませんか。

添 蝶々の収集だけが楽しみです

原 目玉なく数ばかりあるコレクション 喬

添 目玉なくガラクタばかりコレクション

原 中味飲み地酒の瓶をコレクション 洋一

添 独特の地酒の瓶をコレクション

原 お料理の本だけ沢山コレクション (高) 弥生

添 お料理の本を山ほどコレクション

原 コレクション眺めて酔って白寿まで ミヨノ

添 コレクション眺め陶醉して白寿

原 コレクション見栄を並べた棚の上 恵

コレクションを座五に持つてきました。

添 棚の上見栄を並べたコレクション

原 雨どいにカラスの残したコレクション (川) 真理子

中八になつてリズムが悪いです。

添 雨どいにカラスが残すコレクション

原 息子(二)の切手ブームが過ぎて母使(村) 恵子

息子ときたら母(親)は不要。

添 息子の切手ブーム過ぎれば紙切れに

原 コレクション話せば友はゴミと言う (富) 恵子

添 コレクション友の鑑定ただのゴミ

原 あの世界には使えぬコインコレクション (高) 道子
添 黄泉の国へ持つてはゆけぬコレクション

原 価値出ると思い切手を集めてる こそえ
 添 価値が出ると思じ切手を集めてる
 原 コレクションマニアになるには遠い道 開子
 添 コレクションへ夢中になれぬ年金者
 原 戦時中出来ずがまんのコレクション (山) 久子
 添 戦時中我慢重ねたコレクション
 原 鴨居にずらり姫提灯が国自慢 律子
 添 姫提灯鴨居にならび国自慢
 原 食い気のみコレクションする金もなし つな子
 添 コレクションするには無理な年金者
 原 コレクション還ってきたよ歌麿が 勝治
 添 思いがけず還ってきたよ歌麿が
 原 海辺住む貝がら集め宝物 美紗子
 添 一筋に貝がら集め飾つてる

【少しの工夫で良くなる句】

原 亡き父の切手アルバム使います 純子
 添 亡き父の記念切手は使います
 原 切手・コインと亡きじいさんのコレクション 秋星
 添 切手・コインはじい爺さんのコレクション
 原 コレクション数年先にごみになる モモ
 添 コレクション数年後にはゴミとなる
 原 コレクション道楽過ぎて生業に 回春子
 添 コレクション道楽過ぎて骨董屋
 原 コレクション庭に千両万両も (燭) 節子
 添 コレクション庭に千両万両が

原 コレクションお金の余る人の趣味 (見) 温子
 添 コレクションお金が余る人の趣味
 原 コレクションいつか宝になる夢を 加代
 添 コレクションいつか宝になる予感
 原 欲望を満たしただけのコレクション 志津子
 添 欲望を満たしてくれたコレクション
 原 一〇〇年前の切手今ではただの紙 紀美恵
 添 一〇〇年前の切手今では貴重品
 原 ハイハイの彼も立派なコレクター (中) 修
 添 ハイハイの孫も立派なコレクター
 【入選句】
 子の目には塵でしかないコレクション 富香
 バリコレを二時間待って二分見る 一泉
 虫や石金がかからぬ昔の子 (徳) 正子
 絵葉書をスクラップして眺めてる きっこ
 友達とカード競つたランドセル 治子
 三代切手集めて自慢する 利子
 思いつくままの収集ゴミと化す 恭子
 まゆつばのネットで買ったコレクション (渡) 修
 美術展ハブスブルクの富を観る 狸月
 身の丈に合わぬマニアのコレクション 和之
 鯉のぼり谷間を泳ぐコレクション 義雄
 道楽で魚拓集める釣天狗 紀雄
 ふくろうに肖りたくて数集め (株) 玲子
 コレクション高じて妻に責められる 忠士

定年後制服洗い保存する ひとし
 うつとりと見つめ頬ずり有田焼 武人
 コレクション眺めてひとり悦に入る 忠貞
 酒瓶のラベル収集青春譚 絹枝
 コレクションで退屈しない応接間 ひろ子
 年金でやりくりしてる収集家 晶子
 鑑定に出して大恥コレクション 凱柳
 【佳句】
 やりたいね福沢諭吉のコレクション 孔一
 今更に集めた物が背に重い のり子
 鑑定に出してがっかりコレクション 元三
 本物と信じ込んでるコレクション 昭枝
 目利きではなかつた亡父のコレクション (前) 洋子
 【今月の推せん句】
 ボーナスマン全て注ぎ込むコレクション 永見 心咲
 コレクトマニアは小遣はおろかボーナスま
 で注ぎ込みます。それが生き甲斐なのです。
 そつと持つガラス細工のコレクション 大前 安子
 ガラス細工は目を見張るものがあり、人を
 魅了します。でも壊れやすいのが欠点。
 掛軸と壺に母屋を追い出され 大島 友子
 骨董品には心を奪われます。しかし、収納
 場所の確保が大変。下五が利いています。
 【私の句】
 鉢植の金のなる木に開まれて

川柳塔鑑賞

同人吟 吉岡 修

— 4月号から

遠い空親子で思いあつている

吉田 陽子

いまや巣立ち、別れの季節。こんな思
いの家庭が多いだろう。子は案外平気で
独り暮らしを頑張っているが、親の方が
めそめそする。娘二人東京に残して転勤
した時を思うと、四〇年過ぎた今でも、
こみ上げて来そうになる。この親子の心
情にエールを送りたい。

ちよつと顔出してわたしを売つてくる

安土 理恵

なにもかも自分のペースに包みこんで
いるおらかなお人柄を思う。自信満々
な売り込みにはいつも、そこそこのいい
値がついているらしい。

限界の先に小道が見えるかも

古今堂 蕉子

限界まで努力したのか、とはつばをか
けられている思い。努力努力、もう一度
鞭を入れます。

バラエティー芸人だけが大笑い

藤岡 りこ

チャネルを切り換えても、ここもお
笑いが牛耳っている。多くの番組がお笑
いに占有されているみたいだ。局のアナ
ウンサーがいてもお笑いに合わせてゲラ
ゲラやっている。頼みのNHKまで他局
に似た番組が多い。くだらぬお笑い番組
に品のいい川柳で一矢を、と思う。

回らない鮎屋で妻の誕生日

坂上 淳司

おめでとうございます。奥さんと二人
なんで格好いいこと。回らない鮎屋は遠
ざかって久しい。カウンターの雰囲気も
懐かしい。過日孫一家とすし屋へ行った。
勿論回る方だ。子供達も馴れたもので好
きなのが来るのを待っている。ロボット

が握ると聞いたのを思い出したが、そんなものは見えなかった。しつぱりと、回らない鮎屋が恋しくなった。

車窓より見えるハルカス明日行こう

澤田 定子

ハルカスの窓開け星を掴み取り

亀岡 哲子

歳かなあハルカス出来て行く気せぬ

寺川 弘一

同じハルカスを迎えても思い方は人
様々で面白い。このビルは日本一高いが、
二番目が横浜ランドマークタワー二九六
メートルだそう。ハルカス三〇〇メー
トルでやつと日本一。これもいつか超え
るビルが出来そう。それまでわが川柳
人的になつていただこう。

夢捨てず大きなラツパ吹いている

内藤 憲彦

気宇壮大。こんな句に会うと昔を思い
起す人も多からう。大空へ堂々と宣言
できる生き方でありたい。

日向ぼこ誰のものでも無い自由

熊代 菜月

詫びもせず日本へ黄砂2・5

海老池 洋

いい気持で楽しめる日向ぼこへ、隣国
からの黄砂、微粒子物質PM2.5が襲い
かかる。とんでもない国だ。

やわらかい陽射しフェルメールの世界

大内 朝子

ほっとする景色だ。数年前「ヨハネス・フェルメール全作品模写展」への案内が来た。アートギャラリーで一週間その画展を開く、オープニングパーティーもあるという。行ってみてびっくりした。全作品らしいが見事なそっくり。わけても有名な「真珠の耳飾りの少女」のすばらしいこと。模写画展をするなんていいのかなと思いつつ、画家に聞いてみた。「こんな実力あるなら模写なんてせず自分の画を打ち出せばいいのに」と。絵の世界にもいろいろあるのだろう。この句のように心やわらいでいる人に、模写では申しわけない気がする。

落ち目だと知って右腕去つてゆき

村上 玄也

派手に打ち上げて新党へ。あちこちの党からの転向組でスタートはなかなか頼もしく見えたが間もなく、再分裂。先を讀むのは早い。かくてとても期待のもとでもない弱小党がずいぶんと並ぶ。これが世の常らしい。そのとこをうまく突いてもらえた。

十代があつたらかんとメダルとる

伊勢田 毅

十代のソチ応募も並はずれ

金子 美千代

ローザンヌバレエ優勝いい春だ

古川 奮水

ソチオリンピックで十代の活躍が見事だった。フィギアメダル羽生結弦一九歳、スノーボード平野歩夢一五歳が銀、平岡卓一八歳が銅に入賞、日本中が湧いた。彼等は幼い頃からびっくりするほど過酷な（と思える）練習に頑張り克服して来た。またローザンヌ国際バレエコンクールでは二山治雄一七歳、加藤三希央一八歳が一位二位に入賞するなど十代の活躍ぶりには脱帽のほかない。日本人の素晴らしさを誇りに思いつつ、川柳に若い人が少ないことを思い比べてしまふ。

良し悪しをまだ聞き分ける両の耳

米澤 俣子

やつぱりアンテナの張り方にもポイントがあるらしい。とっつかまえた情報を脳へハートへ届ける、その受付をする両耳だから老化させたくない、だいじなことである。

お出かけに頭に乘せる髪がない

江見 清

吹きだしてしまいます。コマーシャルによるといとも簡単に毛を頭にのせ、ブラシでさつさと均す、それでお出かけOK。ところが、自分の髪が残っていないとどうなるのでしょう。そんな状態で羨ましくコマーシャルを見てはる図を思います。

七億円もいらん一億あればいい

江島谷 勝弘

七億円当れば命縮むかも

榎本 日の出

七億は見たことも持ったこともないけど、この句のように困つてみたいもの。当らへん当らへんと言いつつ当つて欲しいですね。

生きている夢中になれるもの抱いて

岸 桂子

今回の鑑賞で一五八六句三一二名様の「夢中になれるもの」を伺えたのだが、いろいろあつても、それはやはり川柳なんだなということに改めて強く感じました。それをこの句も教えてくれています。全ての句に敬意と感謝をこめて終えます。ありがとうございました。

水煙抄鑑賞

—4月号から

佐藤 古拙

未使用の笑顔をひとつ持っている

吉道 あかね

生きてゆくため誰しも、外交辞令用の笑顔はこと欠かせない。殊に女性の場合には見せられないものである。

白壁に波紋が揺れている旅情

丹下 凱夫

船頭の漕ぐ波あとが、ゆるやかに土蔵造りの白壁に映る静謐な佇まいこそ、旅心を慰めてくれる。作者は詩人の境地だろう。

約束が微妙にずれてからの雨

藤成 操江

雨は人の心の襞にひとしお沁みる。ゆ

き違いのあった約束ごとのあったあとは、重く心にのしかかってくる。この雨は若い男女の切迫した雨か。

一枚の切手で足りぬ春の章

平野 あずま

時は春、日は朝、と歌った詩人がいるが、春になると気が弾む。絵手紙もそうだが、思いがスペースを越えてしまう朗らかな作句者の躍動感に共感したい。

さびしいないつでも鬼の役回り

栗田 忠士

良薬は口に苦しで、甘口な言葉が幅を利かす世の中だが、あなたの存在感は誰もが一目置いています。時折、川柳的な諷刺を添えてみませんか。

居酒屋を出る時までの正義感

寺本 実

アルコールがまわった時の解放感。天下国家をあげつらう怪気炎。下戸には理解したいシーンだが、一步、のれんを出ると夜風が身にしみる帰り途の空しさ、このあたりの心状も下戸には想像できか

ねるでしょう。

スマホより紙の匂いの文庫本

石田 ひろ子

今の若い人は、文をあまり書かない。無言でスマホを追っている。スマホは現代用語辞典に登場しているのだろうか。むかしの文学青年は読みもしないカン卜などの文庫本を、持ち歩き恰好をつけたものだ。ひよつとして作句者のまわりに文庫本大好きの方が、いらっしゃるのかも。親しみの湧く句であります。ほかに印象に残った句を揚げてみましょう。

少しずつ夢に近づくかたつむり

楠原 富香

予定表妻の都合で走ります

高森 一呑

鉛筆の先も私も丸くなる

野口 晶子

病院の椅子は無口と饒舌で

池田 たか子

仲人世話を焼く

小栗 清吾

最近は三十歳過ぎてても結婚しない人が増えているようですが、江戸時代の結婚適齢期は、男性が二十歳から二十五歳、女性は十七歳から二十歳とされていたようです。男女の交際が、現在ほど自由でなかった江戸時代、適齢期の男女を結び付ける世話をしたのが「仲人」です。

もちろん、

仲人の後からできるおもしろさ 九三

という句があるように、お互いにすつかり約束ができていて、後から形式的に仲人が決まることもあったでしょうが、江戸川柳には、仲人の活躍振りを示す多数の句が残っています。

木と餅を持って仲人すすめこみ 安六義四

「木に餅がなる」は、うますぎる話をいう例えです。いわゆる「仲人口」を駆使して、縁談を持って回ります。

とんだ柔和な姑さと仲人言い 曾二 四七

仲人は鬼を千匹殺すなり 三八二

「お姑さんは柔和ないい人です」と言うくらいは当然のこと、「鬼千匹」と言われる小姑をいえないことになりました。

双方がその気になれば、仲人はお見合いの場を設定します。江戸川柳では、水茶屋か芝居小屋ですることになっています。まず、水茶屋。現在の喫茶店です。

隣へはまず観音と言っておき 拾三 三十一

見合いに行くことを知られるのが恥ずかしいので、お隣りには「浅草の観音様へお参りに行ってきます」と言っておきます。浅草寺境内の二十軒茶屋へ行くのでしよう。

水茶屋を二軒ふさげて見つけつ 五八

「見合い」といっても、現在のように二人が差し向かいで話すわけではありません。隣り合った水茶屋を二軒借り切り、仲人のアドバースで隣からのぞくのです。

錦手で飲むのがそだと仲人言い 安八義四

仲人が隣の水茶屋を見ながら「あそこの錦手の茶碗で飲んでいるのがそだよ」とささやいて教えたりします。

縁のものですから、うまくいくこともないこともあります。

極まったでどちらも茶代きばるなり 明六礼一

双方気に入れば、どちらも茶代を奮発してめでたく成立となりますが、

あれならいやと飲みかけた茶をこぼし

安九信一

気に入らなければ、飲みかけの茶を捨ておさらばです。

次は芝居小屋でのお見合いです。

隣り棧敷からも見ごつちからも見 曾二 隣同士の棧敷に陣取り、舞台はそつちのけで見たり見られたり、そうなれば、芝居の方は上の空です。

吉日の棧敷狂言つる覚え 五三二四

しかし、仲人は心得たもので、芝居が濡れ場(ラブシーン)になり、双方が艶っぽい気分になったところを見すまして、返事を促します。

濡れの幕などで仲人返事させ 傍三三

これでいい返事が得られれば、やがて結婚となります。

顔見世の娘は曾我に嫁で来る 二〇三六

十一月の顔見世興行で見合した「娘」が、結婚して正月恒例の曾我狂言を「嫁」として見に来たのです。めでたしめでたし。



追悼

木村貴代子さん

西口 いわゑ

とがありました。が、持ち前の忍耐と努力で克服され、神戸の名谷から西宮北口まで、約一時間もかかる道程を物ともせず「ローズ川柳会」に出席できるようになりました。

バスに乗るうれしき事が一つ増え

一日に一つ挑戦病み上がり

山ほどの薬と越した大晦日

新しいノートの白にはげまされ

それからリハビリのためにと、パソコンを習得され、会の句報も引き受けてくださいました。協取りもして頂いたり会の中の存在でした。今更ながら感謝の念でいっぱいです。最近のお話の中には、いつも二人のお孫さんのことが、出ない日はありませんでした。

やつと一歳何歳までを祝えるか

幼子が笑うと花が咲いたよう

酒なくとも膳はにぎやか孫二人

雨上がり赤い長靴見せに来る

はるかなる未来の孫よ幸せに

貴代子さんの心の髪を暖めてくれたのは

二人のお孫さんと、川柳であったと思われ

ます。

木村貴代子さんのご冥福を心よりお祈り

申しあげます。

合掌

平成26年1月26日没

享年78

一月二十七日奥田みつ子さんより、木村貴代子さんの訃報の電話がありました。突然のことなので、耳を疑いました。一月の句会終了後、楽しくお食事をしたばかりでしたのに、でも、いきさつを聞いてやつと、納得したような次第です。前日には、娘さんのご家族四人と夕食を共にされたとお聞きして、熱いものが胸を過ぎりました。

お通夜・告別式には、西出楓楽理事長・奥田みつ子相談役・ローズ川柳会の会員が参列、しめやかに行われました。

昭和五十八年、西宮北口に「高島屋ローズ・カレッジ西宮川柳教室」が橘高薫風先生を講師として開講、以来貴代子さんも有能な門下生でした。平成七年阪神淡路大震災で川柳教室が閉講になり、そのまま「ローズ川柳会」という名目で、薫風先生を特別講師、秋元てるさんを会長として会を立ち

上げ、現在に至っています。振り返れば貴

代子さんのお付き合いも長い歲月でした。

貴代子さんのご主人は早くに他界され娘

さんと二人住まいでした。

いさかえと宝と思ひ合つ母娘

やがて娘さんも結婚され、淋しさを補う

ようにお花作りと川柳に打ち込んでおられたようでした。

只今と遺影に声をかけてお茶

形なきあなたと暮らす今も今も

原爆忌君の忌我の生まれ月

幸せな過去を力に生きている

残りの世笑って生きん二人分

来年の桜もここでこの人と

後の一句、ご主人とのほのほとした光

景です。こんなにも早く幸せが幻のように

消えるとは思わなかったでしょうに。

貴代子さんはかつて、脳梗塞で倒れたこ

民族の詩歌 (23)

— 高齢者のうた

三好 專平

ダメモトという俗諺がある。当たって砕ける、ダメでモトモトという庶民感覚の精神である。私の妻も七十歳を過ぎて、ひざが悪くなり、八方手をつくしたがよくならない。思いあぐねてY病院を尋ねてみた。運よく手術に成功し、今では人並みに歩けるようになった。ダメモトの功德である。

大体お年寄りは大同小異であろうか。

現在日本人の八十歳以上の老人が八百万人と言われる。孤立化と孤独死が増えている。映画「くじけないで」は柴田トヨさんの生涯を描いて、多くの人々に感動を与えた。九十歳から詩を作り始めたという。(百一歳没)。

秘密

九十八歳でも恋はするのよ

夢だつてみるの
雲にだつて乗りたいわ

俳句や短歌や川柳を始めてトヨさんのように充実した日々を送っている人たちが増えてきた。川柳塔にも多くの方がおられる。日野原重明と金子兜太の対談で、「俳句をやるのが生甲斐や脳の活性化に役立っている」というくだりがある。

まず俳句

乾く乾く地面も皮膚もでで虫も 金子兜太
淡海なりわが玉の緒を風抜くる 森 澄夫
わが友の蟬よ蛙よ唄おうよ 津田清子

次に短歌

としどしに老ゆといへども待つところ何
待つともなくあくがるる 宮英子 96
老いも死も今は思うまじ生きの良き鱒や真
子を貰いて食いたり 出井義子 94
百二歳の先輩新たに入所して養老院に活気
の満り 倉掛昌三 98

小高賢の「老いの歌」(岩波新書)より

・のび盛り生意気盛り花盛り老い盛りぞ
と言はせたまきもの 築地正子
午睡よりさめて出で来し蛇崩の道に今年の
梅の花ちる 佐藤佐太郎

最後に川柳塔より

八十路来て星占いを未だ信じ 源田啓生
みかんの花香りわたしは蝶になる 石田ひろ子
衣食住足りて戦争忘れ果て 荒巻 夢
強かに生き気がつけば八十路 赤木妙子
一病を氣遣いながら九十四 尾畑なを江
ロボットに介護を受ける近未来 前田弘恵
夫逝きて喜楽の味もうすくなり 吉富節子
戻りたい昭和忘れない昭和 高杉 力
七変化水田町なら可能です 柴本ぼつは
初物を食べて今年も生きのびる 野川宣子
引力に負けたくなくてマツシャージ 渡辺芳子
パウー全開卒寿の口がよくすべる 長川哲夫
生きたいと思う心が奇跡呼ぶ 尾崎一子
川柳のおかげで今日も日が暮れる 田村周子
百寿の髪染めている哀しい白虐 永田俊子
永田さん百一歳、「塔」最高齢と聞く。
お元気に。



重要なリズム (3)

川柳の「リズム」につきましては、本欄のNo.16と17で取り上げていますので、今回は(3)になります。

過日の常任理事会で、「初心者には定形が大切と指導していますが、その初心者から「同人の作品には破調が目立ちますが、どうしてですか?」と問われまして、困惑しています」という趣旨の発言がありました。

たしかに、同人の発表の場である「川柳塔」や「自選集」にも、しばしば破調の句が見受けられます。これは、「形よりも「想い」を優先させた結果であろうと推定いたします。

私自身の考え方を整理しますと、

① 5・7・5の定形を尊重し、定形を目指して作句する

② 定形は尊重するが、やむを得ぬ破調は許容する

右のようになります。そして、初心者には、まず、①の姿勢で向かっていただきたいと思っています。

詠う対象がどのような素材であっても575にまとめるように努力してください。それを鍛錬だと心得て、根気よく575にまとめるのです。そのうちに、少しずつ七五調のリズムが身につけてきます。無意識に「想い」が七五調になって出てくるまで鍛錬を積み重ねてください。

奔放な画風で知られるピカソも、若い頃には精緻なデッサンを残しています。対象をしっかりと見つめ、姿形を正確に掴むのは絵画の基本です。その基本を身につけることによって、デフォルメ(対象を変形して表現すること)が訴える力を持

つようになります。川柳も同じです。基本のリズム「575」を身につけて、はじめて破調が生きてきます。

基本も身につけず、無意識に作った破調の句は、ただ単にリズムの悪い駄作にすぎません。七五調のリズムを身につけた人の破調には必ずからリズムがあります。それを「内在律」と言います。内在律とは、定形には収まっていなくても、作者が意識してリズム感を持たせている。あるいは、身についたリズム感が無意識のうちに作品に現れていることです。

しかし、ベテランにお願いしたいのは、内在律があるからといって、安易に破調の作品を発表しないでいただきたいということ。文芸は自由自在が身上ではありませんが、初心者を困惑させるような作品はできるだけ避けて、先ほどの①の姿勢を保っていたらどうでしょうか、お願い申し上げます。

また、575のリズムを尊重すると言っても、肝心の音数の数え方を間違っているのはリズムが整いません。基本中の基本ではありますが、改めて復習しておきましょう。

★ 拗音 ↓ きゃ・きゅ・きよ等、これ2文字で1音

★ 促音 ↓ つまる音、小さな「っ」、これで1音

「しゃかい」 字数は4文字ですが「しゃ」は拗音ですからこれだけで1音。したがって「社会」は3音になります。

「がっこう」 字数は4文字で、小さな「っ」は促音。これだけで1音ですから、「学校」は4音になります。

この二つの例をしっかりと頭に入れておけば大丈夫です。

なお、川柳のリズムについては、拙著「川柳の理論と実践」75頁の「川柳のリズムとは何か」と、81頁の「定形のリズム」で詳しく述べています。参考にしてください。



色景色もむお花軽津の石霜魚高

奇数月の連載になります。

「赤い靴下」の巻 ⑳

マークンこと田中将大投手の給料を、投球数で割ると、1球当たり約70万円になるそうだ。ワオ。

彼を獲得したニューヨーク・ヤンキーズ(以下、N・Y)は、米国ナンバーワンのお金持ち名門チーム。日本ならさしずめ、読売ジャイアンツといったところだろう。

あのホームラン王ベーブブルース、鉄人ルー・ゲーリック、マリリン・モンローと結婚したジョー・ディマジオ。日本選手だと、かつてはゴジラ松井、今は黒田、イチローが所属する日本でも1番人気のメジャーチームである。

そのヤンキーズの宿敵が、ボストン・レッドソックス(以下、B・R)。日本だと早い話が、大阪阪神タイガースちゅーこってすわなあ。何を隠そう、僕はこのB・Rのファン。それは、この男の存在を知ってからだ。

かつてB・Rに、テッド・ウイリアムズ(以下、テッド)という名選手がいた。

1941年(昭和16年。日米開戦の年)のこと。

シーズン最終戦まで、翌日のダブルヘッターの2試合を残して、彼の打率は3割9分9厘5毛だった。

四捨五入すれば4割だからと、監督は彼に欠場をすすめたが「最後の試合で4割を打てなかつたら、4割打者という名前に値しないことになる」と言い張り、打席に立った。

その最後の2試合の結果は、8打数6安打。最終成績を4割6厘とした。それ以降、メジャー・リーグに4割打者

は生まれていない。

因に日本記録は、1986年(昭和61年)のランディ・バース(阪神)の3割8分9厘である。

テッドは三冠王を2度など、数々の記録を打ち立てたが、残念なことに、彼はブレイヤーとしての最盛期の4年半を第二次世界大戦と朝鮮戦争の2度の兵役(戦闘機乗り)で棒に振ったために、ホームラン記録(521本)は、ベーブ・ルース(714本)には遠く及ばない。

完璧主義者の彼は、社交性に乏しく、頑固でぶっきらぼう。当然のこと記者には嫌われるが、彼には誰にも知られたくない秘密があった。

彼はとあることから、小児がん患者のジミー少年と知り合い、以来ひとりでこっそり小児がんと闘う子供たちの為に援助をしていた。この事がいつしかチームメイトの知るところとなり、仲間もぼつぼつ増えていったが、マスコミにはひた隠しにしていたという。売名行為と思われたくなかつたからだろうが、なんとも強情く張りの彼らしい。

少し前の知名度調査によると、今やボストン近郊の住民の90%の人たちが、この「ジミー基金」の名前を知っているという。この数字は「B・R」には僅かに劣るが、知事や上院議員の名前の知名度よりもはるかに高いのだそうだ。

僕は0歳の時に小児がんに罹ったが、運よく生き延びた。35年前に「がんの子供を守る会」の存在を知り入会し、彼のこと知り、ファンになった。そんなわけだから、僕はマークンよりも、上原浩治ガンバレー!なのである。

本社 四月句会

四月七日(月)午後一時
アウイーナ大 阪

桜満開とはいえ少し底冷えのする七日、四月句会は百十名(投句者十名)の参加で開催。

句会に先立ち、先ごろ亡くなられた同人、山本三郎さんに黙祷を捧げた。

今月のお話は、山口光久氏「旅と川柳」と題し、路郎句集「旅人」、薫風句集「師弟」より各々十句を紹介。続いて川柳雑誌より、薫風氏が司会の座談会「おしどり夫婦の旅を語る」の中から、年一度五組の夫婦が三泊程度で行く「おしどり会」のエピソードなどを紹介。ちなみに栞氏はこのメンバーであったとか・・・。

さらに旅の句として一人旅・バスツアー・フルムーン・海外旅行など、同人達の句を紹介した後、海外旅行の注意として、甘い言葉に乗ると、麻薬の運び屋にされるといふ怖い話で締め括られた。

(まつお記)
月間賞は、木本朱夏さん(和歌山市)
(司会)蕉子・善純(脇取)賢子・まつお
(受付)隆彦・わこ(清記)勝弘

席題「先」

鈴木いさお選

春先になると家出の増える妻
流行の先端を行き風邪をひく
冥土への旅にお先にとは言わぬ
早いもん勝ちなら負けたことがない
先に生まれたあなたは先に逝つてね
先達のせなを心の糧とする
鉛筆の転がる先に胃腸薬
焦らさんとその先を早よ言うてんか
卒業証書丸めて覗く国の先
先様に都合を合わす訳があり
あの世への優先席で舟を漕ぐ
黒い服着れば噂が先走る
半歩先それが抜けない力の差
歴史認識過去が未来を遠くする
先に立つと大気汚染を浴びます
先様の家風に媚びる玉の輿
先手必勝なのに先立つものは無い
影武者がとうとう僕を追い越した
先日付小切手ばかり切る浮き世
時々僕のは先行く影法師
その先は私ひとり考える
夫より先に死ねない冷蔵庫
その先は教えてならぬ宝島
先ほどは失礼したと即メール
会者定離いいではないか先のこと

黒 兎
舞 夢
かずお
蘭 幸
美津子
光 久
黒 兎
勝 弘
たもつ
正 雄
富 子
なぎさ
富美子
としお
義 子
誠 一
柳 弘
希久子
朱 夏
柳 弘
月 子
希久子
ばっは
弘 光
唯 教

新婚から三歩先いく妻である
興に乗り一途に突るペンの先
先を読むことに疲れた風見鶏
踏み込んだ迷路、これからを問うて
ありがとう先に御免と行く冥土
先ずママの胸に抱かそう呱呱の声
先に逝く言いつつ医者にすがりつく
先先の日本背負つたランドセル
行く先はどうあろうとも今日の酒
旅先の妻に翼が生えている
先頭の雑魚に聞きたいことがある
指先が触れてときめく花の下

佳

まつお
すみ子
洋
紀 乃
朋 月
ばっは
一文
久美子
直 樹
克 己
保 州
朝 子
満 作
富美子
順 子
真理子
朋 月
朱 夏
扶美代
完 司

兼題「溝」 吉岡

修選

夜中まで飲んで嵌った深い溝
人生で三度は落ちた溝である
金銭が絡み友とに出来た溝
僕は跳ぶあなたが掘った溝くらい
あなたとの溝埋めるにはブルドーザー
日韓の溝に手を焼くオバマさん
これしきの溝は何度も越えてきた
横丁の溝に小さな花筏
屁理屈が余計に溝を深くする
ふたりの溝ピンクに埋めた花いかだ
靖国に詣つた溝が埋まらず
歴史認識隣は溝を掘るばかり
隣国へ大洋よりも深い溝
日中韓越すに越されぬ溝がある
手をつなくこれも夫婦の溝掃除
年金と増税の溝どう埋める
極楽の手前の溝が越えられぬ
姑との溝を埋めてる介護の手
子の夢と親の期待に溝が出来
友達の数だけ溝を持つている
親の介護兄弟間に溝つくる
地図のない溝をいくつも飛び越えた
放つときは溝はだんだんでかくなる
出来た溝埋め戻すのに買うケーキ
元氣よく溝を飛んだら松葉杖

准一 房子 克己 真理子 見清 好文 恵 完司 弘風 富子 淳司 直樹 黒兎 富子 美津子 いさお 完次 光久 寿之 扶美代 好文 日の出 勝弘 弘風 茂

溝少しあけて夫婦の恙なし
一杯いこかそれで埋まるほどの溝
腹さぐり合つて互いに溝埋める
跳び越える勇気があれば埋まる溝
それにしても京都の溝は美しい
埋まらない溝へ論吉が橋を架け
昔から溝の匂いのする軍手
妻と溝孫が笑顔の橋を架け
溝つなく欠片に古代史のロマン
たつたひと言葉あれば埋まる溝なのに
話すたび会うたび溝が浅くなる
アホちゃうかバカじゃないのと溝は無い
住
出来ちゃつた挙式両家の溝埋める
8パーが庶民の溝を深くする
白黒をはつきりさせて溝が出来
ダブルベッドに溝できだした倦怠期
理化学研溝がだんだん深くなる
人
おはようで昨夜の溝は溶けました
地
溝だつた小さい時に見た小川
天
会つてみれば溝はわたしの胸の中
軸
厄介な溝だ今度はピンク色

美智代 理恵 日の出 保州 蘭幸 誠一 瑠美子 好 五月 理恵 かずお 五月 敏治 紀雄 代 紀洋 雄 一步 見清 耕治

兼題「化ける」 太田扶美代選

メーキャップだけで上手に化けられぬ
カメレオンあなたの側で化けてます
いつの間に小銭に化けた論吉さん
何処でどう化けても亡夫なら解かる
あと一歩化けぬ鏡に愚痴を言う
根はいい人らしい尻尾見えている
ボロ株が大化けをして出世株
復興費どこに化けたかまだ仮設
バーゲンへ論吉英世に化けはじめ
ばあちゃんも春は色々化けてます
新暦が旧暦に化けてくる寒さ
メーキャップ私の化身出来上がる
紅一点だんだん美女に見えてくる
五倍には化けると投資勧められ
化けの皮見抜けなかつたけれど好き
美容院を出て春風に若返る
化かされて化けて夫婦の受け応え
議事堂から狸囃子が洩れてくる
亡き人の声も聞こえる花の宴
道端の花は私の化身かも
満月の夜にはほくも化けてみる
化けるたび嘘がだんだん深くなる
庭の葉っぱお札に変える修業中
正体はツルだつたのかがりがとう
子沢山食費に化ける助成金

房子 順子 英旺 五月 見清 美津子 靖博 一步 といな 月子 求芽 好文 直樹 正雄 耕治 唯教 代 眞澄 眞理子 好 黒兎 寿之 美智代 耕治 宣子

化ける暇ないので今日は逢いません

おそとではママはオホホとわらいます

スーパ一へ行くにも化ける心がけ

どう化けてみてわたしはわたしです

母さんの着物と知らず食べていた

美しい仮面を付けて位置につく

人間になれぬ尻尾が隠せない

暴落で株券紙切れに化ける

降りる駅までに化けますコンパクト

あきらめたらあかんまだまだ化けられる

化けの皮脱いだら空は青かった

化身でもいいもう一度話したい

佳

目的がなくなり化粧止めにする

身嗜み自分のためにする化粧

化けの皮シヨップが並ぶ永田町

善人に化けて苦勞をするタヌキ

春ですなきれいに化けて出掛けます

人

終章は風の化身となるもよし

鉛筆を転がす槍に化けるまで

地

化けて化けてずつとあなたを樂します

天

花野たそがれ化けたまんまで寝てしまふ

軸

兼題 「ぎゅつ」

居谷真理子選

へそくりの金は詐欺には渡さない

丹田にここ一番を押しつめる

春の陽がぎゅつと詰まっている財布

ぎゅつと矢をつがえて標的はアナタ

食事前ギユツとお腹を締め付ける

おぼちゃんの尻割り込んできた座席

煮え切らぬ男をひねり潰したい

本當の仲間だ強い握手する

わたくしをぎゅつと絞ればまだ色香

根にぎゅつと溜めている雑草の意地

胸せまる苦勞話は私にも

驚掴みされてとうとう五十年

潔癖症もお金は素手で握れます

爺ちゃんの靴は鳴り皮入りでした

急速冷凍ぎゅつと睨んでいた鮪

これが最後かたい握手のクラス会

一円玉財布にギユツと詰めている

拳はぎゅつ涼しい顔で向い合う

亡き妻がときときぎゅつとネジを巻く

ぎゅつと掴みボイと捨てたのは女

かけつこのピリのうちの子ぎゅつと抱く

へそくりをぎゅつと握つて妻旅行

原発は金の成る木を放さない

これで良しぎゅつと檸檬の一搾り

おむすびを握り通したボランテア

手の内の切札汗を帯びてくる
胎動へやさしくぎゅつと岩田帯
丸めてぎゅつと部下の失敗買う度量
好きですを埋め込むようにぎゅつと抱く
もうぎゅつとはこないけれどもフルムン
まだぎゅつと賞味期限の切れた恋
抱きしめて哀しみ吸うてあげるだけ
評論家ぎゅつと掴んで種を出す
国民の拳見えない永田町
ケアホームぎゅつと掴んで帰らせず
飛びぬようぎゅつと私を抱きしめて

完 次

賢 子

希 久 子

直 樹

か ず お

求 芽

和 夫

葉 子

善 純

耕 治

弘 一

保 州

蘭 幸

恵

弘 光

瑠 美 子

理 恵

寿 子

地

息も出来ぬハグ久方の花吹雪

おまじないぎゅつと夫の手を握る

天

握りしめすぎて幸せワヤにする

軸

扶 美 代

兼題「白」 奥田みつ子選

白百合に硬骨漢も癒される
金で洗うと黒がみるみる白になる

則彦
としお

兼題「合図」

小島 蘭幸選

白い御飯ぬまで飽きる事はない
妻からは白紙委任を書かされる

武臣
弘風

孫一歳このまま白でいて欲しい
純白な目で見る子供欺けぬ

隆彦
満作

合図してバスが止ったのは昔
のんびりと春へノックの象の鼻

キヨミ
洋

母の忌におはようと咲く白椿
白を黒にする捏造の恐ろしさ

哲子
千枝子

48年白を通して来た風
かなわなない願ひせめての白昼夢

弥生
大子

薄味は妻がサポートする合図
羽化間近風の合図を聞き分ける

求芽
耕治

過労死が残した余白ない手帳
本人は白と一番知っている

正雄
たもつ

真っ白に少し気後れしています
にっこりと風にささやく白つばき

柳昌
幸

精一杯の叫びなので不登校
シンプールの合図で妻が呼んでいる

保州
瑠美子

みどり児のまっ白な地図無限大
純白のドレスに父のふと未練

(矢)五月
宣子

いつまでも白のままでは生きられぬ
しがらみを捨てると真っ白になった

能子
朝子

断崖のサイン謎解きが始まる
背を押すサインはきつと千の風

眞澄
朝子

追伸の余白に本音ありつたけ
白魚の透ける命よ母白寿

黒兔
一歩

水仙の白の貫く生一本
白い地図彩りました桜いろ

朝子
幸泉

誕生の瞬間待っている狼煙
小窓少し開けているのが合図です

朋月
わこ

わたくしの元気の素は白い飯
美人より美人に見える齒の白さ

忠昭
唯教

白地図を渡す息子の巣立ちの日
青春の白いページに浮く蹉跎

克己
富子

ノックなくえん魔はふいにやってくる
眼とあごで動いてくれる人と居る

公誠
見清

優しいなあ優先席の白い杖
あるがまま生きると決めた白い髪

武彦
美津子

まっ白な未来図詰めたランドセル
白い記憶光と陰に包まれる

葉子
かずお

閻魔からの合図にはすぐあつかんべ
思春期ののろし受け取めねばならぬ

楓葉
完次

あちこちで今日も命を包む白
診断の白が人生変えました

弥生
千代

名人の墨絵余白がモノを言う
修正の白さ気になる娘のたより

キヨミ
紀乃

女から目くばせ首筋が寒い
んにくとドリリンク置いてある合図

楓葉
紀乃

石橋を叩くと白い風になる
ギネスを狙う白寿の皺の意気

(久)千代
よしみ

修前の白さくら妖しい白まとう
散る前のさくら妖しい白まとう

紀乃
いさお

席立ったのが合図だと後で知る
斜めから憧れ狙い撃つ輪ゴム

楓葉
寿之

新しい命はぐくむ白い帯
まっ白になるまで晒そこの邪心

賢子
柳昌

優しそうに見えても白は頑固です
地

紀乃
いさお

億光年彼方の星の出す合図
何となく合図があつて母は逝き

楓葉
洋

白旗を揚げて女房の言うがまま
着メロが鳴って白い目浴びせられ

玄也
希久子

真っ白い大根土に染まらない
天

いさお
代

平凡な主婦にくぎ煮の合ことは
ウインクとばかり思っていた合図

公誠
代

余生まほろし白いページが続く
お人好し白を切つてもすぐばれる

希久子
壽美子

白い花個性それぞれみんな好き
軸

代

ポックリ死合図なくとも来て欲しい
日の出

公誠
代

どの色も白の無垢にはかなわな

俣子

代

日の出

合図したように焼け跡から芽生え
OKもNOもサインは妻が出す
春雷が頭上で励ましの合図
またひとつ妻の合図が増えました
手術した医者がつこりVサイン
起きたくはないが五時には五時の音
男みな妻の合図を待っている
法廷を駆け出してきたVサイン
子の頭越しにブロックサイン出す
地に還る何も合図は要りません
何の合図か分からないけど行ってみる
終業ベル喉が条件反射する

とーな
かずお
求芽
善純

真澄
修
たもつ

たもつ
俣子
武彦

たもつ
義
茂

佳
玄也
真理子
アキ
日の出
奏子

完司

義

人

地

天

軸

合図でしようか句碑建てて句集出す
前ぶれもなくかあさんが消えました
木本朱夏

句会 燦 燦

3月句会を読む 井 上 一 筒

静いの間沈んでいた金魚
父と母の喧嘩の間、耳を押さえて物陰に潜んでいた。水槽の底に沈んでいたのは、あの頃の自分の姿なのかどうか。
一度見においでが霞網でした
五月

日常の生活の中には大小の不条理なものがあつて、繰り返しながら身を縛ってくる。今はもうほとんど見かけなくなった「霞網」。この古典的な語が句の中で光っている。
耕治

二次会になってからは座が乱れにみだれ、幹事もへべレケになつてしまった。ところで、ビールさえ飲めないあの男がなんでこの場で若輩の背中を摩っているのだろう。人間はまことに謎である。
アキ

ジエラシーを攪拌玉子焼きにする
美味しい厚焼きが仕上がった。鶏そぼろと青ネギの混ぜ込み焼き。わたしの妬心を隠し味にして。さあ召し上がれ。
「攪拌」という硬質な語をあえて組み込んだ新鮮味。
富美子

大和路を往けば私はもう卑弥呼
晚酌の止め役いらないから怖い
2句並べて鑑賞するとなお興味深い。人間の変身願望。前者は古代の女王、後者は呑み助に。今日は何者になつて居られるとかか。
朋月

見学の果ては陽炎立つ岬
さ迷うて、やっぱりここへ還つて来た古里の岬。
犯人は地味で穏やかそうなる
もう一人のヒゲ面で目の鋭い人は、唯の民生委員さんだった。
泰世
真理子

前掛けは作り酒屋のユニホーム
前向きが挫折の度に太くなる
掴まれる前に尻尾は切っておく
前年の日記帳から錆びた文字
怖いもの知らずが前へしゃしゃり出る
じれったい私に影が前を行く
靴を見たまいいつでも前を向いている
目の前に箸と茶碗と朝刊と

川柳塔打吹(鳥取)

牧野 芳光

指を立て私に似合う風さがす
戦争のページに指を触れている
指切りをしたはずなのに先に逝き
しゃぶつても減らない指で愛補給
喧嘩あと指から愛がこぼれ落ち
ねえマーン指たらなけりや貸します
指切りをしていないのに春は来る
神の化身かマジシャンの白い指
司会を指をさされてたじろいだ
小指ほど言つて税金むしり取り
今弱音はくと野犬が飛びかかる
飲むだけで瘦せると急所突いてくる
ニコチンの弱い煙草は値が高い
弱いからヤケ食いもする酒も飲む
弱腰とせめぎ合いつつ生き延びる
草食でひ弱な彼はベツトです
金に弱い地位も名誉も吹き飛んだ
北風に言葉の語尾が弱くなる
高校に不合格でも道はある
健診の結果はよしで祝い酒

昇 ひろ子
菜摘 きく
みつ江 和子
保州 和子

耕治 石花菜
美代子 野蒜
紀美恵 道子
陽之助 節子
美美子 滋
重忠 紀の治
玲坊 公恵
和子 義人
たけ代 美知江
悦子 重利

合格だ定員割れの広き門
スイッチで愛のきずなを確かめる
脳天にスイッチ入れた初句会
スイッチが入らぬうちに押し出され
スイッチオン押せば広がれ春の音
スイッチが切れて話が噛み合わぬ
スイッチが入って解けた五七五
スイッチを入れたら地獄門が開く
オンとオフ使いこなし年の功
涙腺のスイッチへふと触れそう
スイッチオン過去が雪崩になつてくる

竹原川柳会(広島)

古田 太虚報

なにかも洗って干して娘は帰る
洗車する恋をしてるといふことか
拍手を打つ手洗い念入りに
入院の妻が洗っていった鍋
洗い清めて神様に逢いに行く
ボケ防止て声人語書き写し
果てしなく続く原野だ夢砂漠
ロングセラーささえさんにはかわない
継続は力と好きな川柳を
脈脈と時を刻んで米作り
夜ごと続く母の祈りの百度石
二月も春だ春だと小鳥鳴く
二月の花壇じつくり春を充電中
くじけるな二月の円い母の月
梅蕾しずくのようにある二月
寒いねと話はずんでいる二月
家計簿のやりくり二月黒となる

岳人 久芽代
善江 貴恵
幹啓 龍清
照彦 三津子
芳光 くに子

房幸 蘭舟
静風 笹舟
笑風 半徳
規代 敬子
汎美 弘子
寛 栄恵
幸子 淑子
京子 輝力
恵

寺川 弘一 選

上向いて歩いてごらんほらひかり
思い出の人いつまでも年とらず
輪の中で正しく生きてきて孤独
いたたまますごちそうさまのよいリズム
正論を吐いてむなししい風に会う
真つ白な明日があるから生きられる
いい風が吹くまでマスク外さない
見栄張つてみても等身大の影
自分だけなんだか歳を早くとる

佳句地十選

(4月号から)

長浜 美籠 選

願い事一つにしよう初詣
ライバルと火花散らした頃が華
束の間を一緒に歩くだけでいい
百行の記事より一枚の写真
深呼吸して決断のドア叩く
真つ白な明日があるから生きられる
生き甲斐がじわじわ預金食い荒らす
酒ちびり今夜も砂を吐きながら
いい顔の写真一枚決めてある
私の胸にまだ一握みのマグマ

朝子 放任
集一 高鷲
敏子 典子
千代 初音
洋 銀杏

歩美 寿之
理恵 真理子
無限 無
典子 霜石
紀の治 美恵子

雪の瀬戸観れるチャンス待つ二月
節分の鬼は父より母がいい
夢の中二人の母に怒られる
福は内我が家に鬼はおりません
大寒へ降りて来ました笑い神
湯たんばを復活させるエコの知恵
努力する過程がきつと金メダル
春を待つ心にふつと浮くお顔

松露川柳会(鳥取)

山本 正光報

安泰ときめるのはいつ迷います
新築に安泰折願木の香り
安泰に暮すわが家の灯がともる
子も孫も居てくれ我が家安泰だ
貯えてゆうゆう老後送りたい
安泰は生活孫へ安堵した
ゆるがない大黒柱安泰だ
安泰へ昭和の戦残す影
安泰に暮して今日も出る笑顔

城北川柳会(大阪)

近藤 正報

押しよせる波にも似てる消費税
一パーセントの望みへ賭ける千羽鶴
波風を立てて喜ぶ天邪鬼
サスペンス台詞の長い崖つぶち
無駄にすな神の配りし命なり
懸命に生きてもしもは考えず
ざりざりとノルマの壁が押し寄せる
赤福の過去は問わない長い列
宅配の料理独りは味気ない

慶子 千代美 歩美 厚子 栄香 史子 一路 弘子 公美枝 鈴枝 豊枝 和代 静江 智恵子 正光 雄々 美智子 賢子 高志 洋志 集一 宏 武彦 公子 克己

幸せを配る笑顔が美しい
配給を聞いて戦後がよみがえる
自惚れが過ぎると雪は赤くなる
柔肌を眺め波打つわが命
聞こえない耳が作曲する不思議
札束の波もジユゴンは拒否をする
子に愛を配り続けた母の骨
三猿で波風立てぬ中に住む
点滴のざりざり確と命の灯
そばにいて優しい波動感じられ
近くまでは貯金ざりより持ちそうだ
ざりざりの値段ですよしたり顔
ざりざりまでじらす女のテクニク
ざりざりになれば何とかなるわいな
エプロンをつければ妻に隙が出来る
北風にリハビリの試歩たじろがず
待ち合わせ後十分で諦める
拉致された子の溜息か北の風
北風は心の隙間容赦なく
豹柄が配るナニワの温い飴
あこがれは五段飾りの出来る家
「ありがと〜い」の弾ませ今日も生き
北風に赤児を包む母の胸
お隣はときどき不味いものもくれ
よくできた人は全局目を配る

川柳塔まつえ吟社(高根)相見 柳歩報

朝子 昭弘 柳坊 堅坊 倫子 一歩 義昭 志華子 麗 林香 実子 栄子 典子 和夫 千恵子 修 縣笹 直樹 弘風 野鶴 郁夫 勝弘 正

淋しい日ガラス割るほどガラス拭く
ガラス戸の向こう笑顔の朝が呼ぶ
おはじきを透かせば見える幼い日
ガラス戸の向こう麗なシルエット
カードでは買えぬ命を一つ持つ
懐のジョーカーいつか出すつもり
ジョーカーが居眠りをして出そこなう
七十三歳ドナーカードはダメですか
パパ抜きのカードが熱くなってきた
プラチナのカードを貰い鳥になる
気休めとわかっていてもすがりたい
脳味噌に君は若いと言つてやる
病む身体気休めに見る地図の旅
気休めはいらぬと母は丸く生き
宅急便どつさり母の小言入り
どつさりを背負つて潰れかけている
どつさりの中から選ぶ真の友
どつさりと愛をもらつて子は巣立ち
どつさりの底の方から腐る音
雪ぶとん野菜どつさり春へ夢
どつさりと貯めた途端に不眠症
どつさりと歳を重ねて星になる
リルケの詩少女の夢の続き追う
転んでも夢はしつと胸の中
この歳で夢を捨てずに生きている
ニヤニヤとまたニヤニヤと夢がよい
夢の無い話ばかりで苦い酒

川柳塔なら 坊農 柳弘報
ライバルの影がだんだん遠くなる
いさお

先輩のおごとりとわかり酒追加
感動の拍手拍手でアンコール
ありがとう一言追加心地よい
ガラス越し隣の家の灯はぬくい
新聞に開くと並び出すラーメン
割り勘と聞いて注文追加する
追加した地酒くどくどお説教
老木ももう一花を咲かす気で
がっちり二人三脚影と僕
血圧を考えるビール追加する
一寸だけ頭を出して叩かれる
説教をされてる影に耳はない
長生きのおまけを貰う迷子札
オーダーがストップされて時間知る
いやいやの影を宥めて連れ歩く
満足を紡ぎ出して目の高さ
薩摩切子櫃の隅へもう一つ
真心をそっと追加のおもてなし
さよならの向こうで面影が笑う
多数派がひとり影までが薄い
黙祷がまた深くなる同期会
エリート影を引きずるホームレス
僕の心透き通るまで拭くガラス
あれ以来ババの動きはガラス張り
ラムネ玉みたいな人という疲れ
ときめきを隠しきれないガラス窓
生の道死の道ひとり風を出る
ちぐはぐな影で泳いでいる野心
私の影から逃げていただけか
その先は修羅は語らぬ磨りガラス

おたか 博一 次郎 萌子 比呂志 郁夫 将文 寿之 紀雄 弘風 孝子 成子 勝弘 克己 堅坊 理恵 辰雄 柳弘 ダン吉 順啓 良一 富子 恭昌 柁子 惠美子 隆盛 美智子 真理子 仁

悔しさがふつふつにじみ出る背中
追加した言葉に本音詰めてある
疑いをもたれはじめたすりガラス
光りなさい私が影になってやる
川柳ささやま(兵庫) 北澤 稠民報
縁談もちらほらとあり畳替え
好きな道意地にかまけて終らない
ささやかなオシャレエプロン水玉に
神仏とご縁深まる母子手帳
涙してきた法話もその場だけ
起きぬけの温度計みる春よ来い
気の利いた料理は不得手あしからず
縁あつて夫婦茶碗と白寿まで
口下手も聞き上手で輪に入れ
三人三様得手父を継ぎ母を継ぎ
発言へ意見纏める脳不動
目に見えぬ心の杖が身を守る
エプロンが一日を仕切る大家族
得手不得手助け合ひしてわが暮らし

怜依子 朝子 完次 國治 久子 美緒子 純子 哲男 稠民 美紗子 真由 多美子 開子 可住 幸子 照代 美智子 富柳(会大阪) 古田 千華報

忘却のページに薔薇の香が匂う
アリバイに土産を買った一人旅
信じたくないから賢気楼だろ
今更をガラスの底で掻き混ぜる
お愛想のひとつと宙に浮いている
日進月歩恋は小さくなりました
花道も闇も知つてる再生紙
ひとりとはこんな物かとひとり言
無から無に心が澄んでゆくひとり
殿で馬鹿を見るのは私だけ
手段等必要なしとする始末
相応の輪で乾杯のワイン会
ふるさとの海は私のハンモック
何げない素振りで見せる子の躰
落ちこぼれの実を一族の根が守る
朝の冷え山に錦を着せに来る
古時計妻がネジ巻きや動き出す
アルバムをすぐに忘れる母と見る
雨垂れの向こうに愛の走馬灯
一言に殺し文句が見え隠れ

紅紫朗 常男 奏子 慶子 ダン吉 アンキ 千恵 登子 惠 壽峰 壽之 清 高鷺 澄子 信子 彦次 静子 武人 森子 茶子報 茶子 孔美子 鈴 盛桜 恒 咲和 西和 すみれ 茶子

微温湯で急所を突かれ目を覚ます
椅子取りゲーム愛とはこんなかたかな
面を取れそれから話し聞いてやる
深いとこ突くと壊れてゆく心

暮敵はバツサリやらすそつと突く
押売りの怖気を誘う面構え
我がなき後の風景を描いてみる
風呂敷に包んだゲーム拍手され

輪になって握りこぶしで天を突く
聞えるもつと近くなる語そうよ
道幅のもつと淋しくなる余生
ゆらゆらとゆれる心を突きにくる

永らえて面の皮まで厚くなる
お面より地顔の方が別嬪だ
疲れてもゲームじゃないと生きて行く
画も軸も床で一世紀を語り

人間をもつと続ける紙オムツ

津守 柳伸報

南大阪川柳会

少々のゴシップ少しは人気出る
ゴシップの主役は実は私です
アンネの日記破るニュースが恥ずかしい
カルチャーは覗く程度でみなやめた

七十五日我慢をすればいいことだ
覗いたら財布の中は論吉留守
手の内を覗かれたのか負け試合
覗かれて隠したくなる下手な文字

冷蔵庫覗いてかいま見る暮らし
底なしの沼と言われて覗きこむ
ペランダの望遠鏡が怪しまれ

弘子

美ツ千

小鹿

宣子

照彦

実満

螢

八重

満

かおる

富久江

みさ子

美佐枝

蟹郎

和子

惣子

いさお

更紗
いさお
一歩
灯子
弘泰
庸佑
寿美子
なぎさ
実
勝弘

人だかり背のびして見る好奇心
鍵穴を覗けば鶴が昼寝する
お銚子を覗いて見ても空は空
鍵穴を覗いてからはただ無言

眼裏に昔のままの僕の街
餓鬼大将惚ぶ郷里秘密基地
帰って来い村は祭だもうすぐだ
高齢者ばかりになっている郷里

故里に心を許す川がある
ふる里は市に昇格も山の奥
かゆいなあ隔靴搔痒あかかゆい
はがゆいな弱身を狙う詐欺の口

痒み去り恋の瘡蓋春を待つ
嘘つく舌の先からかゆくなる
熱爛で冷えた夫婦も仲直り
気が晴れた五曲唄った喫茶店

上と下釣合をとる靴磨く
大阪のおばちゃんバリで値切つた
梅一輪春はまだかと雪に問う
スクープへ耳が大きくなってくる

春が来たまた翔ぶつもりロビール
言い切りするたび背なりが寒くなる
思い切り笑つて毒を吐き捨てる
ほどほどに濁つた国で住みやすい

川柳塔唐津(佐賀)

仁部 四郎報

倒産へ支援はこない町工場
あの頃は長女に何もしてやれず
好きな人出来たのかいと母が訊く
俄か雨傘差し掛ける人もない

直子

郁夫

篤

紀乃

恭昌

柳伸

ばっは

ルイ子

たもつ

克己

和雄

タカ子

歌留多

楓楽

あさ子

柳右子

東風
忠昭
弘子
典子
志華子
栄子
集一
昌紀

開けられぬPM2.5窓の外
明暗と自分史の題すぐ決まり

川柳塔さかい(大阪)

村上 玄也報

もうちょっとバストあつたらグーなのに
割烹着ばりばり仕事したはるな
鏡にすれば不服言われる筋はない
女主去つて鏡の曇りがち

とうに亡い父の仕事をリフレイン
バリバリとやつた頃は浮気した
ばりばりの中学生がメタルとる
ああ虹だあのばりばりの置き土産

めかしこみチャリ目をやるウインドウ
ばりばりとこなしたスーツ形見分け
バリバリの軍人でした小野田さん
1寸の母ちゃんいつも割烹着

ばりばりのキヤリアを持って青テント
瘡蓋をばりばり剥ぎに来た噂
突然に知恵が廻らずリンゴむく
ブスですがスタイルだけは苦勞する

試着してパンツの裾を切つている
下書きを破る焦りその後悔と
自己流を磨きゆずらぬものを持ち
有頂天醒めたビエロの水鏡

ばりばりの江戸っ子の妻京おんな
ばりばりの大阪弁で値切つてる
現役のばりばり四十銀メダル
格好がブランドに負け野暮になる

バリバリのシーツ寝付けぬ旅の宿
ばりばりの検事もたまたま下手を打つ

節郎

四郎

月子

半銭

時雄

愿

あきこ

清

一文

清

永

清

世

紀

子

としお

朋月
和夫
日の出
舞夢
八千代
五月
好

徹一
倅子
さくら
健吾
唯教
澄空
わこう

老木も時を忘れず新芽吹く
芽吹くとき山笑つてる声がある
春近し恋の芽生えの鳥の声
路の臺アベノハルカス春競い
汚染地と呼ばれる故郷路のとう
若い芽がはつらつとして金メダル
真央ちゃんの滑りが誘う湧く涙
ホワイトデーなんと私に割烹着
なななんと何年ぶりか妻の酌
なんとあの餓鬼大将もはや米寿
お互いを探り合うより信じ合う
ラジオ体操朝一番の時間割

川柳塔わかやま吟社 川上 大輪報

紀州雑わが家を守る春の宴
春ですね熊を起こしに行つてくる
賛成を急かせる風がきな臭い
私いま賛成か不か悩んでる
賛成の裏を返せば私利私欲
賛成をしてから自分見失う
賛成の挙手の重みを知る会議
ばやいたら晴れる夫を聞き流す
ばやくより思い直して福を呼ぶ
腹の底からばやく元気に生きている
スーパールの見えない棚でばやく飴
夫婦仲ばやく漫才円満に
薬局は嫁の愚痴まで聞いてくれ
ばやいてる割に焼き肉よく食べる
満月に吠えるオプジェの目が光る
一夜して雪のオプジェに感嘆符

順子 正子 長一 柳童 春代 黒兔 郁子 久子 幹治 美智代 勝代 大輪 泰女 幸美 紀子 紀久子 なる子 富美子 秀子 寿子 まさみ 佐一 保州 英子 精子 克子

オプジェから動き始めた好奇心
流水のオプジェに育つままの冬
日も口も閉じて巷を聴くオプジェ
心を形にしたらオプジェになった
オプジェより主張している靴がある
ほのか

八尾市民川柳会(大阪) 土田 欣之報

空白の時間に潜むミステリー
まごころを投げて返つてくる誠
掌のやがてに今日も水を遣る
僕の脳出来る事なら初期化する
飛べや飛べ蝶は私の道しるべ
シグナルは青青青のゴーサイン
出不精を祭りの笛がつれ出さず
待ちわびた春へ危介ものが飛ぶ
不精者では困ると言うた千の風
飛び切りの笑顔何よりおもてなし
不精髭じよりに刺つて春を呼ぶ
ソチ五輪レジェンド成つて銀メダル
ストレスを仲間と飛ばす縄のれん
淋しいような嬉しいような妻の留守
合掌のかたちに曲る母の腰

和香 あきこ 小雪 夕胡 寿之 清 惠 紀雄 慶子 賀世子 常男 賢子 高鷲 朝子 壽峰 安男 耀一 欣之

日傘射すテルテル坊主ついで来る
心情はわかるけれども許せない
金メダルだけを目指してきた涙
訓練を終え人となる介助犬
私の気分しだいの晩御飯

川柳茶ばしら(愛知) 関本かつ子報

着る服に困るおいでという話
おいでなさい美女はいつでもウエルカム
満開ですしかしおいでと書いてない(矢)五月
もうちょっと練習したらまたおいで
優しいね胸がドキンと鳴るおいで
我仮な地球に誰がしたのです
自慢話いやという程聞かされる
うんざりも笑顔に変える処世術
キャンセルが続く世役屑落とす
自分でもうんざりしてる気弱です
見るたびにシミ皷白髪増えている
うんざりやぬるいラーメン食わされる
夫婦仲うんざりしつつ五十年
謎めいた人と寄り添い謎のまま
宇宙の謎人類の謎残したい
謎めいた女が魅せただましうち
ひとつまみ塩で甘さが増す不思議
妻宛てひんばんに来る男文字
謎めいた言葉発する孫一歳
謎多き世界遺産にあるロマン

ケンカした顔お化粧で消してゆき かつ子
川柳大阪 森松まつお報
かずお 公平 まつお 柳昌 信醉 美花 朝子 紀雄 勝弘 一歩 司功 堅坊 蕉子 美濃 温子 万紗子 珠生 善純 柳弘 千代 芳香 美世子 奥五月 茂

此処だけの噂一巡して謎に
終章は謎のまんまで終わりたい
カラオケも奇妙な声で盛り上がる
太極拳奇妙な動ききょうさんで
私より若い母さん父の妻
うつ伏せに転けて鼻だけ怪我がない

ロース川柳会(兵庫) 龜岡 哲子報

白い花手に鎮魂の長い列
花の下いかなお洒落もまけている
家の横野原があつて紙芝居
月の夜に昔の風が吹く野原
春の酒よろしき程に浮かれけり
かげろうが野原を花の園にする
闘病の日々一輪の花と耐え忍ぶ

わかあゆ川柳会(鳥根) 松本はるみ報

晴れてよし帰りは傘を置き忘れ
さわやかに氷上を舞う若き等よ
人生がここまで長いものだとは
言訳も上手になった古狸
七分咲き明日はきつと晴れるから
春よ来い花見の予約取ってます
噂など気にせず今日もマイペース
門限に時たま小さな嘘もつき
新風となるか住みつく大阪弁

あかつき川柳会(大阪) 山本 柳昌報

大自然に逆らいヒト科再稼働
ジャンボ機の南の海の神隠し
再稼働安全神話また作り
恥を知る言葉忘れた元市長
紙風船垣根を越えて来たロマン
風船に子供の笑顔ふくらませ
風船の顔活き活きと春の空
女が女に嫉妬とは姦しい

みつ子 義子 藍子 哲子 年代 いわゑ てる
安子 澄子 はるみ 好栄 恵美子 ちよえ かつ子 昌

来世には女に産まれ母となる
捨て台詞吐く度おんな強くなる
雄叫びも知らんぶりする避妊猫
終電車やはり女は去ぬと言う
女房をオイと呼ばずに姫と呼ぶ
オバサンが力あわせて市長おろし
男で乗って女で降りていかはつた
マドンナの訛りもよろしくラス会
襟首を空かし女を主張する
人間の才智平和をまだ解けぬ
解けたのかあきらめたのか出る答え
あれ以来悲しみ怒り解けません
ミステリー謎解ける頃夢うつつ
緊張がほどけたばかりかいくしゃみ
誤解とけやつと春風軽くなり
解く力あるよと神は買ひ被り
人間が解ける孤独な水になる
解けたか私の顔が出る
わだかまり輪になり呑めば解けていく
勝星で土俵に埋まるお金掘る
心の中掘つてはみても涙ばかり
自然薯を掘る夫いて元気です
ゴシップをうまく掘り出す週刊誌
タイムカプセル掘って昭和の風に出う
掘り下げてより難問になつてくる
憲法を裏から掘つて蔑もう
掘り下げる議論を待ち受ける妥協

勝弘 信二 たかこ 穩夫 忠昭 一志 哲男 秀夫 隆昭 信子 紀雄 いさお 見清 直子 すみ子 丹吉 大気 克己 英夫 美智子 かつ美 和雄 桃花 紀乃 のぶ久 祥昭

最期まで覚えていたいわが名前
再会の握手守れぬ計の知らせ
馬鹿なことを言うなど火種消してやる
儲かると云われ断るあまのじやく
握手して二度と会わないサヨウナラ
昼寝して深夜のドラマ視る仕度
一旦は握手した手をもじつと見る
ゴミの日に要らぬプライド捨ておく
忘れ得ぬ十五の春の初キッス
さりげない握手無言の響き合い
風呂屋さん富士が見えと値上げする
肝機能気に掛けながら今日も飲む
覚えています楽しい恋の祭り笛
リトマス紙顔にすべてをさらけ出す
灰色はどんな色とも妥協する
盗み酒ビンを間違えお酢を飲む
握手ついでいな心に灯がともる
欠点の多い人ほど好きになる
元氣そう取り留めもない母の文
覚えてることが線から点になる
好きですと言えず握手して別れ
握手してから気になり出したあなた
公立か私学で悩む親の脛
百歳は幸せばかり覚えてる
幸せに格差は問わず無事暮らす
言い勝つて心に風が吹き抜ける

豊中もくせい川柳会(大阪) 藤井 則彦報
外人と握手しながらついでお辞儀
三陸の弥生の風は鎮魂歌
よたよたと参加楽しい元気出せ

正彦 長柳会(大阪) 坂上 淳司報
マサ

道の駅買った土産は栗ごはん
鬼気迫る剣豪武蔵果し合い
ハルカスが弥生の空で誇らしげ
正論で追って受けた向う傷
締め切りはリタイアしてもついて来る
割烹着夢に迫るも崖つ縁
ひとり暮らす過疎地の母は凜として
被災者が肩を落として離村決め
子の行く手楽なぶっつ独り言
五七五いつともなふつ独り言
羽ばたけと学舎の窓に卒業歌
手間かけた花の蕾が背伸びする
手間かけた割には合わぬ子の育ち
久しぶりベースアップの笑い声
遺言書き腹くぐる手術前
和の遺産手間に深みが出る料理
尻に火が付くも少子化無為無策
へば将棋まわりの者が攻めを指す
じんわりと笑顔で迫る横車
迫り来る天国からの招待状
雛祭り分かれた史に並べられ
弾痕のない戦後史に迫る危機

たけし
もこ
幸子
正博
辰男
久美子
克三
ふみ
一文
隆彦
登美子
和代
孝代
ともこ
三和子
弘光
芳野
靖博
正子
直樹

老の夢絵馬に託して天拜む
ひたむきな願ひ通じて絵馬光り
ライバルの吊つてる絵馬の上に吊る
偏差値がぎりぎり絵馬に賭けてみる
小さな子絵馬に大きなハート書く
千の絵馬千のドラマを抱いている

一湖
花匠
慕情
黙人
小とみ
小とみ
島

川柳塔みちのく(青森) 稲見 則彦報

うすうすは覚悟していた肩叩き
追伸の中にうすうす金のこと
本心を分かっているもまだ狸
ライバルに作り笑いを見抜かれる
人間の性です虚飾すきである
インタビュ飾るメダルに苦勞あと
皆勤の賞状飾り祝い膳
役目終え飾るもの無し責めも無し
古傷が花を飾らぬ安堵する
MRIあれって思う黒い影
会釈され記憶の隅をつついてる
目覚めれば違う景色の中に居る
明日まで持ち越しません口喧嘩
命綱縮んで伸びて朝ご飯
古傷の跡に浮かんだ水溜り
情染みてきた頃別れるフライパン
この先に老々介護という関所
夫より長生き誓う世話女房
薔薇と鬱書いて自信を持つ老人
クラス会傘寿になつてまだ続く
勤行の無心を破るベルの音
孫を抱く顔はいつとも違う顔
慌てて妻の小さな泣き黒子
片減りの靴が合図の妻帰る
剪定を極めて咲かす桜守り

美鈴
井蛙
龍馬
ひとし
のり子
吞舟
つとむ
隆樹
柳一
則彦
則彦
芳生
霜石
氏加子
花峯
和香子
ふさゑ
洋子
一花
雅城
きよし
龍人
五楽庵
綾子
初枝

川柳藤井寺(大阪) 鴨谷瑠美子報

出直し選無駄訴えて無駄になる
民意無視補助金削り選挙戦
マスコミに踊らぬ選挙してほしい

紀雄
絹枝
瑠美子

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造報

記事に載り俄然身辺さわがしく
ほっといて欲しいと思う記事もある
嬉しい記事活字たしかに跳ねている
春の記事私を酔わす花だより
内戦の記事下敷きに切る足の爪
片すみの記事から愛があふれだす
ローカルの記事にちよびり里心
原発事故だんだん記事はうすくなり
嬉しい記事読んでほっこり喜寿の朝
新聞に載って隣りの人と知る
川柳が活字で成って恥ずかしい
極楽も地獄も新聞記事になる
モカの香にポイントなどは無くてよい
診察券ポイント制にしてほしい
ポイントに真赤なボタンつけてくる
ポイントを稼ぎに猫が膝に乗る
ポイントの見えぬ選挙かすむ春
悪友を笑わすポイント知っている
答弁のコツはポイント外すこと
肩凝りのツボへどっさりもぐさ焚く

清之
美代子
扶美代
婦美枝
六点
フジ子
光男
喜代子
ヨシ枝
シルク
アヤ子
悦生
弥生
龍一
信二
キーキー
シマ子
英夫
いさお

耳すまし風の音ききき作句する
素つぽんは僕しか知らぬこれも愛
真夜中に命の時計鳴りひびく
がんばつてみよう私が見えるまで
縄文の杉に命の音を聞く
窓際の椅子で雑音やり過す
一つずつ淋しさ抱いて群れている
ぞうさんとヤギさん残し翁逝く

紀華
一徳
遼子
忠直
秋果
淑子
キヨミ

誘われて女仮面をつけかえる
骨太にして下さいと神頼み

スツまで落選以來しよほくれる
ひとつだけお願いがある春の宵

しよほくとも昔の貴方を知ってます
間に合えば絆今から縫い合わす

春色に染めたい余白まだあまた
もう一度夢路に亡母の子守歌

しよほしよほと決めた三回忌
芽が出たよ命のバトン受け継いで

試着室スボンがやけに長すぎる
球根に夢を信じて華を待つ

しよほしよほとあんたみたいなやな雨
まだチャンスありそう古稀の窓は春

ベテン師が電話で誘う誉め言葉
探梅や母に膝掛け車椅子

ポツクリと願望するが白寿です
寝たきりは嫌でポツクリ寺参る

お百度を踏んでる素足いじらしい
蝶々になってみたいなさびしい日

しよほしよほの気持ふつ切るギアチェンジ
戸をビシヤリ閉めて残ったサイレント

断捨離も遅々と進まぬ冬の底
不老不死実現すればソツとする

失恋にしよほしよほ雨が追討ちを
しよほくれて声にならない喉仏

川柳花の輪(大阪) 岡本 薫報

五十年経っても母校寄附募る
勢いで乗って告白失恋す

穀 子

歳 子

哲 男

ひとみ

豊 子

恭 子

弘 子

文 香

利 子

り 子

茂 子

晶 子

宏 造

千 代

武 臣

美 津 子

みよし

朋 月

じろう

わ 子

光 子

盛 夫

美 籠

乗り替えのチャンス窺う風見鶏
サクラサク孫からメール踊る文字

遅咲きも立ち枯れもある同窓会
花いっぱい咲いてほしいと種をまく

梅一輪咲いて賑わうお隣さん
つれあいは桜咲く頃そわそわと

乗る乗らぬ免許返上迷う老
チャリンコがふらつきはじめ歳を知る

頑張って四年後咲かせ沙羅の夢
ライバルが減って孤独の闇に乗る

老いの夢乗せてお腕の舟をこぐ
岸和田川柳会(大阪) 佐藤 幸子報

老いの身のスキップ持っている小石
法律に明るい人が犯す罪

スキップの輪の中に入りたい車椅子
手を止めて虹に見惚れる作業服

初期化からスキップして追いつける
原発をなくせばメダルあげましょう

きつかけがあれば燃え出す喜寿の意地
燃え尽きて賞味期限の過ぎた僕

虹の橋渡って亡妻はどのあたり
風上で無党派層がよく燃える

野焼き後に若草萌える蔵待ち
燃えつきてそれでも拳固くする

性格が明るい嫁で波立たず
嬰兒の明るい笑みに場が和む

この歳でスキップ踏んでいいですか
若い頃理想に燃えた日もあった

トンネルを抜けると虹が待って居た
紀 雄

楽 鬼

敬 子

薫 子

柳 一

一 幸

あや乃

みちる

やすの

昭 好

泰 子

克 衛

蛙 城

昭 子

いさお

清 子

香 代

和 美

玄 也

笑 司

仁 緑

信 二

幸 子

お日さまが真ん中にある園児の絵
バラリンピック燃える聖火の影に銃

明るいがどこか抜けてる血筋です
焚火して芋を焼いたはまほろしか

負けるなと虹がアーチの贈りもの
快方に向かう明るい聴診器

消費税明るい部屋も暗くなる
お迎えの腕にスキップして園児

九条を今護らんと燃えている
明るい曲かけて寝たのに怖い夢

スキップから駆け足になる初デート
六 点

誘われて誘って楽し仲間の輪
ハトバスに乗れば心がかよう仲

神さまに許されそうな嘘ならば
許す気でいてもすんなり出ぬ言葉

許さる範囲でちよつといたずらを
許しても許せなくとも罪は罪

一言の許すが言えず自己嫌悪
許したり甘えたりして共白髪

許したら心晴れば妻の顔
許されぬ恋の火種を抱いている

許す度君との距離が遠くなる
カミさんの許したげるは高くつく

悔しさを飲み込みいつか花咲かす
老後にも丸くならない意地を持つ

相談の糸口酒が解きほぐす
ハルカスで下飛ぶ鳥の背中見た

洋 一

政 一

和 宏

武 彦

弘 子

繁 義

盛 夫

浩 司

寿 朗

保 州

英 夫

宏 之

弘 子

洋 子

ひろ幸

正 幸

みつ江

康 信

義 泰

六 点

みつ子

光 久

能 郎

弘 郎

康 子

寿 朗

浩 司

盛 夫

繁 義

弘 子

武 彦

和 宏

要望を飲んで対応立て直し

あたりまえがどこにもあった時代去り

樹も老いて添木の世話になつてゐる

あやまれボケモン見せてくれるママ

お食い初めあすの輝きひた祈る

いつの日もあつて欲しいな、またあした

あすは咲く信じて今日もこの笑顔

明日のためより丁寧と今日生きる

おひ頃明日があるさと思つてた

お帰りとただ言ひたくて待つあした

あすは明日なんとなかると繰り返す

東北にあす吹く風が風るよに

明日には優しい風になれそうだ

終活を急げと天に囁かれ

女盛り遍路無欲の鈴が鳴る

何気ない所作から覗く氏素性

誘つたのは月かそれとも沈丁花

はびきの市民川柳会(大阪)永田 章司報

神様のサインの様な咳を聞く

息子からの電話うれしやだがまでよ

引き抜きの誘ひに心揺れ動く

善か悪気持ゆらゆら決めかねる

咳どうぞ私マスクをしてくれるので

咳をした部屋で孤独を自覚する

ふくらんだ梅の蕾がピンク色

ゆらゆらと鍋の向こうに外は雪

ゆらゆらと私の意志は固まらず

咳出たらおばちゃん館をくれはつた

仲孫の咳の一つで大きわき

樹蔭

加寿子

敏夫

利子

忠貞

洋次郎

文香

宏造

絢子

道子

武臣

美恵子

千賀子

美穂

楓楽

いわゑ

美代子

かつ美

高鷲

フジ

みつこ

雄太

猿杏

久仁子

悦子

さくら

喜久子

長生きし新日本誕生見てみたい

お点前の匠の技を誉めちぎり

空咳でここにいるよと合図する

空咳をひとつ注目されたくて

染め浴衣今から始め丁度良い

帰省子へ母の手料理みなグルメ

咳き込めば大丈夫かともみじの手

旅立ちへまだ決心が揺らいでる

楽ですネ多勢に染まり生きること

電話した君が名乗るの先だるう

咳払いしかと合図を受け止める

腕一杯されど柏汁染まる下戸

インフルは最敬礼でお見送り

川柳さんだ(兵庫)

田中

章子報

花見酒一回分の還付金

増税で一円玉に日が当る

黒電話指の先まで恋をした

簡単なと騙し引き継ぐ村の役

そりやないわ言ひ放題の任せきり

悪事するよにダイヤル式金庫

エプロンがほつればつれ捨てられる

サクラサク猫踏んじやつた隣りから

つくづくと見れば心が二つある

春の月つくづく眺め用をたす

つくづくと老いを感じる帰り道

天下取るはずの夫は昼寝中

亡き母をどなったことが悔やまれる

ダイヤルを合わすとチンと出る夕餉

平成の徒然草をしたためる

敏

喜鶴子

登志子

アヤ子

泰子

ヨシ枝

ちさお

ちづる

ダン吉

庸佑

光男

章司

正和

喜久子

淑子

健二

恭子

耕治

和雄

徹

見

順子

宣子

晶子

雄太郎

光久

哲夫

他愛なく騙し騙され来た小僧

することが無いので酒を飲んで

騙されてみたい気もする女と飲む

金庫に耳当ててダイヤル右左

消費税上げてお国が変わるなら

奥さまの笑顔に安堵偲ぶ会

忘れないうちに税金すぐ取め

予定日を待ちわびていてお腹の子

税務署が親切すぎずわよ嘘付け

良い妻を演じますわよ三日なら

バラリンピック何時の間にやら終つてた

目が覚めて何事もなく有り難い

来年へ寿命を延ばして買うパンツ

うつぶんを晴らす酒にも高い税

生前葬予定通りの友が来る

そうやがてアルバムになる風になる

大山滝句座(鳥取)

新家

完司報

面倒な人だ挨拶しておこう

娘の欠点こそは私のDNA

笑い声小さくなくて二人だけ

晴れた日はジキルで雨の日は Hyde

無理をする頭4回転ひねり

即答をしるあなたは風見鶏

自転車を通らぬ道は天国だ

整然と進む兵士は弱かった

陰と陽神のおとしたひとしずく

お誘いが上手い詐欺かも気をつけろ

知るよりも知らない方に夢がある

仲が良い焼酎党とビール党

ヨシエ

朋月

忠

好文

ちあき

キヨミ

歳子

幸香

武彦

廣彦

雅尚

つな子

一子

俊昭

野薫

ひとみ

紀の治

くにこ

楓花

芳光

芳山

美恵子

石花菜

野蒜

麦青

風露

由紀子

蟹郎

正装の母腕首にゴムの跡
汚染水に日本列島浮いている
春風にルンルン気分盛り上がる
溜め息をついたが寿命へつてくる
お葬式一週間に三つ目だ
蟻の列意地悪をしてみたくなる
認知症自覚ないのが恐ろしい
高速が町に表裏の影落とす
百均に並んで僕も百五円

岩美川柳会(鳥取)

石谷美恵子報

雄大 雄大
けいこ けいこ
松恵 松恵
重忠 重忠
鈴野 鈴野
久野 久野
すみえ すみえ
仁美 仁美
完司 完司

果し状届きネクタイ締め直す
春陽へ恋の花咲くいい予感
瀬戸の稚魚くぎ煮になつてこちそうさん
春の日へ仲良く並ぶ葱坊主
主人呑み助肝臓負担気にかかる
雪解け水のんで少女は蝶になる
初帰省母の気配り夫婦箸
上役の弱み握っている強み
アルバムは嬉しい時の顔ばかり
子に負担かけぬつもり紙おむつ
自分史の何処にも刑事出て来ない
申告に行くバス代は出まへんか
善人の仮面重荷になつてくる
桜咲くいいよ増える税負担
上役は女性どうにもやりにくい
泣き言は言わぬと決めた土踏まず
刑事より監視カメラの目が恐い
上役に色目つこうてみようかな
黒は黒上司に媚を売らぬ雑魚
咳払いひとつで威厳保つ父
コロンポになつたつもりでコレコート
梅が咲き桜開いて腰をあけ
刑事さん目を付けたかて無駄でっせ
巡回の刑事に安堵する市民
並んでる顔顔はくいいしんぼ

寿子 寿子
朝子 朝子
公子 公子
賢子 賢子
忠央 忠央
鈍甲 鈍甲
麗甲 麗甲
祥昭 祥昭
弘一 弘一
郁夫 郁夫
弘風 弘風
修風 修風
洋風 洋風
堅坊 堅坊
仁清 仁清
柳弘 柳弘
博弘 博弘
かすみ かすみ
仁 仁
高鷲 高鷲
銀杏 銀杏
博泉 博泉
美智子 美智子
ルイ子 ルイ子
恵子 恵子

うわさでは古希すぎ次は喜寿のよう
考えてばかりで進まない一步
カラフルな振袖競う新成人
ロシアも白い雪降るソチがある
熊の血を引いたか冬はよく眠る
湯豆腐が一番似合う雪の夜
円満の為です嘘も言っている

京都塔の会

樹本 宏子報

宏之 宏之
未延子 未延子
ひろし ひろし
幹啓 幹啓
公一 公一
紀の治 紀の治
多美子 多美子

草取りができる幸せ春が来る
手間かけた野菜立派な笑顔です
立派な友に囲まれいつも助けられ
歳だけは福沢論吉にも勝つた
蜜の味覚え沼から抜けられぬ
甘い汁蟻もヒト科も寄りがたがる
冬眠で甘えた体立て直す
お力になりたいと言う甘い汁
絆までポロポロになる甘い汁
魚好き魚偏の文字みんな読め
一年が漢字一つににじみ出る
隣国の詭弁に脇が甘すぎる
白黒をつけた甘さの深い溝
作句するお陰で漢字覚えてく
甘い水飲んだ日からの不眠症
崩れたら漢字も人も読めません

川柳やがわ(大阪)

籠島 恵子報

幸安 幸安
たぬ たぬ
忠良 忠良
完司 完司
一瑤 一瑤
節子 節子
菖子 菖子
重忠 重忠
清帆 清帆
蟹郎 蟹郎
圭一郎 圭一郎
茶子 茶子
一粋 一粋
和子 和子
雅子 雅子
美恵子 美恵子

夕暮れの食事時間に句が浮かぶ
立春を迎え雛たち身繕い
急いだら余生の時間目減りする

米子住吉川柳会(鳥取)

渡辺多美子報

登美枝 登美枝
礼子 礼子
正二 正二

感謝することで湧き出すエネルギー
諸行無常たどりついたもエネルギー
飲んだときだけ爆発のエネルギー
味付けに狂わぬ母の自分量
酒の量お湯で増やしたのは下策
高らかに春を呼んでる黄水仙
初入選声が震えている呼名
五輪まで呼ばないように閻魔さん
縄のれん呼ばぬ仲間が先きてる
寿命とて量から質の老熟期
エネルギー枯れても男は男です
散歩道野の花に見るエネルギー
四輪が五輪になった閉会式
銀盤におごることなく滑りきり
ソチ五輪やはり魔物がいましたね
エネルギー途切れぬ母の割烹着
ひしひしと千年杉のエネルギー
エネルギー活かし切れない身の重さ
早起きは一日開始のエネルギー
沙羅ちゃんのきれいな涙もらい泣き
謝らなくてもいいよ勇気ももらったよ

弥生 弥生
和友 和友
欣之 欣之
庸佑 庸佑
牛延 牛延
朝子 朝子
ふりこ ふりこ
五月 五月
森生 森生
英旺 英旺
益子 益子
則彦 則彦
めぐ めぐ
みどり みどり
求芽 求芽
宏子 宏子
廸子 廸子
泰夫 泰夫
葉子 葉子

ハテ誰か呼んだようだと言ふ古希の耳
たつぷりの量に気品がたじろいで
敗北の涙はエネルギーになる
御苦労さま花東までがほっとする
エネルギー満タンにして恋してる
パンジーに雪たつぷりの寒の入り
悦子

翠洋会(大阪) 佐々木満作報

脛の傷秘めた男にある疲れ
重傷と言われただけで血の気ひく
お医者さんもお元気で何よりでした
傷心を優しくほぐす里の山
ときどきは歳を忘れて怪我をする
古傷を撫でると見えてくる答
頑固者少しもあるくなって喜寿
頑固です丸い豆腐は好きじゃない
人生は頑固さだけで歩めない
昔々のことは忘れぬ二度童子
頑固なシミ手入れしすぎてテカくなる
頑固でも過ち直す勇氣ある
積まれても頑と譲らぬ父だった
プロポーズ記憶の中で煙ってる
そのあとは記憶喪失しましたの
指先の記憶に任せ千羽鶴
遠い日の記憶の中にホーホテル
おばあちゃんの記憶に頼るおしちちゃん
喜寿祝い友の一割天国に
亡父を笑う私にもある意地つばり
雪の中チューリップの芽凍と立つ
心配のない日大きな欠伸出る
かずお
弘之
啓子
美佐子
紀華
悦子

捷也
げんえい
義
富子
楓楽
希久子
浩二
すみ子
善之
恭昌
舞夢
公平
満作
弘子
理恵
千歩
志華子
桃花
紀子
みつ子
照子
日の出

大丈夫傷より君の声嬉し
二次会の誘惑がくる友の酌
指ほどのメモリチップで世が変わる
ぼつくりはいや見苦しく死んでやる
道草の数だけ人は丸くなり
眞澄
照

川柳あまがさき(兵庫) 加川 靖鬼報

声出して笑うことから始めよう
家族旅行孫も曾孫も上機嫌
化粧品日焼け対策高くつき
宝くじたまたま買えば大当り
焼きついた記憶の中の梅いちりん
焼きもちもしんどくなった古稀の女
くやしいが弱みを見せず笑ってる
弱み見せごだわり捨てて素っ裸
啓蟄に丸々虫も孤も焼く
写生会初め鉛筆色は後
消して足す鉛筆がわり持つスマホ
たまたまと言って笑ったホームラン
同窓会何故好きだったあんな人
ののしれ弱みの私になる
鉛筆の先も私も丸くなる
鉛筆の先に虚と実取り交せる
酔って候女のまつりひいな
天邪鬼どうしてウマの合う不思議
震災日たまたま僕の誕生日
鉛筆に試されている去年今年
夕焼けに手を合わす癖三丁目
夕焼けに背中押されて帰る子等
最高のごちそう今も玉子焼
蕉子
正雄
和夫
眞澄
照

ひとみ
亀与子
寿美子
寛十郎
寛子
晶子
幸香
洋子
富夫
柳明
健二
よしひさ
泰子
雪菜
晶子
和子
里江
靖鬼
野薫
ヨシエ
宏子
初音
キヨミ

知れ渡った弱みに友があたたかい
寒いけどやっぱり入る露天風呂
我が子でも今は手を焼く反抗期
鉛筆も人も使われ身を削る
鉛筆の芯尖らせて書く苦情
ぶた饅は上手に二つには割れぬ
弱みだと知って親近感が湧く
葬式でたまたま会った恋敵
全く弱み見せない人でつまらない
紫の袂紗も春へ茶の香り
良いとこへ来はりましたとお裾分け
散りぎわを書くエンピツは横にする
葉子
正和
五月
歌留多
比ろ志
見清
美籠
朋月
かずお
奮水
哲男
晴美

事務所便り

「川柳塔」のホームページをご利用下さ
い。アドレスは表三面(裏表紙の中側)
の下部に表記しております。単に川柳
塔で検索しても表示されません。各地句会
や月例句会のご案内、翌月のホテル・ア
ウイナ大阪での句会の課題、選者等も
いち早くアップされます。イベント情報
や、先月の句会の秀句等もお楽しみ下さ
い。月例句会は、毎回昼間開催になって
以来、百十名を超えるご参加を頂いてお
ります。どなたでもご参加頂けます。参
加費は千円、十三時開場、場所はホテル・
アウイナ大阪です。ご参加をお待ち致
します。
(山岡富美子)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 みちのく	17日(土) 17時締切 運動会・いろいろ・生きる	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 稲見則彦
川柳 ねやがわ	18日(日) 14時締切 小売・カリスマ・悪い・自由吟	寝屋川市立総合センター 4階 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 内 川柳ねやがわ
川柳 藤井寺	18日(日) 14時締切 小説・みどり・席題は共選	藤井寺市立生涯学習センター・シユラホール 3F 近鉄南大阪線藤井寺下車南へ徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
豊中 もくせい 川柳会	19日(月) 13時40分締切 窮屈・にぶる・さびしい 自由吟	豊中市中央公民館 3F 阪急曾根駅・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
川柳 さんだ	20日(火) 13時30分締切 恋・ライバル・渡る・どンドン 自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
川柳塔 すみよし	24日(土) 14時15分締切 帯・オール・思いやり	住吉区民センター 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
和歌山 三幸 川柳会	24日(土) 12時30分開場 小・田舎・若葉	和歌山商工会議所 4階 第2会議室 和歌山市役所西隣 〒640-8570 ニュース和歌山編集部「和歌山三幸川柳会」
はびきの 市民会 川柳会	25日(日) 14時締切 母・揺れる・さばさば・ガラス	陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうもん 吟社	25日(日) 13時30分開場 バレバレ・土下座・恋かしら	開発ビル 2F ホール 鳥取市片原1-107 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南大阪 川柳会	26日(月) 18時開場 憲法・甘える・狭い・リベンジ	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都 塔の会	26日(月) 吟行 スベア・乱・問う	集合：JR稲荷駅 時間：午前10時 行き先：大橋家庭園(京都市名勝) 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
松露 川柳会	26日(月) 19時30分締切 幟・若葉・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口194-2 山本正光
西宮北口 川柳会	31日(土) 13時締切 40周年記念川柳大会	川柳塔2月号 49ページ参照
川柳クラブ わたの花	吟行 自然・広い・変わる・自由吟	吟行会 〒581-0012 八尾市小阪合町1-4-8 西川義明

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

5 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な ら	1日(木) 14時締切 守る・男・最近	奈良市立中部公民館 4F 奈良市上三条23-4 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
富柳会	3日(土) 14時締切 企み・風説・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL 0721-25-0603 川柳とんだばやし富柳会 池 森子
倉吉 川柳会	3日(土) 14時締切 残る・きらめく・すたすた	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 まつ え 社 吟	3日(土) 13時45分締切 顔・逆らう・硬い・減る	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366 錦織禮子
あかつき 川柳会	9日(金) 吟行・句碑めぐり 囁目吟・風・時事吟	集合：地下鉄「日本橋」駅⑩番出口 時間：午前10時出発 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川柳塔 さ か い	9日(金) 13時開場 ことば・担ぐ 折り句=たれそ	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
川柳大阪	10日(土) 14時締切 とことん・雑・平気	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
城北 川柳会	10日(土) 14時締切 掃除・伝える・しょぼしょぼ 自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線千林大宮駅下車③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
川柳塔 打 吹	10日(土) 14時締切 時・微妙・うずうず	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
八尾市民 川柳会	11日(日) 14時締切 性格・欲・掴む・雑詠	八尾神社内 西郷会館 3F 近鉄八尾駅西口・徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
川柳塔 わかやま 吟 社	11日(日) 14時10分締切 兼 題=空気・サイレン・わざわざ 課題吟=綱・縄・紐	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼 題 〒640-8453 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町2-208-5 柴原道夫
ほたる 川柳 同好会	13日(火) 13時30分締切 魚・匂う・再び	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール 蛍池駅駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
川柳 あまがさき	13日(火) 14時締切 煽てる・正体・こりこり・自由吟	尼崎女性センター・テレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
岸和田 川柳会	17日(土) 14時締切 五感・試す・わくわく・タブー	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2-13-19 中岡香代

柳界展望

全日本川柳協会賞

手鏡を磨くステップす
るために 小島 蘭幸
神戸川柳協会賞

政岡日枝子
どの音も愛して今は黄
昏に 木本 朱夏

★平成25年の奈良新聞奈
良柳壇秀吟賞に、同人の
次の句が選ばれた。

安土 理恵

うれしくて明るい紅を
選っている

★川柳明日香創刊19周年
全国誌上大会結果。

優 勝 石橋 芳山

美しいですねと軽く搔
き混ぜる

殺すかもしれぬ美し過
ぎるから

★創立85周年記念201
4ふあうすと川柳大会は

4月6日、兵庫県民会館
で開催。参加者267名。本

社同人成績。

神戸新聞賞

追憶の愛うたかたの花
筏 北野 哲男

特選は次の通り。

新築司副主幹も参加。

春だ春だと二十センチ
ほど飛ぶ 新家 完司
晩年の沖を視ている野
の一樹 木本 朱夏

窓際にちいさく吊るす
氏素性
★斉藤劭氏(理事・弘前
市)は、弘前川柳社第26
回林檎大賞を受賞。

修二会から春の息吹が
風に舞う 山野 寿之

★池森子さん(理事・富
田林市)は、川柳オホー
ツクの「流水集」鑑賞を
4月号より担当。

★ふあうすと川柳社、平
成二十五年年度紋太賞

★川柳オホーツク4月号
に、「大橋政良と酒」と
題して新川洋洋氏が大橋

正 賞 水野 黒兎

祭果て野に残照の村残
る

沖繩の海黙礼をする青
さ 他8句

政良氏(同人・砂川市)
を紹介。

準 賞 居谷真理子

◇江畑哲男・台湾川柳会
編「近くて近い台湾と日
本」日台交流川柳句集」

生かされて抱けぬ卵を
産んでいる 他4句

☆西出楓楽理事長はNH
K学園生涯学習フェステ
イバル・美作国建国13

★第2回卑弥呼の里誌上
川柳大会には五〇四名の
応募者があり本社同人の

00年美作全国川柳大会
の選者として3月15日、
17日岡山県津山行。他に

産んでいる 他4句

倉吉市 鈴木たけ代
紹介者 岡崎美知江
川本真理子

特選は次の通り。

次回 5月7日(水)AM10時

新同人紹介

関

— 楓楽・森子推薦

よしみ

▼ 報 ▲

山本三郎氏(理事・寝
屋川市)は4月3日逝去。

大阪市 能勢 良子

行年84。通夜告別式には
楓楽理事長、亜成監査役、
博泉理事他、同人が参列。

南河内郡 大浦 福子

▽寄贈図書△

東大阪市 織田 登子

◇江畑哲男・台湾川柳会
編「近くて近い台湾と日
本」日台交流川柳句集」

西出 楓楽

常任理事会 4月7日(月)

大阪府 藤田 澄子

①第20回川柳塔まつり、
川柳雑誌・川柳塔90周年
記念大会②合同句集③定
例確認事項④各部報告事
項⑤その他

木本 朱夏

▽新誌友紹介△

川柳雑誌・川柳塔90周年

倉吉市 鈴木たけ代
紹介者 岡崎美知江
川本真理子

東京都 奥田みつ子

紹介者

次回 5月7日(水)AM10時

井笠川柳会 第15回 笠岡大会

とき 5月24日(土) 開場 9時30分
開会 午後1時 締切 午前11時30分
ところ 笠岡市保健センター(ギャラクシーホール)
笠岡市十一番町1-3 TEL.0865-62-5701
笠岡駅から④バスで伏越下車 徒歩4分

課題と選者

事前投句「過去」(2句)

山之内さち枝・河原 千壽・北川 拓治
天位の中から1名に市長賞として句碑を贈呈
所定の用紙または便箋に2句併記のうえ、
住所・氏名・電話・所属柳社明記。投句料
1000円と共に**4月30日必着**で送付のこと

投句先 〒714-0081 笠岡市笠岡2289
井笠川柳会 宛
TEL.0865-62-6200 (戸田さだお)

当日投句 (各題2句)

「寄付」平山 繁夫・「暗算」小島 蘭幸
「縁談」村上 水筆・「遠慮」久本にい地

当日席題 (1句) 高木 勇三

当日参加料 2000円(弁当・大会誌)
主催 井笠川柳会

京都塔の会 春の吟行句会

日時 5月26日(月) 10時 JR稲荷駅集合
行先 大橋家庭園(京都市名勝)
京都市伏見区深草開土町45-2
TEL 075-641-1346

昼食・句会場 伏見稲荷大社前「玉家」
TEL 075-641-0103

兼題 「当日雑感」「スペア」「乱」「問う」
各題3句

会費 4500円(当日いただきます)

投句先 都倉求芽あて 〒600-8428
京都市下京区諏訪町通松原下る弁財天町 328-202
TEL 075-351-4109

締切 句会場の都合により先着30名まで
申込み 都倉求芽まで

◎大橋庭園 稲荷大社本殿から北へ約
5分。個人の邸宅の庭園ですが京都市
名勝に指定されている。一般公開
はなし。12基の石灯籠・各種多数の
庭石・特に水琴窟は他とは違った音
響が楽しめる。

静岡たかね川柳五百号記念 全国誌上川柳大会

★課題 「魚」2句詠・18名共選

★選者 浪越 靖政・高瀬 霜石
浅利猪一郎・大野 風柳
赤井 花城・赤松ますみ
津田 暹・江畑 哲男
川上 大輪・板垣 孝志
小島 蘭幸・新家 完司
真島久美子・加藤 鯉 他

★参加費 1000円(切手不可)

★締切 5月31日

★用紙自由・清記します

★各選者特選および合点20位まで呈賞

◎投句先 〒421-2106
静岡市葵区牛妻2095-13
加藤 鯉 宛

問合せ先 TEL 09-1989-4012

NHK学園

第23回 能美川柳大会

日時 7月5日(土) 13:00~16:00

会場 石川県能美市根上総合文化会館

事前投句の部

課題 「松」 久崎 田甫 選
「丸い」 山田 圭都 選
雑詠 (共選) { 島田 駱舟 選
西出 楓楽 選

投句締切 5月16日(金) 消印有効

投句料 ①雑詠 2句の場合 1200円
②雑詠2句と課題「松」「丸い」各
2句計6句の場合 2400円

送金方法 郵便振替・郵便小為替・現金書留
(切手不可)

問合せ・投句先

〒186-8001 東京都国立市富士見台2-36-2
NHK学園 能美川柳大会事務局
TEL 042-572-3151(代)

編集後記

★羽根ペンで書きし嘗ての文学よ 薫風

★大阪府泉大津市は毛布の製造国内シェア90%を誇る。市制70周年を記念して昨年「泉大津市オリアム随筆賞」を創設。審査員は難波利三・木津川計・眉村卓・有栖川有栖の諸氏。「オリアム」とは「織り編む」のこと。織維の街ならではのネーミングだ。

★某月某日、第二回オリアム随筆賞表彰ならびに「エッセイの書き方」フォーラムに参加。パネリストは前述の審査員諸氏。開会を待つ会場には中高年と思しき男女百数十人、男女比1対1か、読書をしたたり配布された資料を目を通したり。ケータイやスマホを覗く人は見当たらず、何故か

ほっとする。

★エッセイを上手に書くコツは？「人生経験が多いこと。年齢ではなく深く追究する。切り込みが大切。読書量がものを言う。本を読まねば文章は書けない。失敗談が良い。自慢話は駄目」以上は、木津川先生。語り口にも文章にも定評のある、先生ならではの言葉には納得。

★「アマチュアは思いのたけを書けば良い。小説・映画の引用・経験から発展させる。ユーモアも交えて、表現がオーバーにならないように。煽らずにテンションをあげず、クールに書く」は、エッセイにも多くのファンをもつ有栖だけに、説得力がある。

★心に沁みしたのは難波利三氏のお言葉「ものを書くことは恥をかくこと、覚悟が要る」。川柳を始め

ひとこと

発表誌が届いて

四月の初めに第二回卑弥呼の里川柳誌上大会の作品集が届きました。桜の季節にふさわしい華やかな表紙に胸がわくわくしました。遠方の柳社の句報を居ながらにして手に出来るのも、誌上大会のお陰です。井の中の蛙にならないように常心がけ、足を運ばない代わりにと投句をしています。多

くの選者に選をさせていただけると、また他県の柳社の方々の句が読めることも楽しみです。

地方の柳社の事務局をお預かりしている関係で、各地から募集チラシがたくさん届きます。柳社によつては秋田小町やコシヒカリの賞品も魅力的です。

今回の卑弥呼の誌上大会の賞品の有田焼も、いつかはゲットしたいものです。

(古久保和子)

た頃の指導者が「恥を書くこと」とおっしゃたことを思い出す。さて顧みて恥をかく覚悟は出来るだろうか……。

★参加するには得るものが多かったらう。とはいえ、一流のプロに具体的にコツを教わった割には、この編集後記がイマイチなのは……。ローマは一日にして成らず。

(朱夏)

○直木賞作家で八尾市の天台院住職を務めた、今

東光氏の「東光太平記」の直筆原稿が大阪市内で見つかり、4月30日改装オープンする市立図書館内に開設予定の「今東光資料館」で展示される。

○原稿は推敲の跡も多く、47年出版の単行本と内容が一部異なるなど、流行作家として活躍した当時の創作活動を知る貴重な資料という。(3月26日産経新聞より引用)

○推敲といえ、川柳をばなしはダメ、必ず推敲するように」と教えられた。何度も推敲するうちに、初めに出来た句と全く違う句になった事もたびたび……。

○句箋については、4Bか6Bの濃い目の鉛筆で誤字脱字に注意し、楷書で丁寧に書くのが選者に對する礼儀で、投句数が多いと、読みづらいものは没にされやすいとも言われた。

(まつお)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(7月号)

地名

市都
道府
姓
雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「リラックス」(5月15日締切)

7月号発表

大内 朝子 選 — 共選 — 竹治ちかし 選

B A

--	--

地名

市 都
道
府 県
姓 雅 号

B A

--	--

地名

市 都
道
府 県
姓 雅 号

切らないで下さい

きりとりせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

6月号発表 (5月15日締切)

初歩教室 「趣味」(3句)	一路集 (3句) 「栄養」 「テーマ」 「冴える」	檸檬抄 (2句) 「リラックス」	愛染帖 (3句)	水煙抄 (8句)	川柳塔 (8句)
山口光 久担当	七反田順 子選	大内朝子 共選	新家完司 選	川上大輪 選	小島蘭幸 選

8月号

檸檬抄	「世渡り」
一路集	「脳」「ミーティング」 「おまけ」
初歩教室	「しつこい」

第32年度 夜市川柳募集

最終回「地獄」小島蘭幸選
ハガキに3句 5月20日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 川柳塔さかい

定価 八百円 (送料86円)
半年分 五千円 (送料共)
一年分 九千八百円 (同)

二〇一四年(平成二十六年)五月一日発行

発行人 小島和幸
編集人 木本朱夏
印刷所 美研アート

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一―一四―一七
花野ビル201号室

発行所 川柳塔社
電話(〇六)七九三三九〇番
振替〇〇九八―四上―五八四七九番

本社5月句会

とき 5月7日(水) 13時開場・13時40分締切
―開場時間、締切時間を変更しています。ご注意ください。―
ところ アウイーナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19―12 電06・6772・1441
おはなし「本の愉しみ」

兼題	「血」	木本朱夏選
席題	「タツチ」	長浜美籠選
	「からから」	北野哲男選
	「拝む」	岩佐ダン吉選
	「愉快」	森松まつお選
		小島蘭幸選

会費 1000円
投句料 500円(切手可)
(各題2句以内)

本社6月句会

6日(金) 午後1時から
兼題「拍手」「備える」「終」
「なんで」「強引」

「川柳塔」への投句について

(1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。

(2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。

(3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。

(4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

杵つき製法の「すりごま」
オニザキの

つぎごま



長い間親しまれてきた
オニザキの「すりごま」は、
名称を変更し、パッケージ
ジを一新いたしました。

オニザキのすりごまは、
元々すり鉢ですったゴマ
ではなく、杵と臼を使った
杵つき製法で出来た「すり
ごま」です。

今までと変わらぬ、風味
豊かな味わいをご堪能く
ださい。



株式会社 オニザキコーポレーションセルス
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL  0120-30-5050

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023

TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021
(日本橋川村ビル4F)

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>